

A Study on Improvement of Cross-Cultural Understanding and Cross-Cultural Exchange

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yaezawa, Michiko, Ohta, Hideki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034879

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



KAKEN
1996
67

金沢大学

異文化理解・異文化間交流促進のための 実践的研究

(課題番号：07610117)

平成7年度～平成8年度科学研究費補助金
(基盤研究C)

研究成果報告書

平成9年3月

研究代表者 八重澤 美知子

(金沢大学留学生センター)

異文化理解・異文化間交流促進のための
実践的研究

(課題番号：07610117)

平成7年度～平成8年度科学研究費補助金
(基盤研究C)

研究成果報告書

平成9年3月

研究代表者 八重澤 美知子

(金沢大学留学生センター)



8000-55267-1

金沢大学附属図書館

はじめに

本報告書は平成7年度から8年度にかけての2年間に渡り、文部省科学研究費補助金により行われた「異文化理解・異文化間交流促進のための実践的研究」（基盤研究（C）、課題番号：07610117）の成果についてまとめたものである。

研究班に関しては、下記の通りである。

研究代表者：八重澤美知子（金沢大学留学生センター）
研究分担者：太田 秀樹（金沢大学 工学部）
研究協力者：桜田 千采（金沢大学留学生センター・非常勤）
島 弘子（金沢大学留学生センター・非常勤）
鎌田 倫子（金沢大学留学生センター・非常勤）
古本 裕子（金沢大学留学生センター・非常勤）
早川 幸子（金沢大学留学生センター・非常勤）
馬 志強（金沢大学 工学部）
本間 友巳（金沢市教育センター、金沢大学・非常勤）
石川 正章（石川県警本部科学警察研究所）

研究班内での一応の分担は、各研究報告それぞれに担当者の氏名を掲げた。

また、研究経費は、

平成7年度	1, 200千円
平成8年度	600千円
	<hr/>
	1, 800千円 である。

なお、本研究に関する成果の発表は、「異文化間教育学会」、「金沢大学留学生センター紀要」等に掲載予定（印刷中）であり、これには、研究班の八重澤美知子、島弘子、馬志強、桜田千采が著者、口頭発表者、連名者となっている。それと並行して、本研究の成果は「異文化理解のためのハンドブック」としてまとめ、広く留学生の関係者への配布を予定している。

外国人留学生を対象とした研究はこれ迄に多く行われ、日本での留學生活の実態調査を始め異文化との取り組み方、関係の深化の方略やその際の阻害要因が検討され、それぞれに効果をあげてきた。一方、留学生を受け入れる日本人の側の研究は次第に行われつつある。著しく等質性が高い集団—学校、地域、社会—にあっては、従来のように日本人だけを念頭に対処することに限界があるため、異なった文化とどのように共存していくかの模索が始められよう。本報告書がその際の基礎的データとなれば幸いであるし、実践研究の蓄積を基幹部分と考える本研究は、今後も継続されて行くものである。

研究にご協力頂いたすべての方々に感謝申し上げます。

平成9年 3月11日

研究代表者 八重澤美知子

目 次

はじめに

I. 異文化接触の現状

1. 学校での外国人児童生徒指導・援助の現状とその課題 1
—担任教師への調査を通して—
研究担当者：本間友巳
2. ボランティア学生の異文化接触と理解の深化 7
研究担当者：鎌田倫子、馬志強、島弘子、八重澤美知子
(松下)
3. 指導教官の異文化接触—留学生指導を通じて— 19
研究担当者：馬志強、八重澤美知子、太田秀樹
(松下)

II. 言語理解の問題と解決のための方略

4. 接触場面における母語話者のコミュニケーションストラテジー 31
—経験の少ない母語話者のフォリナートーク—
研究担当者：古本裕子
5. 「やさしい日本語」に関する日本人の意識 42
研究担当者：島弘子、八重澤美知子、桜田千采、早川幸子
(松下)
6. 日本人の言語意識の比較 58
—日本語母語話者に対する発語と非母語話者に対する発語—
研究担当者：島弘子

III. 異文化理解・異文化間交流促進のためのハンドブックの作成

7. 異文化接触場面で生ずる問題 67
研究担当者：桜田千采
8. 異文化理解・異文化間交流促進のための基礎的研究 79
—ハンドブックの作成に向けて—
研究担当者：八重澤美知子、桜田千采、島弘子、石川正章、太田秀樹
(松下)

学校での外国人児童生徒指導・援助の現状とその課題

—担任教師への調査を通して—

本間友巳

[問題と目的]

周知のように、留学生受け入れ10万人計画や入管難民法改正などによって、日本国内で生活する外国人が増加している。それに伴い、日本の小中学校の中に、日本語のわからない外国人児童生徒が急増している。文部省の調査（文部省，1996）では、日本語教育を必要としている外国人児童生徒は、全国の小中学校で11,806人に達しており、1991年の調査の5,463人に比べ、2倍以上の増加率を示している。

このような現状を考えると、外国人児童生徒の学校適応を巡る諸問題への研究は急務と言えよう。実際、外国人児童生徒を多く受け入れている学校を中心に、国際理解教育や外国人子女教育の実践や研究が行われている（中西ら，1991）。また、日本語の習得を目指した教材開発（文部省，1992；1993）や、日本語教育が必要な外国人児童生徒を対象とした日本語教室の設置も徐々に進んでいる。

しかし、彼らが在籍している学校は、1991年1,973校から1995年3,848校へと急増し、在籍人数別学校数をみると、1人校が1,785校（47%）と最も多く、以下、2人校が815校（21%）であり、在籍人数1人から5人までで全体の87.5%を占めている。さらに、出身地の多様化も進み、彼らの母語は48か国語に及んでいる。このような現状は、外国人児童生徒の拡散と多様化が進んでいることを示しており、多くの学校で組織的な指導・援助が行えず、彼らが特別な配慮を受けづらい状況を暗示している。

実際、高橋らの調査結果（1996）によれば、外国人児童生徒の適応を援助する手段を講じていると答えた教師は、全体の約三分の一に過ぎず、このような状況を示唆していよう。筆者の研究（本間，1996）でも、事例として取り上げた2名の外国人児童に対して、学校全体としての組織的な取り組みはほとんど見られなかった。むしろ、日本語のわからない彼らへの指導・援助は原則的に担任教師に任せられ、担任個人にかなりの物理的、心理的な負担が強いられていた。例えば、イギリス人児童Bを担当した小学校教師は、日本語を学習する意欲のまったくないBやその保護者に対して、身振りを交えた片言の英語で対応せざるをえなかった。また、学級活動の時間などにBを先生にしてみんなで英語の勉強をするなど、Bが学級にとけ込むような工夫をしたり、算数の学力保持を強く望む保護者の要望に応じて、算数の授業中は最後の10分程度を割いてBの個別指導に当てることなどの取り組みを行ったと、Bの担任教師は述べている。これは一例に過ぎないが、外国人子女受け入れのためのセンター校や研究指定校を除いて、一般の学校に所属する多くの担任が、Bの担任同様、かなりの個人的努力をしなければならない状況に置かれていると推測できる。

そこで、本研究の目的は、日本語教育を必要としている外国人児童生徒を担当する教師を対象に調査を実施し、担任教師から見た指導・援助の現状とその課題を明らかにし、今後の学校での

外国人児童生徒への指導・援助のあり方について検討を加えることである。

[方法]

1. 調査対象

石川県内公立小中学校で、日本語教育を必要としている外国人児童生徒を担当している教師34人(表1)で実施した。

表1 担任教師の性別と校種

	小学校	中学校	計
男性	5	3	8 (23.5%)
女性	23	3	26 (76.5%)
計	28 (82.4%)	6 (17.6%)	34

2. 調査内容

「外国人児童生徒の担任経験」、「学校の受け入れ体制」、「指導・援助の留意点や苦勞した点」、「学校での受け入れを巡る今後の課題」などに関する質問項目を作成した。さらに、「担任している外国人生徒とその保護者の実態」、「クラスの子供達の様子」に関する質問項目を付け加え、評定尺度や強制選択や自由記述などの方法で調査を実施した。

3. 調査手続き

1995年11月、外国人子女教育に関する研修会に参加した、日本語教育が必要な外国人児童生徒を担当している教師に対して、無記名の質問紙法による一斉調査を行った。

[結果と考察]

1. 外国人児童生徒の担任経験

現在の外国人児童生徒以外に、過去に同様の児童生徒を担当した経験の有無を尋ねたところ、5人(14.7%)が「ある」と答えた。県内に在籍する外国人児童生徒の総数からみて、かなり高い率と言える。過去に外国人児童生徒を担当した教師に、「もう一度担当してみたいか」と尋ねた高橋らの調査(1996)でも、「はい」と答えた教師が51.9%（「十分な時間が与えられれば」などの条件付きの「はい」も含めると60.9%）で、多くの担任が、外国人児童生徒を担当することに前向きな気持ちを抱えていることが伺える。実際、自由記述の中にも、過去に担任した経験への感想として、「国は違っても、子供は同じだと実感できた」「担任することで、視野が広まった」などと、複数の担任が述べている。負担は大きいものの、彼らを担任することで教師としての成長を実感できたことが、再度担任する大きなきっかけになっていると考えられる。このことが、過去に担任した率が高い大きな理由であろう。

2. 外国人児童生徒の実態から

第1に、調査した担任のクラスに所属する外国人児童生徒は、小学生28人、中学生6人で、小学生が全体の82.4%を占めていた。年齢の平均は10.5歳 (SD 2.91)であった。中学段階になると、将来の進路を考えて帰国したり外国人学校や国際学校に進学する傾向があり、小学校教師の方が外国人児童を担任する機会が多いのは、一般的な傾向と言えよう。また、出身国は10カ国 (中国11人、ブラジル11人、フィリピン2人、アルゼンチン2人、アメリカ2人、ロシア2人、イギリス1人、香港1人、ベトナム1人、パラグアイ1人) に及んでおり、比較的外国人の少ない石川県でも、外国人児童生徒の多様化が進んでいる。この出身国の多様化を担任する教師側から見ると、個々に即した指導・援助がより一層必要になっていることを意味しており、担任の物理的、心理的負担が増大していると考えられる。

第2に、来日時から現在に至るまでの日本語力の推移 (図1) をみると、大幅に向上していることがわかる (T-検定の結果、すべての項目で有意な差あった)。学校以外の場で日本語を学習する機会があるのは、3人 (8.8%) に過ぎず、日本語力の向上は、学校生活の影響が大きいと考えられる。自由記述をみると、「はっきりと話しかけた。伝えたいことや聞きたいことを言えるよう繰り返し練習し、日記も書かせた」「読字や書字力が不足がちなので、読み仮名をつけるなどの配慮をした」「会話や作文での助詞の使い方に注意した」など、担任なりの努力や工夫が文面から伺える。

その一方で、「多忙で、特別な対応ができなかった」「言葉や教育レベルの違いから、自習させることが多かった」と答えた担任も複数おり、担任の指導以外に、28人 (82.4%) の児童生徒が通室する日本語教室 (週2回程度) での学習効果が大きな影響を与えていると考えられる。事実、「日本語教室に通室してから、日本語力は伸びましたか」を4件法で質問したところ、「変化なし」と答えた担任はなく、84% (「非常に伸びた」53.8%, 「かなり伸びた」34.6%) の担任が、日本語教室での学習効果を積極的に評価した。このことから、日本語教室での取り組みが、外国人児童生徒の日本語力向上に大きな力となっていることがわかる。このことは、担任にとっても日

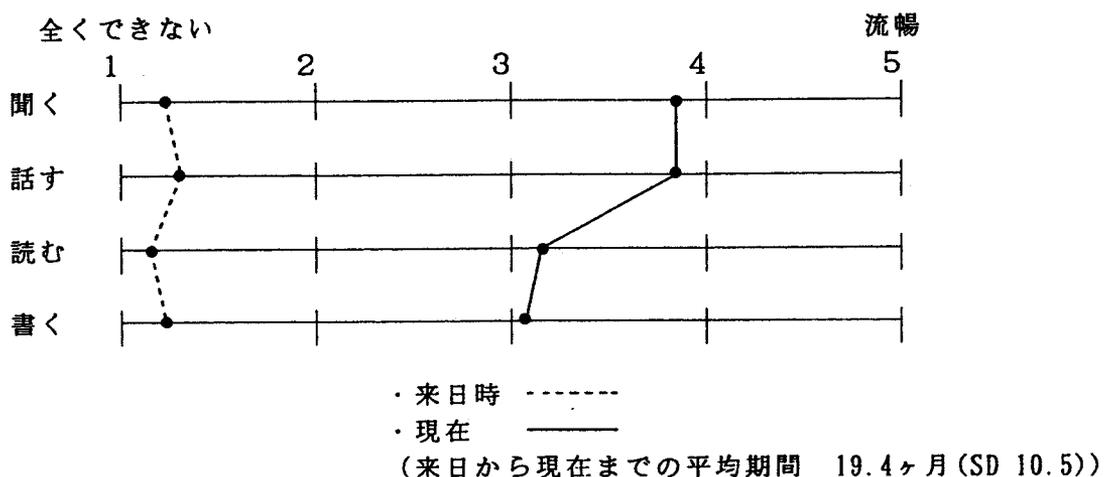


図1 日本語力の推移 (担任の評定)

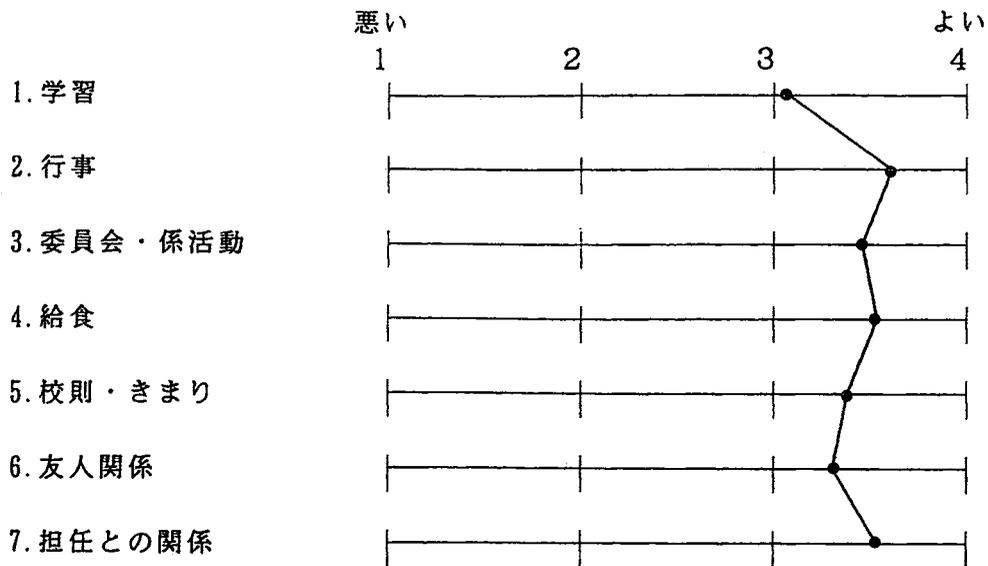


図2 現在の学校での適応状態（担任の評定）

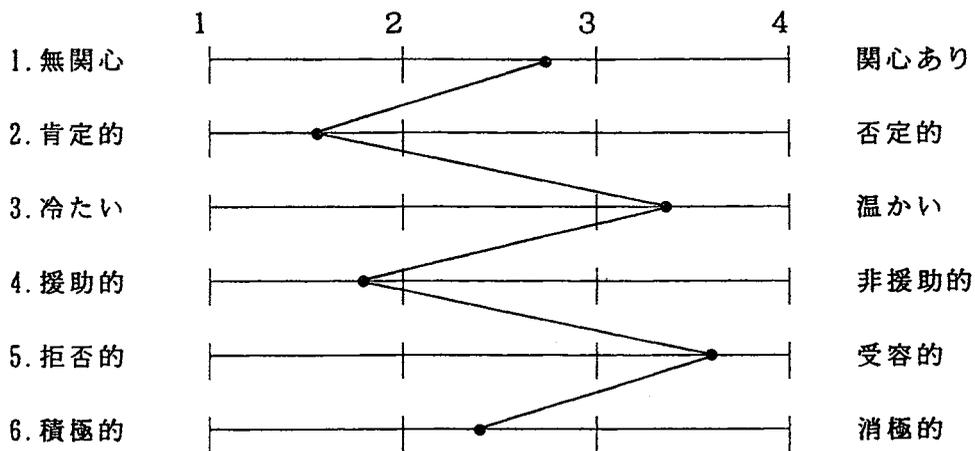


図3 現在のクラスの子供達の外国人児童生徒への接し方（担任の評定）

本語教室が大きな援助になっていることを示していよう。今後、日本語教室数を増やし充実させていくことが、担任の負担を軽減し、受け入れを容易にする大きな条件と言えよう。

第3に、現在の学校適応に関しては、図2からわかるように概ね良好であった。また、受け入れる側のクラスの子供達の彼らへの接し方にも、問題は認められなかった（図3）。しかし、外国人児童生徒とクラスの子供達の間を良好なものにするために、担任は様々な努力や工夫をしていることを自由記述から読みとることができる。例えば、「4月当初、『おい、中国人』とからかう子がいた。差別のないよう子供達の言動に気がつけた」「本児が遊びとでも思っている、周りがそう受け取れないこともあり、理解させるのに苦労した」「喧嘩など時間をかけて話をきき、

納得させた」「道徳などを利用して、お互いの違いを認め合うことの大切さを説いた」などの記述が多くみられた。また、従来の日本の義務教育ではきわめてまれであるが、日本語力や学力の関係で異年齢（一般に年長者）の外国人児童生徒を受け持つことがある。このような子供達に対して、「他児から孤立しないような配慮が必要だった」と担任した多くの教師は述べていた。

しかしながら、このような努力や工夫を通して、「クラスがまとまった」「助け合える雰囲気クラスになった」などと記述する担任もいて、上述したような努力や苦勞も多い半面、実りも大きいところに外国人児童生徒を担任する魅力があるのであろう。

4. 外国人児童生徒の保護者との関係

「来日時、日本語で保護者と懇談ができましたか」の質問に、「まったくできない」と答えた教師は、48.0%であった。「少しできた」24.2%を加えると、全体の72.2%の担任が、保護者との直接的な懇談を困難に感じていたことを示している。「現在、日本語で懇談できますか」の質問で、懇談に困難を感じている担任は55.9%（「まったくできない」14.7%、「少しできる」41.2%）と、ある程度改善されたものの、今なお過半数の担任が困難を感じていることがわかる。

それでは、日本語のわからない保護者と「どのような方法で、話し合いましたか」の問いに対して、知り合いや親族（南米からの日系人や中国残留孤児帰国者の場合、身近に日本人の親戚がいることがある）に通訳をお願いしたと、多くの担任が答えていた。しかし、常時可能ではなく通訳なしに話し合わねばならないこともしばしばあり、「母は学校へよく来るが、母の考えがわからず戸惑うことあり」「折りを見て連絡したが、意志疎通が難しかった」など、自由記述から戸惑う担任の姿を伺い知ることができる。

しかしながら、この戸惑いは、単に言語理解に留まらず、習慣や文化の理解に関わる問題でもあろう。例えば、渡辺（1995）が、学校から呼び出され泣いてしまったブラジル人保護者の事例を紹介しているが、これは、学校に呼ばれることが極端に悪いというブラジル人保護者の母国での経験に基づく認知が影響していると考えられる。この意味では、保護者にとって担任を中心とする学校との関わりは、日本の習慣や文化に驚きやショックを受けたり、逆に理解するための具体的な場になっていると言えよう。同時に学校側にとっても、外国人保護者との関わりは、異文化理解の絶好の機会である。しかしながら、このような相互の異文化理解という視点からの保護者との関係への記述はほとんど見られず、全般に「指導する側」と「指導される側」という、比較的固定的な見方に留まっているように思われた。この辺りは、今後、学校が異文化に属する児童生徒やその保護者を受け入れていくための大きな課題でもあろう。

さて、「保護者の学校への期待」を担任に選択してもらったところ、1位「日本語の向上」37.0%、2位「友達をつくる」33.3%、3位「勉強がわかる」22.2%であった。2位と3位は対人適応と学習適応を示しており、外国人保護者のみならず、一般の保護者の期待と共通している。この2つの期待を具現するために、日本語の向上が不可欠と考えているのであろう。

しかし、日本語向上への期待に関して、筆者の研究（1996）でも指摘したように、欧米先進国出身者（特に、英語圏）と発展途上国出身者とは異なっている可能性がある。おそらく発展途上国出身の方が、日本語向上への期待が高いように思われる（本調査でも、欧米出身者が3人のうち、永住希望の1人を除いて、2人の担任とも「友達をつくる」を選択していた。さらに、自由記述でも2人の欧米出身者の印象を「日本語の学習に消極的」と記述していた）。その理由

として、発展途上国出身者のかなりが中国残留孤児や南米出身の日系人であって、日本文化を受容する素地を持つ点、さらに定住や還流する可能性の高い点（梶田, 1994）があげられる。この辺りの文化・社会的な違いをも考慮に入れながら、担任を中心とする学校側は、外国人児童生徒の対人適応と学習適応を促進していく必要があるであろう。

5. 学校の指導・援助体制

「校内に外国人児童生徒を受け入れるための組織（校務分掌）がありますか」との質問に「ある」と答えたのはわずか26.5%で、すべて日本語教室の設置校であった。また、「校内に国際理解教育のための組織（校務分掌）がありますか」との質問に、「ある」と答えたのも29.4%に過ぎなかった。外国人児童生徒が在籍する学校ですら、指導・援助組織が3割に満たない状況であるとすれば、外国人児童生徒のいない多くの学校では、このような組織が存在しないと推測できよう。さらに、「本研修会以外に、今年外国人子女教育に関する研修を受けましたか」との質問に対して、「まったくない」と答えた担任は90.9%にのぼっており、学習の機会がほとんどないことがわかる。また、学年会や職員会議で話し合う機会も「まったくない」と15.2%の担任が答えている。職場の同僚に個人的に相談する程度で、組織的なサポートを受けることもなく、外国人児童生徒を抱え模索している多くの担任の姿が浮かび上がってくる。自由記述の中にも、今後の課題として「教師間の相互理解」「ゆとりを持って受け入れられる学校体制づくり」などの切実な要望が出されており、学校の指導・援助体制づくりは急務と言えよう。

また、「全県的なネットワーク」「専任教師の加配」「日本語教室の増設」などの行政への要望も見られ、増加する外国人児童生徒への教育行政からの積極的な対応も、今後不可欠であろう。尚、本調査では指摘がなかったものの、滞在が長期化するにつれて母語保持に関する対応や配慮が、今後重要になってくると考えられる。日本語が上達しない保護者と母語を忘れていたり使いたがらない子供との間で、コミュニケーションが困難になっている例も実際にあり、教育行政として今後対応を考えていかなければならない問題であろう。

[引用・参考文献]

- 本間友巳 1996 外国人児童の学校適応と受け入れを規定する要因 カウンセリング研究 Vol.29, No.1
- 梶田孝道 1994 外国人労働者と日本 日本放送協会
- 文部省 1992 にほんごをまなぼう ぎょうせい
- 文部省 1993 日本語を学ぼう2 ぎょうせい
- 文部省 1996 日本語教育が必要な外国人児童・生徒の受け入れ状況調査 文部省
- 中西 晃・杉山光男・長谷川順義 1991 教室からの国際化 ぎょうせい
- 高橋正夫・Sharon S.Vaipae 1996 「ガイジン」生徒がやって来たー異文化として外国人児童生徒をどう迎えるかー 大修館書店
- 渡辺雅子 1995 出稼ぎ日系ブラジル人 明石書店

ボランティア学生の異文化接触と理解の深化

鎌田 倫子・馬 志強・島 弘子・八重澤 美知子
(松下)

I はじめに

金沢大学留学生センター工学部教室では、留学生と日本人学生の友好を促進し、留学生を支援するために、今年度、試験的に異文化交流会を企画、実施することになった。この報告は、異文化交流会の実施状況と、その中で留学生と接触を持った日本人学生の異文化理解がどのように高まっていったかを、面接調査した結果から考察したものである。

II 異文化交流会の実施状況

留学生センター工学部教室では、留学生センターの学生相談担当教官と工学部留学生担当教官、工学部担当日本語教師らが、常々、留学生と日本人学生の接触が少ないことを憂慮していた。留学生は留学生とだけ付き合う生活の中で、日本語力の進歩も、日本社会への適応も遅くなりがちである。また、日本人学生も、留学生との接触が少なく、留学生に対する理解も乏しいことが問題とされていた。留学生の間からも、もっと日本人学生と話をしたいという要望や、日本人学生と友達になりたいという希望も寄せられていた。こうした要望に応え、日本人学生にも、留学生に対する理解を高め、留学生を支援する態勢を作ることを目的として、異文化交流会が企画された。

交流会の開始に先立ち、留学生には日本人とどのような活動がしたいか、アンケート調査を行った。一方、日本人のボランティア学生を募って、昼食時に準備会を開き、希望する活動の種類や活動できる曜日などを聞き、発足会として、茶話会の準備をした。

96年度の工学部異文化交流会は、5月31日、茶話会を発足集会として、活動を開始した。交流会の行事として、茶話会(5/31)、バーベキューパーティー(7/26)、ポトラックパーティー(11/5)の三つを主催した。また、通常活動として、毎週木曜日と金曜日の2回、4時から5時まで、日本語授業の後の教室で、交流談話会を行った。談話会は当初、アンケートの結果により、金曜日だけ開催する予定であった。しかし、はじめの数回、参加する留学生が非常に多く、数人の日本人ボランティア学生では手が回らなかったことと、留学生の日本語力に大きな差があることから、初級用のクラスを木曜日に別にして、木曜日と金曜日の2日になった。行事とその実施状況は以下の通りである。

1 行事

①茶話会(5月31日) 日本語の教室で、異文化交流会の発足茶話会を開催した。留学生12名、日本人学生5名、留学生担当教官2名、日本語教師5名が出席した。ボランティアの学生が、ソフトドリンクとスナック菓子を準備し、サンドイッチを注文した。自己紹介、お菓子を食べながら雑談、写真撮影、歌を歌って、にぎやかに終わった。その後、異文化交流談話会が毎週、始まった。

②バーベキュー・パーティー(7月26日) 夏休み前に工学部の敷地内で、バーベキューパーティーを開いた。留学生14名、日本人学生10名、留学生担当教官3名、日本語教師3名が参加

した。3台のバーベキューコンロで、イスラム教の学生のために肉の種類を分けて焼き肉をした。ビールを飲み、果物を食べ、雑談した。留学生も買い出しや野菜の準備に参加し、夜9時過ぎまで盛況であった。

③ポトラック・パーティー(11月5日) 金大祭の後夜祭を兼ねて、料理持ち寄りのポトラックパーティーを開いた。留学生4名、日本人学生4名、留学生担当教官2名、日本語教師2名が参加した。日程が工学部の会と重なって、こじんまりと少人数だった。中国の餃子、ガーナの鳥シチュー、タイのマリネ、日本の手巻き寿司と各国の料理が揃った。赤トンボの歌をはじめ、各国の歌を歌い、少人数でじっくりと話が出来て良かったと参加者には好評だった。

2 交流談話会の経過

6月7日～12月19日まで、計18回の異文化交流談話会を開いた。出席者は、初日の14人を最高に、誰も来なかった日も2日あり、日本人学生平均2.7人、留学生は平均4.0人の出席で、のべ100人以上の日本人学生、留学生が参加した。出席人数に入っていないが、留学生担当教官、日本語教師も時々参加した。特に前期は盛況で、合計出席者の平均は11回で8.1人であった。発足初日は、留学生が10人に、日本人学生4人で、留学生6人に日本人学生1人の日もあり、相手をしきれないほどだったが、回を追って少なくなった。後期には留学生0人の日が3回あり、自然消滅状態で12月末で打ち切った。

日本人学生が4年生中心だったため、後期は忙しくなって、参加できなくなった。都合で教師も参加出来ない日が続き、留学生も日本人学生も少なくなった。最終回は留学生だけで、交流談話会の反省会をした。

<留学生の意見> 12月19日、最終回参加者、留学生(8人)による反省会。

- *週に2回は多すぎる。1回で良いが、留学生は、日本語のレベルで分ける必要がある。
- *漫然と話をするのではなく、月1回でも話題を決めて討論にしてはどうか。
- *イベントがあったことを知らなかった。連絡方法を改善して、来年も実施して欲しい。

<指導者側の反省>

- *留学生の希望で、教師の来られない日が活動日となったのが良くなかった。スタート時の会の運営のまずさが留学生を遠ざけたのではないか。レベル分け、人数の配分、話し合いの方法をもっと考えるべきだった。
- *留学生も、日本人学生も、相手が来ない日があると、次回は来なくなるので、どちらの側も参加者が0にならない工夫が必要。しかし、強制は嫌との声もある。
- *イベントは周知徹底が不足していた。掲示だけでは不十分である。
- *留学生の参加は、教師の出席に左右され、自主的な参加ではなかったし、活動自体が学生だけによる自律的な活動になるには至らなかった。

今年度は、予備活動段階なので、この反省を参考に来年度の活動態勢を考える。

Ⅲ 異文化交流調査

異文化交流談話会に参加した日本人学生ボランティアの、異文化接触による意識の変化を捉えるために、面接調査を行った。

1 調査方法

1.1 対象

日本人学生ボランティア 5 名と、前期に参加した24歳の日本語教師 1 名に、6 月に第 1 回面接調査を行った。後期の 2 月に第 2 回の面接調査を行ったが、第 2 回ができたのは学生 2 名のみで、日本語教師は質問紙への回答のみとなった。

1.2 内容

質問紙をもとに半構造化面接により調査した。項目は以下の通りである。

〈1 回目の面接〉

①ボランティアをやる则どんな体験ができるか②ボランティアになってどんなことで苦勞するのか③どんなことを一緒にしたいか④どれ位会いたいか⑤どんなことをサポートする予定か⑥留学生から得られるもの⑦ボランティアをして勉強になると思われることや得られること⑧⑨留学生との付き合いで、誤解が生じやすいのではないかと思われることや心配なこと⑩これまで日本人以外の友人を持った体験⑪どんな時、考えの違いや習慣、やり方の違いを感じたか⑫その他

〈2 回目の面接〉

①ボランティアをやってどんな体験が出来たか②ボランティアになって苦勞したこと③どんなことを一緒にしたか④どれ位会ったのか⑤どんなことをサポートしたか⑦ボランティアをして勉強になったこと、得られたこと⑧留学生との付き合いで、心がけていた事、工夫が必要だった事⑨留学生との付き合いで、誤解が生じたり、心配したこと⑫その他(全体を通して)

面接の結果を書き起こして、特に、留学生との接触で、支援したこと、困った事、苦勞した事、得られた事、どんな体験だったか、配慮した事、その他、の項目について以下の一覽表に要点を整理した。(表 1・2 : 10 - 12 頁)

1.3 項目の分類法

さらに分析の手がかりとして、面接者の言語表現から、関心の対象を以下の 4 段階に分類して整理した。①自分の感情、欲求、思考 ②相手の感情、欲求、思考 ③自分と相手以外の第三者や外の世界 ④他者との関係から自分の行動へのフィードバック、以上の 4 段階を区別した。さらに関心の現れ方を、a 積極的・肯定的態度、b 消極的・否定的態度、c 中立的認知、d 支援行動の 4 種に分けて、これら 2 つの軸から以下のようなパラダイムを作って分類した。(表 3 : 12 頁)

(表 1・2)の一覽表にまとめられた、面接者の表現から、その認識や行動がパラダイムのどの項目に相当するかを分類し、項目数を(表 4)にまとめた。面接者の表現を尊重して、挙げてある項目数は個人によって異なる。それらの項目に①段階は 4 点、②段階は 6 点、③段階は 8 点、④段階は 10 点、支援行動には 10 点を与えて、得点化した。配点により多少の変化はあるが、各面接者の項目の分布状況と面談者の中での相対的な位置が把握される。項目の数と得点を(表 4)に示した。(表 4 : 13 頁)

【参考資料1】

表1 日本人学生のインタビュー結果 〈1〉

	A	B	C	D1	E1
経験	1	0	0	0	0
したい事	友人になる。親友に。	深い話をする。ステレオタイプがあるかどうか知りたい。	イベントではなく、専門の話をしたい。第三国の文化や、芸術、少数者の話。	日本の友人のように気楽に付き合う。	一緒に遊ぶ。深い話をする。
どんな支援か	車でいろんな所へ連れ出してあげる	生活上の相談にのる。日本語で会話する。留学生の要求に応える。	日本人に対するのと同じ、当たり前のことをする。(病気の時、薬を買ってあげる等)	話をする。留学生の要求に応じてあげる。友人になりたい。	生活情報を教える相談にのり、相手のストレス解消になれば。
心配な事	失礼なことを言わない。地のままでいて、気をつける。	留学生と意識せず失礼がないようにする。考えの違いはどの位か?	不用意な発言をしない。留学生は遠慮する。ボランティアを義務にしない。	文化の違い。不用意な発言をしないか。(戦争中の事、イベントでの食べ物)	何処まで聞いていいか? 最初は緊張した。今はリラックスしている。
苦労する事	親密になるとどう発展するのか。話題に苦労する。何を求めているのか	意志疎通が難しい。何をどこまで話せるかわからない。話題を心配し過ぎて相手を敬遠する	他の日本との関係。ボランティアという言葉の偽善的雰囲気。マスキの作っている日本のイメージ。	時間がとれない。顔と名前が一致しない。	研究が忙しくなると出席できない。日本人は気楽に輪に入れない。
得られる事	留学生の気持ちがわかる。外国人に度胸がつく。人のためになり、自信がつく。	話すことで自分の欠点がわかる。深く話せる。相手の考えを吸収する。	自分が変わる。出会いにより考えが硬化するのか、和らぐのか。単純ではない。	違う人と友人になる事がよい。	絶対何か得られる。こちらの悩みも聞いてくれる。外国の疑似体験ができる。
どんな体験か	想像できない。留学生の金銭感覚や日本人をどう思うか知りたい。	未知の事を知る。考えがどう違うかどこまで話せるかわかるようになる	違う人と話す事はスリリング。知的体験。違った文化、考え方を知りたい	いろいろな国の事がわかる。	いろいろな国の人と話せる。楽しいし、興味がある。
その他	英語で思った事を言えないのが悲しかった。他国人の行動に違和感を感じた。戦争の話で空気が悪くなった体験有り。	言葉の意味の取り違いやアラブ問題が心配。日本語で話すが、英語も話したい。もっと活動のPRを!	専門以外の話をしたい。日本の文化的な節操のなさに対して厳しい宗教が共存しているのは心理的ストレスではないか。	日本語で言っていることが伝わるか。批判したら怒るか。提言:スポーツ大会をしては?名札の用意。教官がいると安心。一回目は気取っていた。	留学生にも積極的な人とそうでない人がいる。いつでも話せる状態がいい。まだ、深い話はしていない。留学生は学校の後、何をしているのか?

	D 2回目	E 2回目	F 1回目	F 2回目
した事	国の話、日本の話、普通の話をした。パーティーの企画・準備をした。	パーティーや白峰村等の行事。ありふれた話をして普通の友人感覚。	大学の同級生と接触。パーティー、英会話、文通。	バーベキュー、ボトラック、ホームお別れ等のパーティー行事の準備。会話練習。
支援した事	会話練習。人数が少ない方がいいし、楽しい。	話すだけでも楽しい。研修室の留学生の漢字を見て、論文も手伝った。行事の時、車で移動や買出しをした。	海外で日本語を1ヶ月ボランティアで3週教えた。	言葉、文法の間違いを訂正した。日本人学生の話の難しい所を通訳のようにして、話の食い違いを修正した。
困った事	新しい日本人が来て、すぐ中国の核実験の事とか聞きだした時、雰囲気が悪くなった。話したい気持ちもわかる	ワープロ入力の仕方等、どう説明したらいいか。家へ誘ったり、飲み会に誘っても留学生は遠慮して来ない。	儒教思想の強い国の人に「日本の女性は…」と古い基準で批判される事。教師としての発言が難しい事。	留学生同士の間誤解が生じている時、どう接するか心配した。政治的な内容を多様な学生の前で話す時気を使った。
苦労した事	言葉。お互いの語学力が低いので深い話が出来なかった。話せる人が来ると、悩みも聞ける。	苦労は一切無い。最初言ったことをわかってくれるか不安だったが、今思えば楽しいことの方が多かった。	言葉。初級の学生に言いたい事が伝わらない。留学生同士でも、日本人学生とでも、考えの違う人が話す時心配。	何処まで聞いていいのか判断に苦しむ。友達ではなく教師として接することに苦労した。
得られた事	言葉や習慣の違う人と接する事ができて良かった。文化や習慣の違いがよくわかった。(日本は自動販売機が多いタイはタイ語だ、マージの人は刺身が嫌い等)話すと、よくわかる。	その国の知らない事を教えてもらった。友人が増えた。海外へ行くときどんな事で苦労するかわかった。友達になったら僕の車に進んで乗ってくれた。	留学生の反応は積極的誕生日にはプレゼントと歌、嬉しかった。自分の学生時代の方がさめていた。留学生の中にも自分より日本語がうまい人がいると話せない人もいる。	日本人学生の話す日本語が初級の留学生にいかにも難しいかという事に気付いた。学生が親しみを込めて多用する表がかえって留学生に混乱を招く。日本人との会話を見た事が収穫。
どんな体験をしたか	言葉や習慣の違う人と接した。言葉は通じなくても、話す話さないのは全く違う。留学生は以前は関係ない人だったが今は友達	僕の家へ呼んでご飯を食べて飲もうと言ったが誰も来てくれなかった。留学生は気を使い過ぎる感じだ。貯金をしていないと言って驚かされたり、日本人にしてはよく勉強すると言われた。	初級の学生の伝えようとする事がわかってあげられないと気まずくなる。留学生は知的好奇心があり、知識もあるのに話したくてもできない。留学生が近づいても日本人が拒否	授業中に聞けなかった事が楽しく、幅広く聞けるようになった。
工夫した事	政治的、思想的なことを深く話さないようにした。本当は聞きたいけど、深い友達でもないのに、まずい。友達でも、様子を見て聞けるかどうかわからない。	最初、家族の事を聞くのが悪いと思った。ホムジクになった人も聞いて、お金の問題。最初、飲み会に誘ってはいけないかと思っていた。	留学生同士の話でも気まずい思いをしていた時には無視できず、会話に加わった。留学生同士でも、日本人学生とでも、考えの違う人が話すとき心配する。	既習の言葉や文法を使って幅広い話題で話すよう心がけた。指摘し過ぎると意欲をなくすので線引きが難しい。自分ばかりが説明しないようにした。

表2 日本人学生のインタビュー結果 〈2〉

	D 2回目	E 2回目	F 1回目	F 2回目
その他	スポーツ等を一緒にし金大祭に出場する。カラオケに一緒に行って歌を教え合う。場所も和室の方がいいかも。イベントも良かったが、ディスカッション形式はあまり好きではない。とにかく、やって良かった。	留学生は決して怒らず、回りに気を使いすぎている。話していて年齢的な違いは感じなかった。やり方には不満がある。もっと自由に本当の友人になりたい。場所、時間、連絡方法に工夫が必要。今後も、友人と情報交換するつもり。	留学生でも議論好きの民族と、小さな国から一人で来て口を挟まない人がいる。留学生は直接的な表現しかできないので、日本人がムツとする。曖昧さを好み、無意識に集団行動し、外国人に隔たりを残す日本人。友人ができてにくい日本。在日の問題等を残しての国際化のまやかし。	これからも日本人学生と留学生の交流が深まればいい。そのためには日本人学生にも留学生の日本語に理解を深めてもらいたい。教科書の目次だけでも見てもらえたら有り難い。

表3 認識の深化の段階

	認 識			支 援 行 動
	積極的	消極的	認知的	
①自分の感情や欲求、思考に関心がある段階	興味 ①a	逃避 ①b	認識 ①c	d
②相手の感情や欲求、思考に関心がある段階	興味 ②a	批判 ②b	理解 ②c	
③自分や相手以外の第三者や外の世界に関心がある段階	提案・興味 ③a	批判 ③b	認識 ③c	
④他者との関係から自分の行動へフィードバックする段階	提案・興味 ④a	批判 ④b	再認識 ④c	

2 調査結果

2.1 面接の要約一覧表

まず、面接結果の要約は一覧表にまとめて示した。(表1・2:10-12頁) 第1回面接調査を行った学生ボランティア5名は(表1)に整理されている。日本語教師は対照例として、第2回面接を行った2名とともに(表2)に整理してある。面接の具体例は末尾の[参考資料]に1例を示した。一読したところ、学生ボランティアと日本語教師では、年齢は同年齢だが、留学生との異文化接触経験の違いから、明瞭な認識の質の差が認められる。学生ボランティア5名の中では、Aだけが海外で滞在したことがあり、異文化接触の経験があるが、5名の間にそれほど明瞭な差は認められない。それに対して、学生D、Eの第2回目の調査結果は、第1回目とは異なり、明らかに異文化に対する認識の深化が認められる。

2.2 項目の分類

認識の深化をより明確に把握するために、言葉によって表現されが項目の分類と得点化を行った。(表4) 認識の質の差を客観的に見るための、項目の分類の仕方をいくつかの例で具体的にみてみよう。

表4 認識の度合い—項目分類・得点表—

	4点			6点			8点			10点		合計 得点		
	自己認識①	対者認識②		他者認識③			自己再認識④		行動					
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	d	
学生A	4	1	1	6	1	2								
	24			54									78	
学生B	3	1		6		3	1	1		1				
	16			54			16			10			96	
学生C	1		1	3		1	2	3	1			2		
	8			24			42			20			94	
学生D	3	1	3	4		1	3	1						
	28			30			32						90	
学生E	5	1	1	3		2	1		1					
	28			30			16						78	
日本語教師 F					1	2	1	5	5			2	1	
				18			88			20		10	136	
学生D2	1		1	2		4	3	1	2	1		4		
	8			36			48			40			132	
学生E2	3			1	3	3		4		1		4	2	
	12			42			32			50		20	156	
日本語教師 F2						1	1	2		3	1	5	4	
				6			24			90		40	160	

まず(表1)の「したい事」に書かれた項目はすべて、①aに分類された。①aは、「友人になる、友人として付き合う、話をする、一緒に遊ぶ、ステレオタイプについて知りたい」等の項目が見られ、A1例、B2例、C1例、D1例、E2例と数えられた。「話をする」には、「深い話、専門の話、文化や芸術」等の変異が見られたが、すべて「話をする」の1項目として数えた。逆に表現は短くても行為が異なるものは、Eの「一緒に遊ぶ、深い話をする」は、「遊ぶ」と「話をする」の2項目に数える。一覧表に要約する段階で、言及されている項目はできるだけ落とさずに書き並べた。「どんな支援をしたいか」の欄に書かれている事は、概ね、相手の事を考えていると見なされ、「車で連れ出してあげる、相談にのる、会話をする、相手の要求に応える」等が②aと分類された。Dの「友人になりたい」はここに書かれているが、内容から①aと判断される。

2.3 第1回目の面接調査

第1回目の面接では、ほとんどの項目が、①②段階に留まり、まだ、自分の興味や感情に主な関心があることがわかる。(表1)の表現で③に分類されたものは、「未知の事/違った文化/いろいろな国を知る」(BCD)が③a、活動への批判、提案、Bの「もっとPR活動を」のようなものが③b、Cの「ボランティアという言葉の偽善、ボランティアを義務にしない、日本文化の節操のなさ」などの、外の世界への批判的発言が③b、「留学生は遠慮をする、マスコミの作っている日本のイメージの問題、厳しい宗教のストレス」などが③cに分類された。同じ留学生について述べていても、自分の経験からある特定の人についての発言は②c、留学生全体に一般化した発言は③cと分かれる。Dの「スポーツ大会、名札」のような提案は③aに、「1回目は気取っていた」のような批判は③bに、Eの「いつでも話せる状態がいい」は提案として③a、「日本人は気楽に輪に入れない」は③bに分類した。④段階は、Bの「自分の欠点がある」、Cの「自分が変わる、出会いにより硬化するのか和らぐのか」等、3項目の④cが見られただけである。

総じて、BCには③④段階の認識が多く見られることから、関心の対象が自分と相手から離れて、より一般的で、社会的視野が広く、認識が進んでいると思われる。④段階の自己洞察に富んだ発言も見られる。Aは海外経験があるので、②段階の対者認識は多く見られたが、自己を中心とした興味の持ち方で、一般的な認識に深化してない。2回の面接が行われたDEの場合は、留学生との異文化接触体験以前の第1回調査の段階では、日本人学生の平均的な状態を代表していると考えられ、接触の影響を見るには適切であったと考えられる。分類を得点化した合計の高低も、概ねこの印象を支持している。BCは得点が高く、Dが標準で、AEはやや得点が低い。(表4、13頁)

3 結果の考察

3.1 第1回面接調査の結果について

第1回面接調査の段階で、日本語教師Fの結果は、5名の学生とは大きく異なっていた。4つの認識段階のうち、既に、①の自己の興味や感情への関心は見られず、最初から③などの他者認識の例、社会的な関心の強さや留学生一般に対する配慮が多く見られ、異文化接触の経験の深さを反映している。この結果を対照例として、学生の結果と比較すると、5名の学生とは得点の高さも歴然と異なることがわかる。「儒教思想の強い国の留学生には古い基準で批判さ

れる「留学生が近づいても拒否する日本人」などの③ b 段階の、留学生一般や日本人に対する鋭い批判や「留学生の中にも話せない人もいる」(③ c)のような客観的観察などが見られ、学生の回答に比べて格段に深い認識を示している。要約はかなり省略したので項目も減っているはずだが、学生の得点とはかけ離れた結果を示した。年齢的には学生と同じだが、既に2年社会に出て、留学生との接触を持っていることがこうした結果になっている。この姿が、異文化接触を体験した後に学生が到達する認識の状態を示している。

3.2 第2回面接調査の結果について

第2回面接の後のDEの面接結果を、第1回と比較してみよう。Dには「お互いの語学力が低いので深い話が出来なかった」(④ b)と自身の語学力の不足を痛感した表現や他の日本人が政治的な話をして雰囲気悪くした時に「話したい気持ちもわかる」(④ c)と自身の感情と比較して理解を示す態度等が見られた。Eは「貯金してない事に驚かれた/日本人にしては勉強すると言われた」(④ c)等の自己を再認識する表現が見られたり、「今後も情報交換していく」(④ a)と前向きなフィードバックが見られた。支援行動や留学生を誘うなど積極的な行動も見られ、それに対する留学生の反応を「遠慮し過ぎる」「気を使いすぎている」(③ b)等と批判してもいる。交流会の活動に対しても、Dの提案「カラオケに行ったら」「スポーツチームで金大祭に参加したら」(③ a)やEの「もっと自由にやりたい」「場所連絡方法を改善する必要」(③ b)など厳しい批判も出た。(表4、13頁)に見られるように、表現される内容が全体に右にシフトし、認識の深化を明示している。それに連動して、二人の得点も、第1回の日本語教師の得点に近く、短期間に急速に認識が深まったことを示している。日本語教師Fの2回目は調査票のみで、項目が少ないことにもよるが、2回目の得点の伸びはさほどでない。この得点化は、段階間の得点差を大きくすると③④が多い方が有利になり、点差を少なくすると全体の項目が多い方が有利になる特徴があるので、点差を少なくすると項目の多い学生が有利になって、Eは2回目の日本語教師の得点を逆転する。

この二人(DE)に限っても、1回目と2回目の得点差は大きく、交流会活動を通じて、異文化に対する認識が深まり、大きく成長した事がうかがえる。この二人しか、2回目の面接を実施できなかったのも、データが充分ではないが、標準的な認識を示した日本人学生も留学生との異文化交流体験を通じて短期間に急速に認識が深化することがわかった。

日本語教師の1回目と2回目の比較であまり差がないように、このような分類方式では、関心の対象が変化する初期の変動は捉えられるが、進んだ意見のさらなる深化を捉えきれない。より進んだ変化を捉えるには、このような全体的な把握では限界があり、記述内容をより詳細に見て、質的な変化を捉える工夫が必要になる。この点に関しては、より豊富な、欠損のないデータによって今後の研究課題とすることにしよう。

IV おわりに

留学生と日本人学生ボランティアの交流会を通じて、日本人学生の異文化理解が、留学生との異文化接触によって、どのように深化したかを、面接調査の書き起こしから、客観的に読みとる手だてを考えた。データも充分ではなく、読みとり方も一面的だが、認識の深化をある程度捉えることができた。日本人学生の異文化理解は、このように限定された接触体験でも、短期間で、

目覚ましく深化し、対照例となる日本語教師の水準に、急速に接近することがわかった。

様々な制約から今年度採集されたデータは十分な量とは言えないが、これを予備調査として、異文化交流会の充実と、留学生、日本人学生の双方に与える影響の調査を今後も継続していきたい。

【参考文献】

- 1 江川 緑 1996「異文化理解・適応のためのマニュアル開発に向けての調査研究」平成7年度文部省留学生経費特別配分事業報告書
- 2 奥川義尚 他 1996「在日留学生に対する日本人ボランティアの国際交流に関する意識調査結果」異文化間教育学会17回大会 発表原稿
- 3 嶋 信宏 1991「大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究」教育心理学研究39-4
- 4 高井次郎 1992「異文化間ソーシャル・スキル・トレーニング」『現代のエスプリ』 至文堂
- 5 高田晃治 他 1995「高校中退者の内的経験に関する一考察一定時制高校で学ぶ生徒との面接調査から」『ライフサイクルにおけるアイデンティティの再編過程に関する研究』文部省科学研究一般研究(B)報告書
- 6 田中共子 他 1996「日本人学生のチューターとしての異文化接触体験：ソーシャル・スキルの実施とソーシャル・サポートの授受を中心に」異文化教育学会17回大会 発表原稿

【参考資料2】

◆ 日本人学生留学生ボランティアの面接調査 C (1996.6.12)

10. これまでに日本人以外の友人を持った体験

クラスメートと言う程度ならある。中学生のとき、カナダからの生徒。日本語を全く話せない。いじめに近いことがありそばの市立中学に転校。ケンカがあったが周りは助けられない。本人も疎外感を感じて辞めてしまった。日本人側にとっても不幸なことだ。またDrコースに中国からの留学生がいた。(昨年1年) もちろん日本語は上手く話せる。そのまま立っていれば、日本人と分からない。

11. どんな時、考え方の違いや習慣、やり方の違いを感じたか

分からない、特になし。Kさんとは余り付き合いがない。技術者としての先輩、他のDrの人と変わらない。

3. どんなことを一緒にしたいか？

特別なイベントなどではなく、専門の学問領域の話をしたい。(日本語、できれば英語で)

4. どれ位、会いたいか？(頻度と形式)

定期的に会うときとそうでない時を設ける。定期はそのままにしている不定期に会う。(昼食時や休講時に芝生に座って話すなどの合い方)

5. どんなサポートをする予定か？

当たり前のことと思って出来ないこと。例えば、風邪を引いたとき、薬屋に行って薬を買うなど、日本人にやってあげることと同じ。実際会って、何が困っているか？今のところ、具体的にイメージが湧かない。

8. 留学生との付き合いで、誤解が生じやすいと思われることや心配なこと

不用意な発言。正直なところ日本人にとってタブーなこと（天皇制など）を、どう話して良いか分からない。日本人同志の親しい友人のとき、外国人を揶揄するような言葉がある。Kさんのケースでは、日本人学生が使いたがるコンピューターを余り使わない。彼がスピードがおそいパソコンでやっていたので、こちらの早いほうを使ったらどうかと言ったところ、壊すといけなから使わない。他の3人の留学生も含めて、上手くパソコンが使えるのに使わない。遠慮しているのだと思う。

ボランティアは義務じゃないので、義務的に会うことはやめたほうが良い。そういう人は向いていない。

9. 留学生との付き合いで、誤解が生じやすいのではないかとと思われることや心配なこと 留学生に誤解されることを怖れる。そんなつもりで言ったのではないのに留学生が誤解する。不用意に発言することかな。

多分中国からの人はないのではないかと思うが、欧米の方では、マスコミが作る日本のイメージがある。「日本は豊かになったが、心は豊かではない。勤勉だとか、多様性を認めないとか、日本人は真似が上手だとか」

日本人は勤勉ではないし、今自分の周りには勤勉な人なんかいない。また、ウィンドウズを見たら、アメリカ人だって真似してるじゃないか。日本は、基礎研究をやってない訳ではない、貧しい中でも。

1. ボランティアをやると、どんな体験が出来ると思いますか？

少なくとも自分と違う所に住む人達と話すことがスリリング、それは外国とは限らないけれど。興味とはいえないが強いて言うなら知的体験を楽しむ。違う専門の人と、留学してまで学習する人と話をすると得るものがある。知識も自信もあるだろう。

2. ボランティアになってどんなことで苦勞するのか？

ボランティアになったからという留学生との関係で出てくるのではなくて、他の日本人との関係で出てくる問題。ボランティアと言う言葉に偽善的な雰囲気があるのではないか。言葉自体完全に定着したわけではない。今まで、この学部にはなかったでしょう。ここの学部では、余裕があったら研究しろというところ。単なる趣味の一環としてボランティアをやっていると考えるかどうか。

6. 留学生から得られるもの

7. ボランティアをして勉強になると思われることや得られること

自分自身が変わりそうな予感がする。僕は必ずしもグローバルな視点、共産主義であるなど、何らか思想に囚われない人間ではなく、むしろ祖父が技師であった関係でこの学部を選んだ。日本人であることに誇りを持って、あまり公平ではない、偏った人間である。むしろ公平な考え方について理解できるし、そう振る舞うことも十分出来るし、そうして来た。だから、自分の考えが変わるかというところではない。むしろ、天皇制絶対反対を唱える人には、違和感を覚える。例えば、日本は侵略行為をした。留学生はそういう国からが多い。そういう人達と出会って、国粹主義的な面がどう変わるのか？和らぐのか深まるのか — そう単純なものではないような気がする。

12. その他

文学などのような専門以外の話をしたい。話してみたいことが沢山ある。向こうの人の母国文化ではなくて、関係のない第三者の文化について話したら面白い。(日本人と中国人とでフランス文化について話すような)

違った文化に対する興味はあった。例えば日本に油彩画家はいるが好きな人はヨーロッパの人。本物を見てみたいし、アーティスト達と話をしてみたい。

また、判官びいきなのかもしれないが、中国という大きな国についてではなくて少数民族の自治区について、そういう人達について、どう思うのか、また何族、何族など、いろいろな人達が居ますよね、そういう人達をどう思うのか？

日本は節操もなく、キリスト教や仏教を取り入れてますよね。そうしたことと違って、向こうの人はイスラム教ならイスラム教だけで、国教があるところもないところもあり、そういうものが共生していること、融和と言うのとは違うと思うが、一緒にいるというのが、不思議な感覚。それで、心理的なストレスというものがあるのかどうかを知りたい。いろいろ話してみたい。

指導教官の異文化接触—留学生指導を通じて—

馬 志強 八重澤美知子 太田秀樹
(松下)

1. はじめに

学位の取得を目的に来日する留学生の大半は、工学、理学、医学など理系の学部によく見られ、その滞在も比較的長期に亘る。教室や研究室に留学生が加わることによって、当然のことながら日本人学生のみを対象としていた状況には変化が生じる。なかでも留学生と関わる機会の多い指導教官においては、留学生を受け入れたことによってどのような変化がもたらされたのか、またそれに対してどのような対処をしたのか等について明らかにすることを本研究の目的とする。

具体的には、理系の学部における留学生教育と研究の実態を調査し、現在までの問題点及び今後の課題について検討する。また、指導教官の留学生指導のプロセスと、留学生の文化的背景についての受け止め方について、個別に見ていくことにする。

2. 方法

理系に学ぶ留学生とその指導教官に対し、質問紙調査を実施した。留学生と教官ではその内容が一部重複する部分もあるが、指導教官に対する質問項目は次の通りである。

- ・留学生が受講する授業について（使用言語、授業形式、テキスト、評価方法、留学生の成績評価の方法と留学生の成績、工夫した点など）
- ・留学生との接触頻度と相談内容
- ・留学生に対する評価
- ・教育、研究指導上での留学生と日本人学生の相違（日本人学生との相違、教育・研究指導上の困難と工夫、その解決策など）

調査は1996年8月に実施した。

さらに、指導教官に対して面接調査を実地した。期間は1996年9月～1997年2月である。

3. 結果と考察

1) 留学生指導の現状と今後の課題

①留学生に対する指導教官の評価

指導教官に対して行った留学生(学部、修士)の印象に関するアンケートの結果を図1、図2に示す。プラス面の評価として「真面目に努力する」38%、「積極的に努力する」31%、「自主性が強い」16%などが上げられており、また、マイナス面として「基礎学力不十分」27%、「日本語学力が不十分」24%、「他の学生とのディスカッションが少ない」20%などが指摘されている。

「基礎学力不十分」とする指導教官の指摘は留学生の基礎学力に対する自己評価と一致しているが、日本語の能力について留学生の側では「あまり不便を感じていない」と答えているのに対して「日本語が不十分」と考える指導教官が24%と比較的多く、指導教官が期待する「理解度」と学生の実感している「理解度」との間にやや差異が見られる。

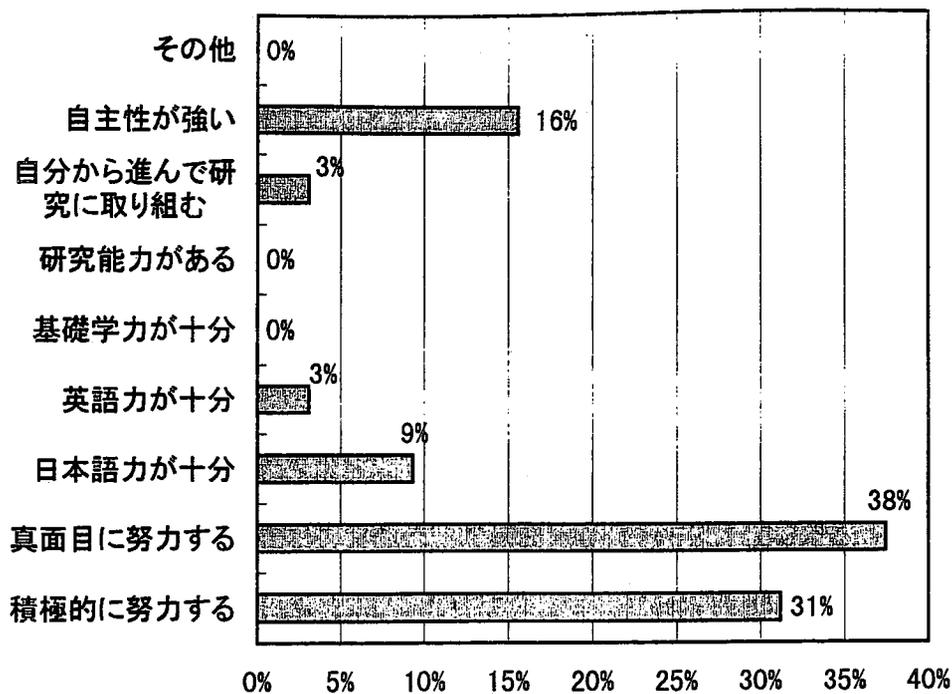


図1 指導教官の留学生に対する評価（プラス面）

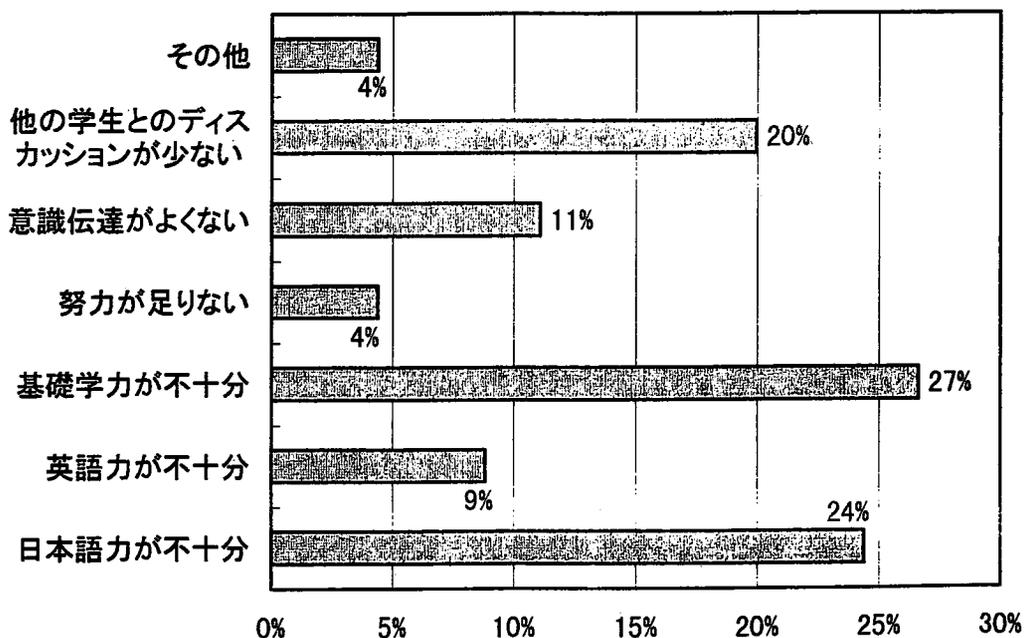


図2 指導教官の留学生に対する評価（マイナス面）

以上の調査結果から、理工系の留学生にとってもっとも勉学の妨げになっているのは基礎学力の不足であると考えられ、語学に関する補習を行うのみならず、数学、物理、化学などの基礎教科科目についても積極的に補習授業を実施する必要があると言えよう。

②留学生に対する課外補講（特別学習）

工学部では工学部と工学研究科に在籍する留学生に対して、すでに正規授業や研究の遂行に必要な基礎的知識を補うために補講を実施しており、平成7年度には総計408時間の補講実績がある。

これらの効果を検証し今後の補講実施計画に活用するため、平成8年度4月、留学生専門教育教官より留学生53名と指導教官38名を対象に、留学生の「学習の実態」と「課外補講に対する要望」についてアンケート調査を行っている。この結果に基づき平成8年度の留学生課外補講の計画を立て、現在実施されつつあるが、主な補講の形式としては基礎的科目においては留学生各々の要求に応じる個別指導体制をとっており、コンピュータの基礎など共通性のあるものに対しては講習会の形式をとっている。ちなみに、今回のアンケート調査で学部留学生で個別指導を受けたことがあると答えた学生は63%にのぼっている。

また、講義の際に理解が困難な授業科目に対する留学生の対応方法について質問したところ、学部留学生の45%が「参考書を調べる」、35%が「クラスメートの日本人の学生に聞く」、15%が「同じ出身国の友達に聞く」と答えており、指導教官やチューターの制度があまり活用されていないことがわかる。

③留学生が研究指導を受ける頻度と方法

○指導を受ける頻度

研究指導方法に関して修士課程留学生を対象に実施したアンケート結果によると「研究指導を受ける頻度」は「1週間に1回」が56%、「2週間に1回」が19%、「1ヶ月に1回」が19%となっている。逆に指導教官に対して行ったアンケート結果では「1週間に1回」が最も多い42%、次いで「2週間に1回」が37%、「1週間に2回」が11%となっており、両者の数字に大差は見られず修士課程留学生は常時必要な研究指導を受けていると判断される。

一方、学部留学生の場合、指導教官あるいは相談教官が「留学生と会う頻度」は「1ヶ月に1回」(27%)と「1学期に1回」(27%)が最も多く、「1週間に1回」と答えた学生は13%しかない。学部留学生は研究室に所属していないため指導教官と接触する機会が大変少なく、何らかの形で質問や相談のできる体制を作ることが期待される。

○研究指導の方法

指導教官が留学生の研究指導に際してとくに心掛けている点、工夫した事項について記入した結果をまとめると以下のようになり、それぞれの教官が各留学生に合わせて対応している様子が伺われる。

(i) 留学生に合わせた個人指導

留学生各々の能力を把握する、個別指導に時間をかける、実験記録の概要を毎日提出させる、研究に関連する学術論文の概要レポートを月一回程度提出させる、個別に参考書、参考論文を与えて学力を向上させるなど。

(ii) 「言葉の壁」を配慮した指導

ゆっくり話す、文章で指示する、研究実験の指針を日本人学生より詳しく与える、日本人学生とペアを組ませる、周りの日本人学生や職員に助言を依頼する、日本人学生との会話を多くするように双方に指導する、関連文献の読み合わせ、日本語補講に出席するように指導するなど。

(iii) 「基礎学力」に合わせた指導

学生自身の工学基礎知識に合わせた指導、基礎学力の強化、基礎学力に合った研究テーマの設定、討論の際にできる限り学術の価値について言及するなどが挙げられている。

④日本語の学習

日本で勉強している留学生、特に学部生と修士課程に在籍している留学生に対して、講義がほぼ全部日本語であるため、日本語は欠かせない。そのために、本学留学生センターは日本語補講クラスを設け、留学生を対象に各レベルの日本語補講を行ってきた。工学部に在籍する学部と修士課程留学生の日本語の学習について調査を行った結果は以下の通りである。

まず、日本語の基礎について、「正規生になる前に日本語を勉強したことがある」の割合は学部留学生で100%、修士課程留学生で93%である。政府派遣留学生の場合、本国の日本語予備校で、私費留学生は日本語学校で、或いは研究生として本学に在学する期間は、日本語補講クラスを通して日本語を勉強したケースが多く、いずれにしても、正規学生になった時点では、ある程度の日本語の基礎が揃っていることを示している。日本語の必要度を示す「レポート、論文を書く際に使用する言語」の設問に対して、学部留学生は92%、修士課程留学生は88%の割合で「日本語」と答えている。勉学中日本語の必要度が高いことを示している。

本学留学生センターが開講している日本語補講を通して達成したい目的では、学部留学生は「レポートを書ける」のが最も高く33%であり、次に「研究でのディスカッション」17%、「授業を聞く事ができる」17%である。修士課程留学生は「研究でのディスカッション」が最も高く24%であり、その次には「研究論文を書ける」21%、「日常会話ができる」21%である。正規生になって以来、特に日本語を勉強していない理由について、「今の日本語力は勉学、研究と生活に不自由がない」と答えた学部留学生は36%、修士課程留学生は29%であり、「専門の勉強と研究が忙しくて、両立できない」と答えた学部留学生は29%、修士課程留学生は71%である。修士課程留学生は専門勉強の忙しさと私費留学生が多いゆえに(88%)、アルバイトに時間が取られるため、日本語補講と両立することが難しい状態である。指導教官も留学生は日本語補講と専門の勉強との両立ができない場合、専門の勉強を優先させざるを得ない状態である。

留学生は日本に来たばかりの時点では、日本語が全然分からない初級段階であり、日本語の勉強意欲が強く、日本語補講への参加率も高い。ある程度日本と日本語に慣れ、周囲とのコミュニケーションの手段ができ、専門の勉強も忙しくなってくると、日本語補講への参加率が落ちていくのが現状である。如何に専門の勉強・研究と両立できる日本語の補講を工夫するかは、中級と上級日本語補講クラスの課題でもある。平成8年度前期から、日本語担当教師と工学部の日本人学生のボランティアを主体とする、週に1～2回行われる「異文化交流会」は、その一つの試みである。留学生に日本人学生と日本語担当教師と自由交流の場を設け、文化、社会など色々な情報を交換中に、自然に日本語を上達させるというねらいをも持ったもので、多数の日本人留

学生の参加が期待される。

⑤今後の課題

留学生の勉学上「言葉の問題」が大きな障壁となっていることは言うまでもないが、工学部および工学研究科に在籍する学生においては、さらに、基礎学力の不足が大きな問題点として挙げられる。基礎学力の不足は、主として諸外国と日本との教育システムや教育内容の違いに起因するものであり、これらのギャップを補填することが留学生受け入れにとっては非常に重要な課題であると考えられる。

留学生を受け入れるに当たっては勉学、研究の遂行に必要な基礎学力の有無を十分にチェックすることはもちろんであるが、受け入れた留学生に対しては「課外補講」と「チューター制度」を十分に活用することが必須であり、それらの制度の一層の充実をはかることが求められる。

しかしながら、一方で留学生各々の基礎学力と専攻分野が異なるために系統的に基礎学力を補うことは、時間的制約、教官スタッフや財政的制約などのため単独学部で実施することはかなり困難である。留学生センターなどと連携して、現在すでに実施している日本語補講と同様に、数学、物理、英語、化学、コンピューター基礎など基礎的科目の補講を全学の留学生に向けて実施することも選択肢の1つであると考えられる。

今後とも工学部をはじめ理系の学部 に在籍する留学生は確実に増えて行くであろう。理系で学ぶ留学生の受け入れ体制と教育、研究指導体制をさらに整備し、教育現場での国際化を進めることが重要である。

2) 留学生指導の実際

「日本人学生と比較した、留学生指導の困難さ、その対処方法、工夫」、また「留学生が加わることによって研究室ならびに日本人学生に与えた影響」、そして「留学生を受け入れた経験は教官個人にどのような変化をもたらしたか」などについて、半構造化された面接を実施した。対象は、学位を取得（修士・博士）した留学生の指導教官で、複数の留学生が研究室にいる場合は、既に帰国した留学生に焦点をあてて面接を行った。

なお、質問項目については、面接を依頼する時点で明らかにしてあり、面接時にはテープによる記録を行った（了承済み）。実施時間はおよそ1時間。調査には極めて協力的であり、質問事項の枠以外の事柄についても多く聴くことが出来た。

以下にそのなかの3ケースについて明らかにしたい。留学生を受け入れた研究室の様子、教官個人の異文化接触・理解等を中心に 事例1はアジア・漢字圏の留学生（複数）、事例2はアジア・非漢字圏からの留学生、事例3はヨーロッパとアジアの漢字圏・非漢字圏の留学生を対象とし、まとめたものである。

事例 1

1. 現在まで受け入れた留学生の人数

学部	T	(アジア・非漢字圏)	1年間
大学院	S	(アジア・漢字圏)	2年間 (政府派遣) 研究生
	C	(同上)	1年間 研究生 (最初手紙で)
	J	(同上)	3年間 国費留学生 その後渡米
	G	(同上)	3年半 私費 J君の紹介
	TY	(同上)	指導教官 (学部 / 大学院) からの紹介 ヨーロッパで研究、その後アジアへ
	E	(同上)	3年間 国費留学生
	M	(同上)	現在指導中

2. 指導教官になられた経緯

J氏の場合 (一番印象に残る留学生) 1981年彼の国を訪問した際、彼はCさんの研究室において私の専門の話をはじめて聞く。その後、1985年に話をしに行ったときJ氏が英語でかいつまんで説明し、こんなに英語が上手い人は国費留学生に推薦しようと思いついた。

Cさんは出国させたがらなかった。彼はアメリカにも行けたと思うが、必ず帰国するということで日本にやってきた。日本に留学中に彼は助教授に昇進した。学位取得後は渡米し、アメリカの大学で研究。その後、合弁企業で働く。

3. 留学生を受け入れて研究室は変わったかどうか

現在在籍している留学生たちは、日本人の学生とじっくり行かない。日本人学生に「やれ」といってもやらないといっていた。しかし、結構上手く行った学生もいた。多分、日本語が上手くないので、コミュニケーションがとれないのかな (TY、Mについて)。

・人とは日本人と比べてすぐカッとするようだ。留学生はほとんどがドクターの学生、だから研究室の活性化にはなっている。国際性、国際交流、広い視野を持つ、英語をやらなければならないと日本人学生が思ったし、教官個人の日常的に英語で話すことに貢献し、また話すチャンスもあった。

4. 留学生の指導で困った事、手を焼いたこと、不満、等

・研究 / 学業面 M氏; 彼が考えるほど彼は優秀なのかなー。修学期限の延長に関して、奨学金は切れるし、就職は決まっているから、とー。本人から3月に学位が出せるかどうかと聞かれ、論文を書く準備を始めるように指示した。…………… (省略) ……………
……………学位を出して良いのかなー、と言う気になった。正月前に論文を貰い、休み中に見て手直ししたが、こんな状況しか書けないなんて困ると思った。とにかく1月中に書き直すように指示した。学位は論文を見て決めるが、出す方向で検討している。

M氏は最初会社において大学の先生になろうとしたが、やはり企業に行くことにした。留学生と

いっても皆、地球人であり何処の国の人も一緒。J氏とは英語で色々なことを話したが、本当に地球人という感じがした。研究室の状況としては、日本人学生と上手く行かない、日本人学生が言うことを聞かない、学位を早く出してほしいとか、日本人は欧米重視である（T君）、日本の学生は勉強しない、子供過ぎて友達になれない、など日本嫌いになって帰るなど困ったことだと思う。

・生活面 J氏から頼まれてG君を引き受けたが、彼は新聞配達のアルバイトをしており、そのために疲れて研究ができないと言っていた。その頃はそんなに奨学金がもらえなかった時期だった。そして他の留学生がもらっているのを見ると、指導教官がしっかりと推薦状を書かないからなのではないかと言い出したときもあった。M君も奨学金を貰うことができて本当に良かった。ただ、日本にくるときには「経済的には大丈夫」と言うのに、日本にくるとだいぶ違うことを言う。結局は奨学金が貰えるまでが大変。

・留学生受入れ体制

特に学位のだし方をどうしたら良いのか。3年間という期限、要求するレベルについて、留学生からの圧力（国では就職が決まっている、奨学金が切れる等）がある。

また、奨学金の問題については、日本での選抜システムが理解されていないため、おそらく留学生の出身国でそうであるように、システムが決まっても違う方法があるのではないかと思っている。

連帯保証人制度（アパートを借りるとき） TY氏は家族を連れてくるのでアパートを借りる必要性が出てきた。

5. 4の際の対処、相談先、等 留学生担当教官

6. 日本人学生の留学生に対する評価およびその変化

留学生と一緒に仕事ができる学生もあれば、そうでない場合もある。TY君の最後の年に一緒にやっていた日本人の学生を彼は非常にかわいがり、「僕の身内みたいだ」と言って気に入っていた。またM氏も、4年生の女子学生とはうまくいっている。

7. 留学生が帰国してから現在までの心境

TY氏はヨーロッパの研究所に紹介したのにその後何の連絡もなく、突然このお正月に東南アジアで研究をやっていると言う連絡を受けた。G君は研究テーマが一緒だから連絡を取り合っている。また、Cさんの友人が留学したいと言ってきてほとんど決まりかけたのに急遽キャンセルになり、当人からは事故にあったなど一応尤もらしい手紙を貰ったが、釈然としない。

8. 帰国（修了）した留学生とのその後の交流

G君は、国に帰ってCさん（P工大と兼任）とともに学会などで2回会った。交流は続いている。

9. 留学生受入れ経験による、教官個人としての変化など

国際性を身に付ける。博士課程のほとんどは外国人留学生だったけれども。また、学部留学生

はハッキリ言って、かなりの負担を感じるが日本という立場から指導してあげるべきだと思う。確かに、もっと良い学生が来れば、日本の学生にも刺激になるし、良い面もあるのですが。留学生の受入れも頭打ちになっているのではないか。日本は留学生にとっては魅力がない国なんでしょう。また、英語主体のコースがあってもいい。(日本人の教官が全部英語で教育する)

事例2

1. 現在まで受け入れた留学生の人数

学部	I (アジア・漢字圏)	1年間	政府派遣留学生	卒論指導
大学院	B (アジア・非漢字圏)	2年間	国費留学生	
	F (アジア・非漢字圏)	現在指導中	国費留学生	

2. 指導教官になられた経緯

文部省からの要請。academic levelのみの責任を持つ。

3. 指導中のエピソード、心に残ることなど

B君は物凄い勢いで日本語をマスターする。礼儀正しく大人である。自分が外国人に会った時にどうしたら良いのかが分かった。彼はどのように挨拶を言うのか、私自身の参考になった。英語でやるような感じで日本語で挨拶をしている。

M1の春休み、1ヵ月間帰国してから、研究、卒研に身が入らなくなった。日本語、日本文化に傾倒し、最後には卒業できるかどうか分からない程、全く研究はやらなかった。結局、博士課程に行く気がなくなった。本当か嘘か分からないが、家族が寂しがった。ドクターコースを修了するまで、家族は待てないと言う。ドクターに行くと言っていたので、そのようなテーマでやっていたのに――。

彼の人柄について言えば、人との言い争いを聞いたことがない。しかし、穏やかにしているからといって自分の意志を曲げるのではない。

4. 留学生を受け入れて研究室は変わったかどうか

非常に良かった。語学に対する関心が高まった。他の国の学生とつき合うことで、考え方が違うことが分かった。彼の礼儀正しいことが良かった。先生を尊敬し、立てていた。

5. 留学生の指導で困った事、手を焼いたこと、不満、等

・研究/学業面 不満足の結果で彼を卒業させてしまった。日本人なら卒業は難しかったかも知れないが大使館推薦の学生は卒業させざるを得ないところがある。

・生活面 全く困らない。

・留学生受入れ体制 1. 保証人と奨学金の問題 2. 入試の問題 がある。

留学生はアルバイトしなければ、経済的に厳しい。Bを採用ときには、国費留学生かどうかをチェックした。それ以外は責任をとれない。学校レベルには100%責任を持つ。がそれ以外は引

き受けない。最初にBにそういった。それが嫌だったら、私以外の教官のところに行って欲しいと言った。留学生本人が悪くないのは分かるが、本人以外のことは我々は何も知らない。向こうのことは何も知らない。日本人の親戚でも連帯保証人は難しいのに。指導教官によっては、就職の時の連帯保証人にさえなっている人がいるが。

入試については日本人学生のことも考えて、留学生の優遇措置をやらなければならないのではないか。日本の学生を厳しい競争に曝しておいて、なぜ留学生を優遇しなければならないのかが分からない。Bは優秀だから良かったが、これは入試をやっている良く感じる。ある意味では同等の試験を課してもかまわないと思う。成績が悪い留学生を温情主義で採ってしまう場合もあるようだ。日本のシステムは、留学生にとって都合が悪い。修士から入学する学生はまだ良いが、学部からの留学生には特別枠（外数）がある。それは一方では日本の学生を圧迫しないが、また一方留学生の特別扱いでもある。

6. 日本人学生の留学生に対する評価およびその変化

日本人学生はかれに一目置いていた。Bは大人である、しっかりしている、そういう雰囲気だと思ふ。彼が主張しなくても相手のほうが気を使ってくれた。彼の得な面、スポーツ万能だし、坊ちゃん育ちで鷹揚、チマチマと何か言うこともない。

研究面では、週の半分も居ないので、居なさ過ぎ、彼は専門の勉強が好きではない。こと研究に関しては、あんなことで卒業できるのか、一週間の半分以上は研究室に居ない。1、2度注意したが。途中から研究が分からなくなったようだった。M1の時から、自分から興味を持って研究をやっているようではなかった。

7. 留学生が帰国してから現在までの心境

8. 帰国した留学生とのその後の交流

もう少しコンタクトを取りたい気がする。自分の方から手紙を2～3回出している。彼からの手紙で、アドレス帳を無くした、と言っていた。一般的にまめにコンタクトをとる方だと思ふ。人間関係を大切にする。

9. 留学生受入れ経験による、教官個人としての変化など

留学生に対する考え方が物凄く変わった。我々は彼らの都合で自分たちの予定を変えているが、彼らの都合に合わせる必要は全く無いんだということ。例えば、ドクターに行きたいからそれ用のテーマを考えたが――。以前の2ケース共、予定変更で結局博士課程に行かない。彼らがドクターに行こうが行くまいがテーマを与えれば良い。立ち入った向こうの事情に配慮する事なくこちら側で考えれば良い。彼には修士の学生のテーマを取って与えたので、そのテーマは、現在宙に浮いている。

10. その他

色々問題はあるが、留学生には恵まれていると思ふ。人がやっているテーマを辞めさせてまで留学生に持ってくるというような無理はする必要がない。例えば、5つテーマが有って、そのうちどれか選べば良い状態で、そのなかで、ドクターに繋ぐようなテーマを選んで留学生に与える

というようなことはするつもりである。しかし、留学生だからといって特別考えてやる必要はない。要は、こちらも自然体で考えてやれば一番長続きしそうだ。そうすると、途中で彼らの方針が変わっても腹が立たない。彼らは好きにしたら良い。こちらが無理をした分だけ予定変更があると面白くない気分になる。説得はする気がない。ドクターはそんなに簡単に取れないし、本人が強い意志を持って行くものである。かなり覚悟をさせてドクターに行かせたいのに、本人を説得する事は逆のことになるので、説得はできない。学位は取れなくても良いのだ、と言うことを確認させてからドクターに行かせる。

また、留学生は時間に対する考え方が私と合わない。一言で言うと、ペースが遅い。半分苟々する。少なくとも半年間は遅れている。ともかく、こちらのペースに合わせてやるとスケジュール通り卒業できる。時間があってそれに全て合わせるという意識が乏しい。

B の場合、始めの部分を飛ばして研究に入った。「これは分からない」と彼が言わないで、いきなり彼はやらされたから、1年間やってみたけど、「これはダメだ」と言うので諦めたのかなーという気が最近して来た。彼の卒研を見て、それ程ハイレベルならこれからも大丈夫だからと思ってやった。彼にとって訳の分からないことをやっていたので、全く理解していないのではないかと思った。

事例3

1. 現在まで受け入れた留学生の人数

学部	F (アジア・非漢字圏)	1年間	政府派遣留学生
大学院	E (アジア・非漢字圏)	1年間	国費留学生
	M (ヨーロッパ)	3年間	国費留学生
	A (アジア・非漢字圏)	5年間	国費留学生、その後私費留学生
	Z (アジア・漢字圏)	3年間	国費留学生

2. 指導教官になられた経緯

E氏はいつも研究室に出入りしていた。非常に頑張って日本語を勉強し、帰国後、彼の出身大学と姉妹校提携を結ぶとき、通訳として学長と一緒に日本に来た(その時はその大学の助教授)。彼がここで勉強していた時、下宿に招かれて料理をご馳走になった。その後、ヨーロッパからM氏が来たが、彼は実験等やったことが無かったために1年間研究生をした。193cm、90kgという体型で、向こうではバスケットをやっていた。1年間は単身だったが、仕事を良くやった。予想外に良くやった。そんなにやってくれるとは思わなかった。毎日11時頃まで、晩飯を食べずに仕事をやっていた。この2人を見て、留学生を好きになってその後A氏を引き受けた。

3. 指導中のエピソード、心に残ることなど

4. 留学生を受け入れて研究室は変わったかどうか

M氏は本当に日本語が上手で、ある時装置を壊したM氏に日本人学生が「これを壊したんだそうですね」と言ったら、M氏は「壊したのではなくて、壊れたのです」といったそうです。彼が気楽だったのは宗教的なタブーが一切無いから学会等に連れて行っても、皆と一緒に食事をす

る。飲みすぎて次の日に頭が痛いと言っていた。また、以前学部の運動会があった時、日本人のドクターの学生と綱引きに寄与。彼が居たために研究室が明るくなった。来日後、最初は英語で話していたので研究室は英語が上手くなった。彼は32~35才まで日本で過ごした。ドクターに残るように彼に勧めたが、「35才だから、向こうに帰って普通の生活をしたい」と言って帰国。奥さんも日本に来て医学を勉強し、帰国後家計を助けていると聞いた。今彼が何をしてるか分からない、便りはあるが。帰国当初は凄く安くなったが前に居た会社に勤めていると手紙には書いてあった。彼は良い男だった。E, M, Zの3人の留学生は自分の期待を裏切らなかった。

Zさんは日本語で論文を書いた。彼女は全部英語で書いてから日本語に直した。「日本語で書くように」と言ったらその通りにした。・・・を作るにかけては、第一人者とは言わないまでも日本で有数の研究者である。実際に彼女は2年間でそれをやった。その間足を折って入院したりした。留学生のAとZでは大きな違いが見られる。

A氏は人の言うことを聞かない。パーソナリティかな。時々仕事もやらなくなる(精神状態が悪くなるのかな)日本語が下手。彼に対しては、良い印象が一つもない。一番の驚きはお金。国費の年限が切れてからは、失敗したら被っても良いという覚悟で保証人等、を引き受けた。彼は何かプライドがあった。

5. 留学生の指導で困った事、手を焼いたこと、不満、等

E, M氏で苦労したことはなかった。留学生は国費しか受け入れないが、私費だとこちらで苦労するから。

A氏はわがままで、逃避型。毎週の研究会でどんな成果が出たのか明らかにする時、彼はダメだったのはどうしてダメだったのかということばかりを一生懸命に説明する。また、最後は寝泊まりしていたようだが、実験室を綺麗にするように言っても綺麗にしないでまるでゴミ溜めみたいだった。

文部省の奨学金は地方の都市で暮らすには多すぎるのだろう。彼らは大金持ちになったような気がするためか、Aは、家電やカメラなど高級品をそろえて凄く贅沢をしていた。Aを見ている限り、奨学金をやり過ぎのようにも思えるが。

今は、国費留学生をとりにくい状態にある。昨年出来た「科学技術基本法」ではポスドク1万人計画があるが、ドクターは日本人は少ない。現在半数が留学生で支えられている。もっと気軽に留学生を受け入れたら良いように思うのだが。

すべての省庁が協力してお金を費やそうとのことで、人、金(5年間で17兆円)、制度(兼業規定を緩める)の3つを上げているが、人の問題が解決されない。留学生で良いから増やしてほしい。

6. 日本人学生の留学生に対する評価およびその変化

良く分からない。A氏に対し研究会の時に怒ったから、皆は尊敬してないかもしれない。彼が別刷りの請求書をこちらに送ってきて、別刷りも送ってやったのに何の連絡もない。残念だけれど、留学生の出身国の印象が悪くなる。4年生の日本人学生に振り回されてかれはやった。学生はA氏より、良くやった。A氏は留学先の国の言葉を覚えたほうが良い。

M氏は皆に溶けこんで面白かった。E氏は「北国の春」を彼の母国語で歌う。A氏は学生との

トラブルは無いが交流もない。彼の宗教上のタブーには困ることはなかったが、気を使った。

7. 帰国した留学生とその後の交流

8. 留学生受入れ経験による、教官個人としての変化など

人を見る目、先入観がなくなった。良い学生は良いし、そうでない学生も居る、国に拘らず。留学生を見る目が出来てきたかなー。E氏は現在でも本学に学生を送ってきている。M氏はヨーロッパに行った時に電話をした。帰国する時に、もっと強く彼を押し留めておけば良かった。来年は彼の家に行ってみたい。他の先生は彼の家に行ってきた。

Zさんには、方法論を教えた。物を教えたのではない。今の彼女のレベルでは、世界中何処へ行っても大丈夫。

9. その他

国費留学生の数を増やす努力をして欲しい。姉妹校以外の人でも国費に入れて欲しい。MもZもそうである。実績のある大学ならば良いのではないか。既に学生を受け入れてレベルが分かっているから。留学生も実績のある大学ならば良いのではないか。

接触場面における母語話者の コミュニケーション・ストラテジー

—経験の少ない母語話者のフォリナートーク—

古本裕子

1. 目的

本研究では「日本語学習者にビデオで見たストーリーを伝える」という課題を母語話者に課し、その場面で彼らが使用するコミュニケーション・ストラテジー¹を調べる。

被験者となった日本人学生は留学生が日本語を学習する補助をしたり、話し相手をしたりするボランティアをしている。自由会話ではコミュニケーションのブレイクダウンが起こることはほとんどないが、難しい課題を与えられた場合はどうだろうか。ここでは直面する問題をどのように処理するか、彼らのコミュニケーション・ストラテジーを観察する。その上でどのような要因が学習者のストーリー再生率に影響を与えるのかを調べる。なお母語話者同士ではどのような話し方をするかについても調べ、比較の対象とする。

2. 方法

2.1 被験者

日本語学習者：

金沢大学の日本語研修コースの学生、男女各1人。母語はそれぞれ、ルーマニア語ブルガリア語である。1996年4月中旬の来日時には、一人が平仮名が少しわかる程度で、二人ともほとんど日本語未習であった。調査の時点では約4カ月日本語を学習し、『新基礎日本語Ⅱ』の終わり近くまで学習していた。調査が終了してすぐ全課程終了し、その時点で、過去の日本語能力試験3級と同じ問題を同じ手順で行った。結果は二人とも3級合格の成績で、初級修了程度の日本語能力を持っていると判断された。

母語話者：

金沢大学の学生（学部2年から大学院2年）、男性4人女性4人。このうち男性3人と女性3人は金沢大学の留学生センター、日本語研修コースの学生に週1回、ボランティアで日本語を教えたり、話し相手をしたりしている。学生のうち1人は、1995年10月から、5人は1996年4月からボランティアを始めた。調査の時点では、実質10カ月および4カ月日本語学習者と接触する機会があったことになる。残る男女各1人はボランティア学生の友人であるが、この人たちは母語場面のみの被験者となった。

日本語学習者同士または日本語学習者と母語話者は全員顔見知りである。何回も話したことがあるペアと、文字どおり顔を見たことがある程度のペアとがあった。

表1 分析の対象とされた会話

	男性	女性	計
母語場面	3組	3組	6組
接触場面	3組	3組	6組

2.2 場所・記録

日本語の教室で行った。机を二つ約120度くらいの角度で並べ、そこに向き合って座ってもらった。それを3台のビデオカメラと3台のテープレコーダーを使って録画録音した。

2.3 期間

実験は1996年8月26日から11月12日までの期間実施された。

2.4 手順

まず、20分間自由に会話した。その後、1人が漫画のビデオを見て、その内容を話し相手に話して聞かせる、という課題をした。母語場面では、話を語り終わったら、今度はもう一方の被験者がビデオを見て相手に話した。接触場面では、母語話者だけがストーリーを話した。話している間、質問も確認も自由にしていいことにした。一つの話が終わった後、今の話を日本語で再生させた。次のページに手順の概略を図で示した。

日本語学習者と母語話者の組み合わせまたは、母語話者同士の組み合わせで実験し、ある程度の期間をおいて前とは別の組み合わせで実験をした。

2.5 素材

素材として使ったのは、オットマー・グッドマン原作・アニメーション制作による「ピングー」シリーズの中から「洞窟探検」「ガールフレンド」「おじいさんの病気」の3つを使用した。「ピングー」はスイスで制作されているクレイアニメーションで、ピングーという名前のペンギンが主人公である。人間の生活とほとんど変わらない家族の日常生活が描かれており、5分間の話の内容も簡単でわかりやすい。最大の特徴はペンギンが話す言葉が「万国共通ピングー語」という設定で、イントネーションと場面設定でことばを理解するという点である。

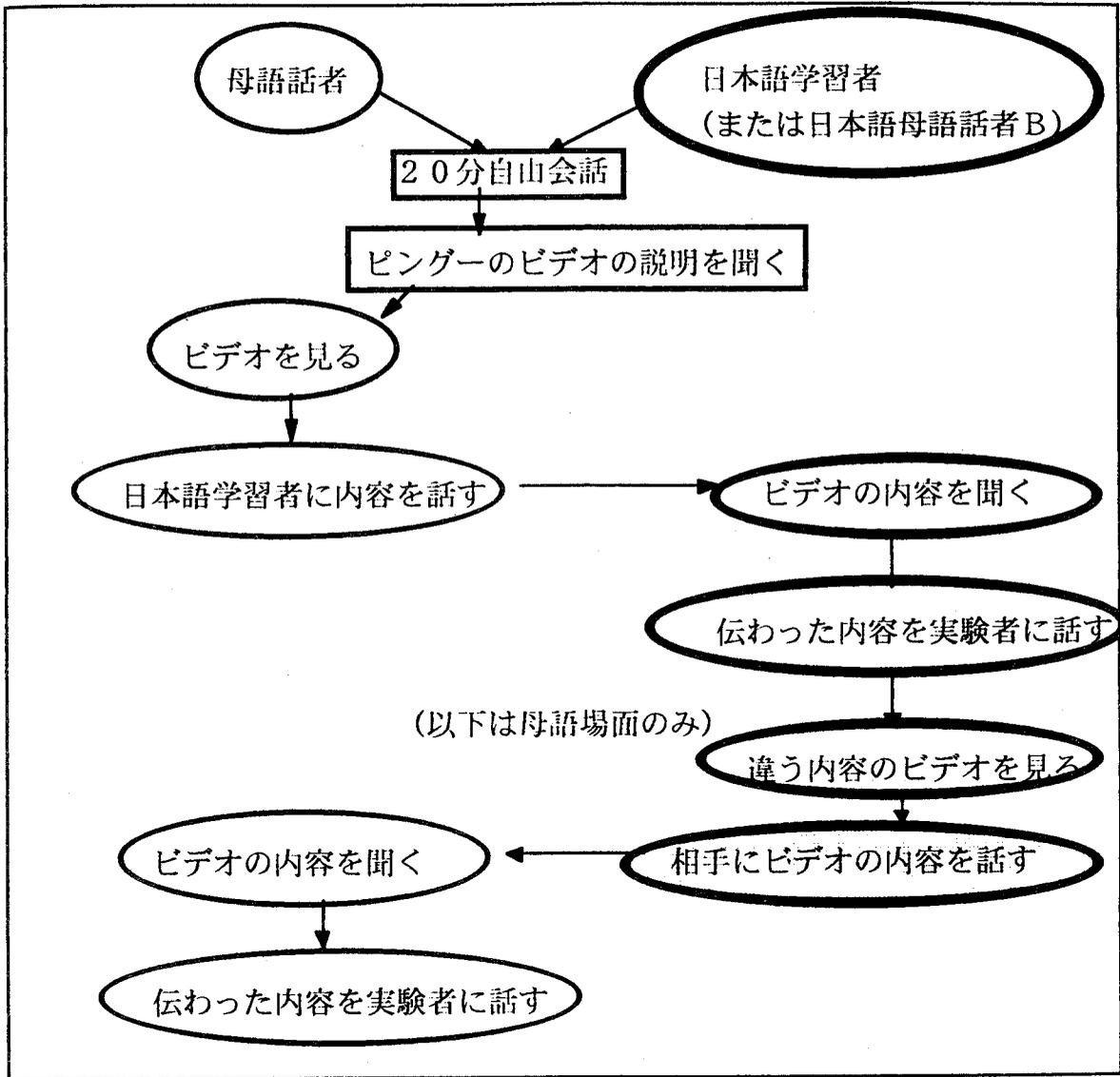


図1 実験の手順

この素材を選んだ理由は、話が短く、わかりやすいこと。初級程度のことばでも工夫すれば、なんとかストーリー展開を伝えることができること。登場人物の話した言葉も語り手の裁量で適当に単純化できることなどの点である。

初めてこの課題をする被験者には、主人公がペンギンであること、話をする事、家族や友達があることなどを、ピングーの別のストーリービデオを見せながら説明した。また相手もこの点について知識があるということを確認した上で課題を実施した。

2.6 分析の方法

得られた発話資料のうち、ストーリー展開を話し始めた部分から、ストーリーの聞き手が「わかりました」など終了を促す言葉を発する部分までの音声テープを文字化した。また、ストーリーの聞き手が再生した話も文字化した。その上で、各談話につき、次のような単位を数えた。

(1) 談話資料を見るための単位

談話資料を分析するために、次の二種類の単位を使った。

ユニット：発話が文法的に言いきりの形になっていたり、終助詞が出現する部分で区切られるユニットである。「はい」などの応答詞、「はな！」など名詞一つで1文とるような場合もある。古本(1993)の「文」に当たる。

小ユニット：発話ユニットのなかで、多くの節がつながっている場合、一つ一つの節で区切られる小ユニットである。

(2) 分析した視点

分析した視点は次の表2のようなものである。なお本研究では、ビデオを見てストーリー展開を語っている被験者を語り手と言い、会話しているとき話している人を話し手と言うことにする。

表2 分析の視点

話し手総ユニット	ストーリーを話し始めてから、話し終わるまでの語り手のユニット数である。ストーリー展開ユニットと応答ユニットを合計したものである。
ストーリー展開ユニット	語り手の発話のうち、ストーリー展開を語っている発話のみの数である。
応答ユニット	ストーリーを語っている途中で、聞き手に対し働きかけたり、聞き手の質問に答えたりしている部分である。ただ情報を伝えるのではなく、相手の反応に注意をはらっているかどうか分かる。
聞き手総ユニット	ストーリーを聞いている人のユニット数である。
ストーリー展開小ユニット平均	ストーリー展開部分の1ユニット中の小ユニットが平均するといくつになるか数えた。
ストーリー展開小ユニット最高	ストーリー展開部分のユニットで中の小ユニットが長く続いた場合のユニット数である。
伝達しようとした小ユニット	ストーリー展開小ユニットから繰返しの部分を除いた小ユニット。伝達しようとした情報量がわかる。
再生された小ユニット	ストーリーの聞き手が再生したストーリーを文字化し、ストーリー展開をした小ユニットを数えたものである。
再生率	ストーリー展開小ユニットから繰返しの部分を除いて、それを伝達しようとした小ユニットで割った。

3. 結果と考察

(1) 会話の例

次に挙げるのは、JM1（男性母語話者）とFM1（男性日本語学習者）のストーリーテリングのための会話を開始してから約2分経過の部分である。（下線は同時発話、××は聞き取り不能部分、数字は経過時間、斜体字は無声化した音声である。）

(例1)

2:05

JM1: ですけども、これにのると、こう|ふたが、こうなってしまう。(0.9) ここ、あなのうえにごおりがこ、
FM1:

2:10

JM1: こういうごおりが こうなっているところがあつて (0.9) で、こっち|はだいじょうぶなんです

FM1: あーはー

2:15

JM1: けど こっちにのるとこうなってしまう。 ボールがここへ ××

FM1: うーん そうです。ふ|ふ。(笑) あー

2:20

JM1: で、ふたりで、こう いっしょ|けんめいとりにこっちにいこうとすると、こうなっちゃ

FM1: は はは、ふたりで はい、はい

2:25

JM1: うからこう、もどつて、で、まあ|ともだちが こっちに××て、で、ピングがこうやっ

FM1: ここで笑

2:25

JM1: てとろうとするんだけども|けつきよくこう、これがこうなつてふたりともなか おちて××

FM1: はい (笑)

JM1: ふたりうん うん。 う……

FM1: (0.7) みんな↑ おー、ふたり、ふたり↑

例に挙げた部分は、ぐらぐらする氷の上ののってボールをとろうとしたのだが、その氷の部分
がどんでん返しのようになっていて、ピングーが友達といっしょに落ちてしまうところである。
話の中でも特に難しい部分だが、母語話者の発話に「ここ」「これ」などのことば多いのは、
身ぶりによって話を伝えようとしているからである²。この場合、母語話者の発話はかなり早く、
言語による情報は伝達できていないだろう。このスクリプトの最後の部分で学習者が「二人？」
と聞き返している。学習者もこれよりも前の部分で、「二人で」と確認していたはずなのに、最
後でびっくりしたように「二人？」と言っているのは、何か重大な誤解があったのである。日本
語の学習は正味3カ月ということから、無理もないところである。学習者はこの後も「難しい」
と何度もサインを出しているのだが、語り手は、身ぶりによって切り抜けようとしている。

ここでは、ストーリーの大筋に関係ない部分は語らず、「あなにおちました」と大意だけが伝
わるようにするという方法があったと思われる。

次はJM2（男性母語話者）とFM1（日本語学習者）の会話の最初の部分である。ペンギンのピングが学校へ行くところである。「ピング そこには ピングのほかにも がっこうですからせんせいの ペンギンと (0.6) せいとのえー、がくせいの ペンギンがいます。(1.8) わかりませんか。」という部分を見ると、1. 生徒を学生と言い換える。2. 学校のことを説明するのに「学生がいる。先生がいる。」というふうにまわりくどいが、簡単な表現で説明しようとしている。3. 「わかりませんか」ということによって、学習者の反応を確かめて話を進めようとしているなどの工夫がみられる。

(例2)

0:35

JM2: . . . おやが いけと (0.6) | います。 で、 ピングは

FM1: あー、ピングの はい

0:40

JM2: がっこうへ (0.6) いきます。 | (1.7) ピング そこには ピング

FM1: いきます。はい。

0:45

0:50

JM2: のほかにも | がっこうですから せんせいの ペンギンと (0.6) せい | との

FM1:

0:55

JM2: えー、がくせいの ペンギンがいます。 | (1.8) わかりませんか。

FM1: わ

JM2: がっこうへ ピング

FM1: かりません。でも、がっこう、がっこうに

1:00

1:05

JM2: が | がっこうへいきます。 (0.7) で、そしたら がっこうには | (1.3)

FM1: いきます。はい。

JM2: がっこうには (0.6) うーん。せんせいの ペンギンが います。

FM1: はいはいはい。

下の例3ではJM3（母語話者）とFM1（日本語学習者）の会話の冒頭のところである。登場人物を知らせることで、大筋を掴ませる効果がある。また、ペンギンが「よんひき」と言って相手がわからなかったため、「よっつ」と言い換えている。これは非文法的なフォリナートークの一種であるが、相手に情報をとにかく伝えることはできる。この話者は、話しを短くまとめ、相手の理解を確認しながら2回目を語った。非常に短い時間で、ストーリーが伝達できていた。

(例3)

JM3: ピングっていうペンギンがしゅじんこう、ピングっていうペンギンがでてくるんですけど (3.8) でてく

FM1:

(2) 母語場面接触場面の違い

母語場面と接触場面のストーリーの語り方の違いを次の表3にまとめた。

- ①表の上半分（網掛けしてある部分）は全て、接触場面の方が数値が高かった。つまり、接触場面のほうが同じ話をするのに時間もかかり、発話のユニット数、聞き手からの働きかけを示す聞き手の総ユニットも多い。また、聞き手の働きかけに答えたり、聞き手に話しかけたりした数を示す応答ユニットも多い。このことから、語り手は日本語学習者に対しては繰り返しをする、話を細かく砕いて話す、言い直しをする、わかったかどうか確かめるなどして、話をしたことが予想される。
- ②反対に、ストーリー展開ユニットは母語場面の方が多い。これから接触場面では語り手が繰り返し部分を多くしていることがわかる。ストーリー展開の平均ユニット数は、接触場面が、母語場面の半分の2.2である。ここから、節が長く続いた複雑な文を発話しないようにするという意識が働いていることがわかる。表中「最高」というのは、どのくらい長く節の続く発話をしているかを見たものである。母語場面では、58も続いている例があった。しかしそのことによってストーリーの聞き手の再生率が下がったということではなかった。

表3 母語場面 接触場面の違い

タスク	母語場面		接触場面	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
時間	3:36	0.03	6:22	0.09
話し手総ユニット	19.7	5.75	70.3	29.3
ストーリー展開ユニット	15.0	5.10	34.0	17.6
(内繰り返しユニット)	0.2	0.41	5.7	2.9
応答ユニット	4.7	3.67	36.3	18.7
聞き手総ユニット	34.8	23.68	67.2	35.3
合計ユニット	54.2	24.73	137.5	62.4
ストーリー展開小ユニット	69.8	23.37	64.8	23.6
平均	5.0	2.43	2.2	1.0
最高	58.0	19.93	6.0	2.1
(繰り返し小ユニット)	0.2	0.41	6.8	3.9
伝達しようとした小ユニット	69.7	23.17	58.0	21.4
再生された小ユニット	33.0	9.21	12.0	5.3
再生率	0.486	0.032	0.249	0.167

ただし、この2.2は、応答などの短い発話も含んだ平均で、実際にはもう少し節が続く場合が多かった。初級後半で日本語学習者は複文（重文）を習うが、そこではまだ、一つ一つの文や節を慎重につないでいく段階である。節が3つ4つとつづくと、それだけで理解不能になることさえあることを、意識しておく必要がある。

③再生された小ユニットを見ると、これは母語場面のほうが圧倒的に多い。母語場面で再生率や再生量が上がるのは当然のことであるが、接触場面では時間をかけて、たくさん語られたにも関わらず、再生されたのは12小ユニットである。この点からもあまり効率のいいコミュニケーションがなされなかった可能性がある。

(3) 学習者の、再生率を上げる要因となったもの

①次に挙げる図1は、母語場面での「伝達しようとした小ユニット」と「再生された小ユニット」の相関を図示したものである。これを見ると、この二つの相関はかなり高く($r=0.916$)、情報を多く伝達すればするほど再生される小ユニットも多いことがわかる。それに対し、図2は同じものを接触場面で見ただけのものである。この場合は、相関はない($r=-0.153$)。

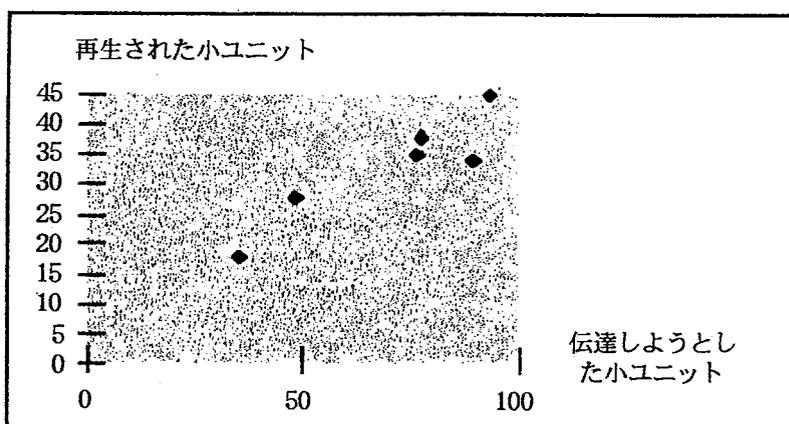


図2 母語場面での「伝達しようとした小ユニット」と「再生された小ユニット」の相関

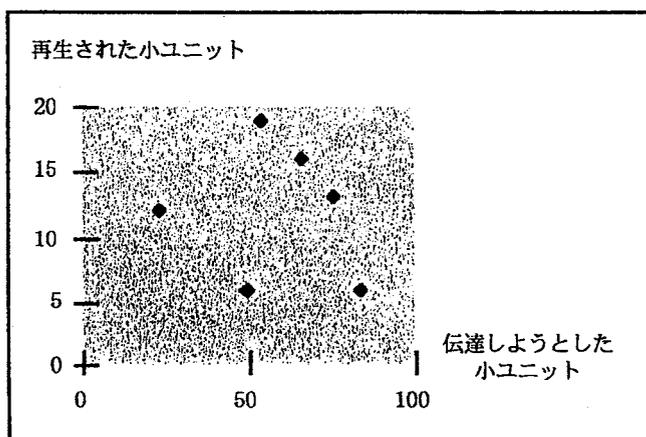


図3 接触場面での「伝達しようとした小ユニット」と「再生された小ユニット」の相関

この相関図からわかるように、話が丁寧で長いことがそのまま分かりやすいことを意味しない。必要以上に細かい部分まで説明することは、かえって逆効果である。

今回の語り手の中には、ストーリー展開に欠かせない重要な部分と、そうでない部分がはっきりしない上に、それが長い話になり、学習者に負担を強いていた。これは、ビデオのストーリーをどう理解するか、それをどう要約するかという問題で、母語場面にも同じような問題が発生する可能性もある。しかし、今回のように相手の日本語のレベルが非常に低い場合、情報の質と量に考慮すべきであろう。

②さらに図4の接触場面での「1ユニット中の平均ユニット数」と「再生された小ユニット」の相関($r = -0.713$)を見ると、発話中に含まれる節の数が少ないと再生率が上がることがわかる。

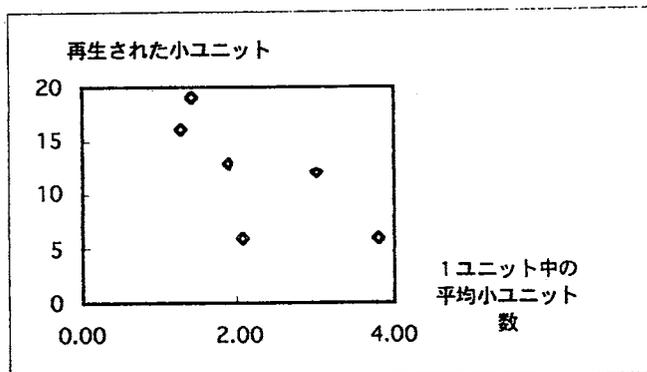


図4 接触場面での「1ユニット中の平均ユニット数」と「再生された小ユニット」の相関

また、接触場面では、「話し手の応答ユニット」が多いほど、再生率が上がる($r = 0.847$)。それは図5に示した。

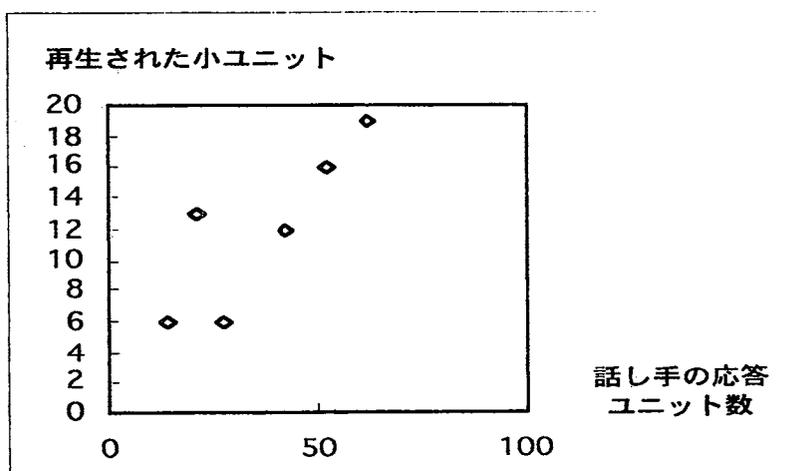


図5 「話し手の応答ユニット」と「再生率」の相関

4. まとめ

以上、本研究ではストーリーを語るという課題を与えた場面でのフォリナートークの実態を確かめた。日本語学習者にストーリーを話すときボランティア学生は、フォリナートークを使っていたが、それは充分なものではなかった。それは、学習者の日本語能力を十分把握していないところから来ていると思われた。しかし、情報量を調節して少なくしたり、発話の節をいくつも続けられないなどの工夫をすると、学習者のストーリー再生率が上がることがわかった。今後は、身ぶりなど非言語的な要素はどのように効果をあらわしているか、ボランティア学生の経験が深まるにつれて、同じ課題をどのように処理していくのか、学習者のレベルが中上級の場合には、フォリナートークがどのように変わるかなどを調べていきたい。

〈参考文献〉

- 尾崎明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー — 「聞き返し」の発話交換をめぐって」『日本語教育』81号 19-30
- 古本裕子 (1993) 『発話に随伴する視線行動の研究—日本語話者の場合—』名古屋大学大学院文学研究科修士論文
- 志村明彦 (1989) 「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68号
- 一二三朋子 (1985) 「母国語話者と非母国語話者との会話における母国語話者の意識的配慮の検討」『教育心理学研究』第43巻 第3号 277-286
- スクータリデス, A. (1981) 「外国人の日本語の実態 (3) 日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』
- Tarone, Elaine (1980) 'Communication Strategies, Foreigner Talk, and Repair in Interlanguage.' *Language Learning* Vol.30 No.2 417-430.
- ダニエル・ロング (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に」『日本語学』12月号

1 コミュニケーション・ストラテジー

尾崎 (1993) は、会話における「問題処理の方策を『訂正ストラテジー』、コミュニケーション上の効果をあげる方策を『円滑化のストラテジー』とよんで区別し、この二つをあわせたものがコミュニケーション・ストラテジーである」とした。本研究のコミュニケーション・ストラテジーは尾崎の定義に従う。

本研究では、接触場面で、母語話者が話すフォリナートークを分析する。聞き手である日本語学習者が聞き返しなどの方法で、話し手の母語話者になんらかの修正を求めたときに、話し手がとる方策である訂正ストラテジーと、母語話者の話し手が聞き手の学習者に対し、話しを理解しやすくするためにする円滑化のストラテジーと、この両方を視野に入れている。

² Tarone (1980) は、会話の参加者がある障害でコミュニケーションがうまく運ばないときにそこから抜け出す手段として次の5つを挙げている。

- (a) Paraphrase (言い替え) … Approximation (近似) Word coinage (造語)
Circumlocution (遠回し表現)
- (b) Borrowing (借用) …… Literal translation (翻訳)
Language switch (言語切り替え)
- (c) Appeal for assistance (援助要請)
- (d) Mime (身ぶり)
- (e) Avoidance (回避)

「やさしい日本語」に関する日本人の意識

島 弘子 八重澤美知子
桜田千采 (松下) 早川幸子

I. 目 的

近年来日する留学生の増加に伴い、日本語がほとんど理解できない、あるいは、ごく簡単な内容しか解せない外国人も多くなってきている。その結果、日本人側がそうした人たちと大学の研究室や事務の受付窓口で話す機会も増えている。受け入れ側の日本人は、特別に日本語教育を受けたことがないにしても、それぞれ「やさしく、わかりやすい日本語」を心がけて、外国人に接している場合が多いことだろう。しかし、外国人に対する「やさしい日本語」「簡単な日本語」「わかりやすい日本語」に関して、果たしてどういう意識をもっているのだろうか。また、「やさしい日本語を話そう」とする意識と「外国人にとってやさしい日本語」に対する認識のギャップはないだろうか。もし、日本語が少ししかわからない外国人留学生と接する際にコミュニケーション・ギャップが生じるとすれば、こうした差異が影響していないだろうか。

これまで受け入れにあたっている日本人の観点から、異文化や留学生に対するイメージ、母語話者と非母語話者のインターアクション等に関する調査はなされてきているが、やさしい日本語に関する意識調査はほとんどなされていない。そこで、本稿では、受け入れ側の日本人、主として留学生の直接的窓口である大学事務職員に焦点をあて、外国人に対する「やさしい日本語」意識を考察してみる。具体的には、以下の3点から調査を行い、分析・考察を進める。

- 1) 日本人側からみた「やさしくわかりやすい日本語」に対する意識
- 2) 受け入れ事務職員による、日常語彙や表現に関する難易度の認識について
また、事務職員の認識度と一般の日本語教科書を基準にした難易度との相違
- 3) 外国人に対する会話想定場面でのフォリナー・トーク
(文法面での特徴、語彙面での特徴、ディスコース面での特徴) について

I. 方 法

1. 調査方法：アンケート調査（資料）
2. 対象者：国立大学で働く事務職員（留学生との接触が比較的多い職場の職員）、国立大学学生、大学院生。その他の私立女子短大、専門学校生計約200人

表1

	男性	女性	未記入	合計
大学事務職員	20	14	1	35
大学チューター、ボランティア学生	10	5	0	15
大学工学部学生（4年生）	19	0	0	19
大学院生	27	2	0	29
短期大学学生（2年生）	0	46	0	46
専門学校学生	0	48	1	49
合 計	76	115	2	193

専門学校生、短期大学学生、大学学部生、大学院生には、クラスのなかでアンケート内容を説明し、記入後回収した。チューター学生、およびボランティア学生へは送付等により、回答を寄せてもらった。事務職員へは、留学生と接触の多い職場に主旨説明書を添付したアンケート用紙を配布し、回収した。

3. 実施時期：1996年9月～1996年12月（4か月間）

4. アンケート内容

アンケートは、「個人的プロフィール」「やさしい日本語に対する意識」「やさしい日本語に対する認識」「日本語が少ししか理解できない外国人に対する道案内」の4項目に分かれている。

内容：

- 1) 個人的プロフィール（性別、外国人との接触の程度、留学経験など）。
- 2) やさしい日本語に対する意識（日本語が少ししかわからない、いわゆる初級レベルの外国人日本語学習者に対しどのように話すのか、意識の選択。）

この質問項目及び選択肢に関しては、基本的にスクータリデスに準拠している。フォリナー・トークの普遍的な特徴と日本語独自の特徴（スクータリデス：1981）、ディスコース上の特徴（スクータリデス：1988）をもとにし、言語的側面・非言語的側面から項目を選択した。

言語面側面：「話す速さ」「語句の切れ目（ポーズ）の時間と回数」「声の大きさ」「声の明瞭さ」「方言の使用の有無」「文体」「外国語の使用の有無」「一文の長さ」「助詞の省略」「助詞の強調」「眼前の相手に対する人称の使用」「敬語の使用の有無」「キーワードの重複、強調」「間違いの訂正」「確認」

非言語的側面：「身ぶり手ぶりの使用」「相手のどこを見て話すか」「相手との距離」「その他」

を質問項目として取り上げ、記号で選択してもらった。（なお、この意識調査は、時間の制約上、事務職員には行われなかった。）

- 3) やさしい日本語に対する認識（似た意味を表す3つの選択肢の中から最もやさしいと思う語句、表現、文の選択）

この質問項目作成に先だち、1996年5月から8月にかけて、留学生と接触の多い職場の協力を得て、事務職員と留学生の実際の会話をテープに録音させてもらった。また、日本人学生と留学生の会話に関しては、96年春から工学部で発足したボランティア・グループによる異文化交流会（週1～2回定期的に開催）の機会を借りて留学生と日本人学生との自由会話を、出席者の了承のもとでテープに録音した。

「留学生と日本人学生」「留学生と事務職員」による実際の会話から、相互理解が困難に思われたつぎのような場面などを参考に、質問項目を選定し、選択肢を作成した。

（例1）

事務職員；そこに日付を書いてください。

留学生：・・・？

事務職員；日付を。

留学生：・・・？

事務職員：日付、わかる？デイト、What's date？

留学生：（日付を記入する）

（例2）

日本人学生1：チュ、チュニジアって。あの、ちょっと、場所、よくわかんないですけど。

留学生1：あ、そうですか。あの、チュニジア、あの、アフリカの方へ・・・ここからここまで（壁の世界地図を指しながら）だいたい40キロメートルです。

日本人学生1：ふーん。ヨーロッパに近い。

留学生1：自然が多くて、ヨーロッパ人みたいです。

日本人学生1：何、何語ですか？

留学生1：？

日本人学生1：何語ですか、つかう言葉は。

留学生1：あのう、アラビア語です。

日本人学生1：アラビア語。ふーん。

（例3）

日本人学生2：フランスっていうのは、あの、外国語は、えーっと、学校ではどう いうような風に習いますか。

留学生2：？

留学生1：日本語は、簡単に。日本語の、まだ。簡単な日本語。

日本人学生2：あの、フランスは、えー、高校とか、中学校とか、どういう外国語 を習いますか。

留学生2：あー、どいう？

日本人学生2：日本ですと、あ、いいです。

日本だと、えー、日本語以外に、英語を外国語として、習います。フランスでは、何語を。

留学生2：あー、わかります。えー、一番目は、英語を。それに、ドイツ語を、と、スペイン語、うーん。日本語はちょっと難しい。

（例1）では、事務職員にとっては日常に使用されている語彙「日付」が留学生に通じていない。しかし、職員は通じない原因がつかめず、「日付」という単語を繰り返し、最後は英語に切り替えることによって、コミュニケーションを成立させた形になっている。（例2）（例3）では、ボランティア学生の使用する疑問詞が、初級後期レベルの学生には難しすぎ、やさしい語句への「言い替え」を余儀なくされている。

これら日常語彙や疑問詞のほかに、縮約形、擬音語・擬態語、文体、単文・複文の選択、助詞の省略、複合助詞（例；～について／～に関して／～をめぐって）、意向形などを取り上げ、全部で25項目とした。

選択問題の正否の準拠として、一般に広く普及している代表的な日本語初級教科書8種（注1）の提出順序の早いものを、よりやさしいものと判断した。例えば、質問項目

が、込み入った内容になると理解できない外国人留学生と日本語で話すことになった。さて、このときの日本語は、日本人と話すときの日本語とどの程度似ているか」という度合いを指し、まったく同じ場合を100%として、5段階で評価してもらった。その結果、事務職員と学生の類似度（各グループの記入者に対する割合）では、共にほぼ中央の50%に回答が一番多く集まった。

（図2）からわかるように、ふだん「接触の少ない」グループは、ばらつきが大きく、100%から25%までに分かれて分布し、反対に「接触の多い」、または「やや多い」と答えたグループは50%の類似度の前後に集まっている。

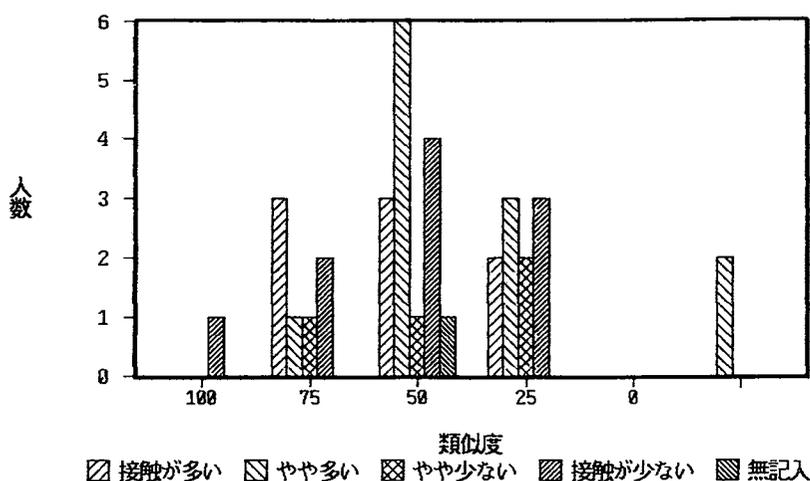


図2 接触頻度と類似度

2) 「やさしい日本語」の意識

学生には日本語が少ししか理解できない初級レベルの外国人にわかりやすく話す際の意識を記号で選択してもらい、事務職員対象のアンケートでは自由記述欄を設け、外国人留

表2 受け入れ事務職による留学生と接する上で感じる点、工夫している点等

<p>困難に感じた点</p> <p>「事務用語の説明が困難」「留学生の日本語力のなさ」「自分の英語不足」「相手が理解しているかどうかの確認ができない」「知識や話題面での自己の教養不足」「政治に疎いため、政治的問題を話しにくい」</p> <p>工夫している点、気をつけている点</p> <p>話し方に関する回答が多く、特に「ゆっくり話す」を6人が指摘している。他に「繰り返して、確認をとる」「ジェスチャーで」3人、「大きい声で」は2名。その他の回答には、「地図、現物、筆談利用」「短い文で」「相手の反応を見ながら」「省略した言葉は使わない」等</p> <p>気づいた点、必要な情報</p> <p>「互いに文化が異なるから楽しい」「確認の難しさ」「相手国に対するある程度の知識」。</p>

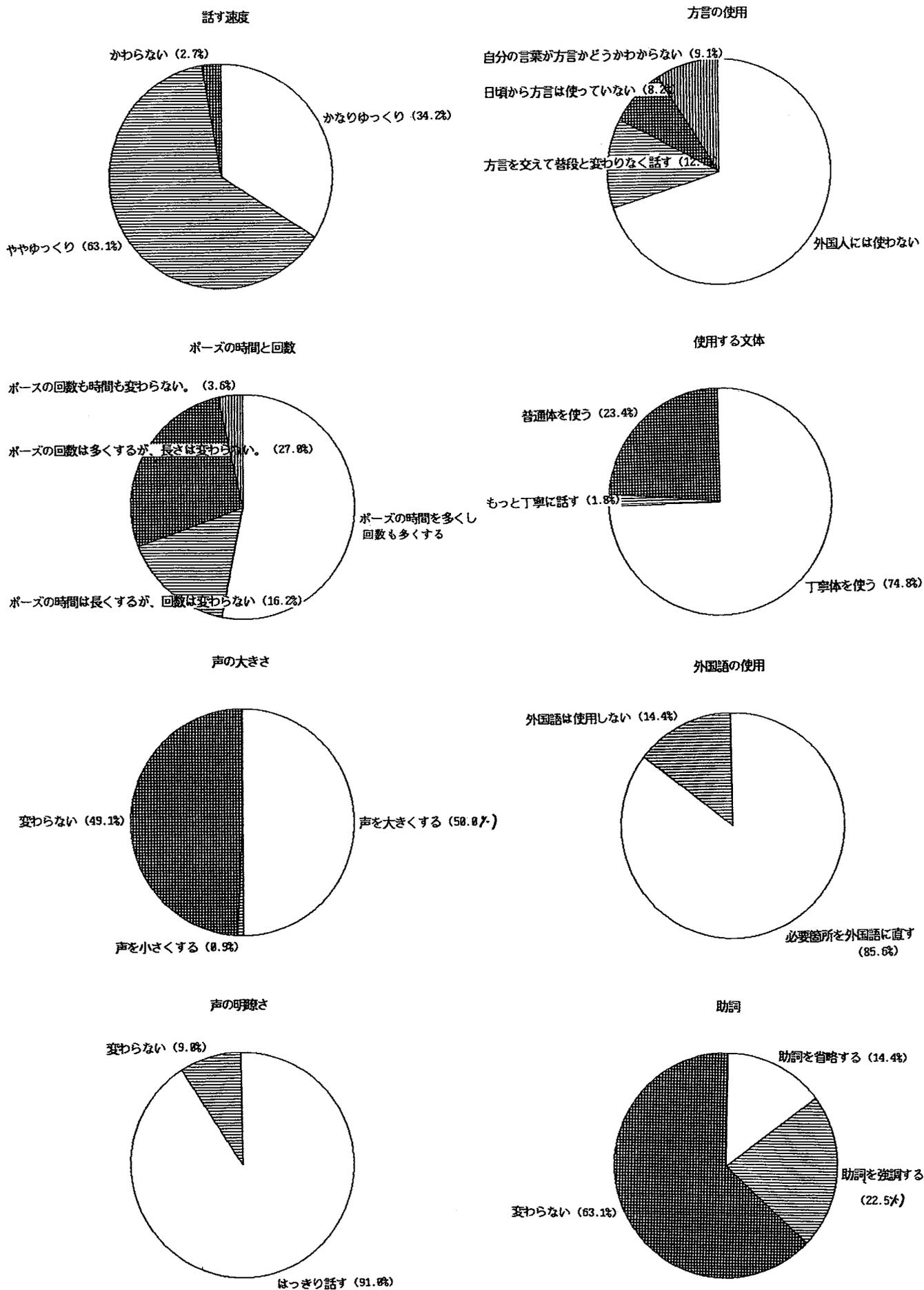


図 3 「やさしい日本語」に対する意識 (学生)

学生との会話で、困難に感じた点や工夫したり気をつけたりしている点、その他気づいた点、会話の際に必要な情報などを自由に書いてもらった。

まず、事務職員の回答で最も多かったのが、工夫している点の「ゆっくり話す」であった。ほかには、言語運用面での「ジェスチャーで」「反応を見ながら」「大きな声で」といった意見であり、話す内容そのものより、話し方に関心があることがわかる。(表2)

一方、学生による各質問項目に対する回答は次の(図3)のようになった。上述の外国人に対して「ゆっくり話す」「はっきり話す」「ポーズの回数や時間を多くする」学生が90%以上いる。声の大きさは「大きくする」と「変わらない」が約半数に分かれる。文体については「丁寧体を使う」が約4分の3を占めている。「外国語の使用」面では、85.6%もの学生が「難しそうな語句、わかりにくい箇所のみ外国語に直してはなす」と答えている。また、「一文を短くする」、「身ぶり手振りを多くする」、「理解の確認を多くする」も各85.6%いた。

そのほか、「方言の使用」意識面では、金沢の地域性がでてきているようだ。ダニエル・ロング(1992:p.64)によると、「指摘できることが2つある。1つは、関西人は、見知らぬ外国人に道を聞かれた場合でも関西方言を使うということである。特に、これが一般の方言調査の場面設定では、『最も方言がでにくい』と考えられる場面でもあるにもかかわらず、何らかの関西方言を使っている被調査者が半数以上(54%)を占めるという事実は注目に値する。・・・(後略)」である。ロングの指摘通り、今回の意識調査でも「方言を交えて普段と変わりなく話す」が12.7%、「外国人には方言を使わない」が70.0%の結果であった。さらに、数値は低いものの、「自分の言葉が方言かどうかわからない」という意見も9.1%いた。

次に「助詞の使用」面をみると、過半数が「変わらない」と答え、2位が「助詞を強調する」で、約4人に1人(22.5%)いた。志村(1989:p.210)によると、「FT(Foreigner Talk)の方が母語よりも助詞が多く使われ、省略されない」が、この意識調査では「助詞を省略する」と答えた学生が、14.4%いた。

3. 三択問題における難易度の認識

1) 全体的傾向

学生と事務職員による問題別の正答率の比較は、(図4)の結果になった。一番正答率

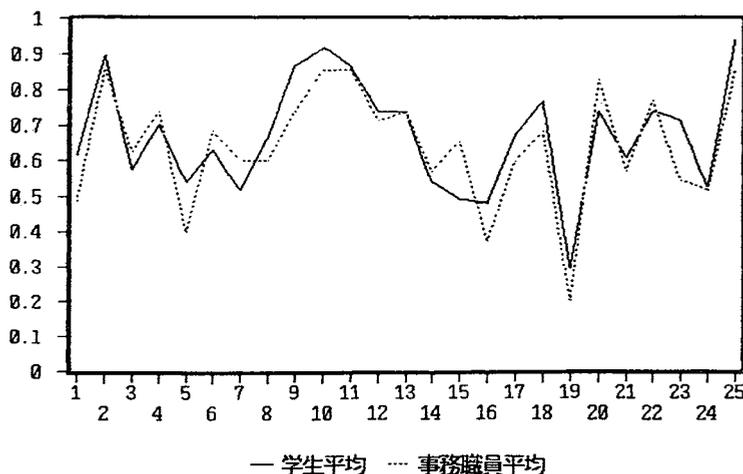


図4 3択の学生/事務職比較

の低かったのは、前述の質問19番「そこにおいておいてください」／「そこにおいておいてください」／「おいたままにしてください」の三択問題で正答率が29.4%しかなかった。

2) 事務職員による「やさしい日本語」の認識

正答率の低いものには、縮約形、文体、「～んです」体、位相（和語と漢語等）などさまざまなレベルのものが含まれ、認識の誤りの傾向や理由について簡単に述べることは難しい。

例えば、漢語より和語の方がはやく導入され、やさしい語であると判断されるが、2)番の「学校へ行きます」「通学する」「学校へ通っています」では、正答率が85.7%もあるのに比べ、1)番の「食べます」「食事します」「食事をとります」の正答率が、2)の約半分の48.6%しかないのは、なぜだろうか。これは、事務職員に限った傾向だけではなく、(図4)の学生全体の正答率をみても同様の結果を示しているのはあきらかである。今後はもっとデータ数を増やして調査分析の必要があると思われる。

次に正答率の低かった順に5問：「あ、そのかばんは、そこにおいておいてください／あ、そのかばん、そこにおいておいてください／あ、そのかばん、おいたままにしてください」、「どこでその時計を買いましたか／それはどこで買った時計ですか／その時計はどこで買ったんですか」、「お兄さん／兄／兄さん」、「ご飯を食べます／食事します／食事をとります」、「一緒に帰りましょう／一緒に帰ろう／一緒に帰らない?」をとりあげ、何を一番やさしいと考えた人が多かったのかをグラフ化したものが(図5)である。これを見ると、事務職員のそれぞれの項目での難易度意識がでており、文体、複文の名詞節、動詞の活用形など、いろいろな要素が複合して難易度を形づくっていることがわかる。

4. 道案内の分析

1) 全体的特徴

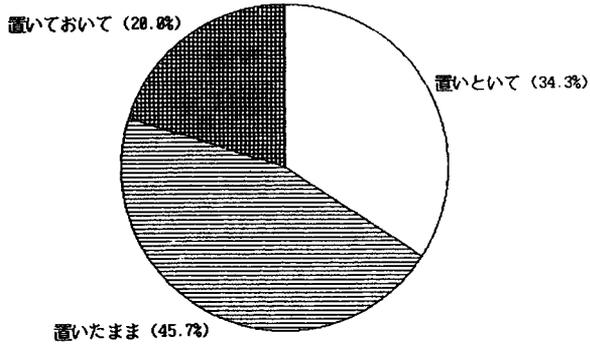
道案内で使用された言語・文の数の2点から全体的に調べた結果は、以下の通りである。

a. 言語

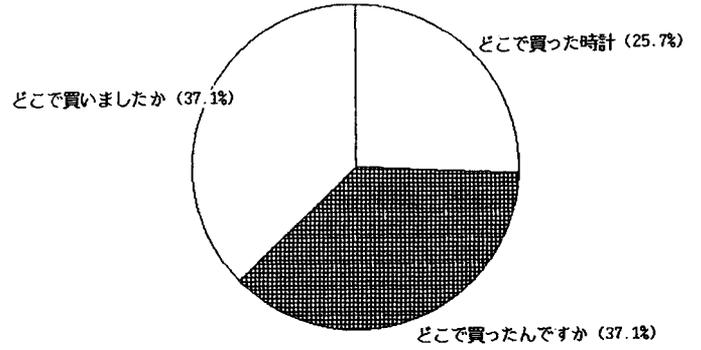
使用した言語には、「日本語のみ」、「英語のみ」、「日本語・英語併用」の3通りがあらわれた。外国語としては、英語1カ国語であり、全体では77.4%の人が日本語での道案内をしている。

英語使用（英語のみ＋日英併用）に着目すると、各グループ間で差異が見られた。専門学校生が、32.6%と最も高く、次いで短大生の16.7%、チューター・ボランティア13.4%、学部生10.5%、大学院生6.9%、事務職員に至ってはわずかに2.9%であった。これを、接触経験の有無との関係から見てみると、専門学校学生のうち、接触経験なしが49人中9人（18.4%）で各グループ間で最も高い。短大生は、46人中7人（15.3%）、チューター・ボランティア学生は15人中2人が接触経験なし（13.3%）である。学部生が19人中1人（5.3%）、大学院生は29人全員接触経験があることから、外国人との接触が少ないほど、英語使用が高くなるといえる。この関係を示したのが「英語使用率と接触経験有無の関係」（図6）である。

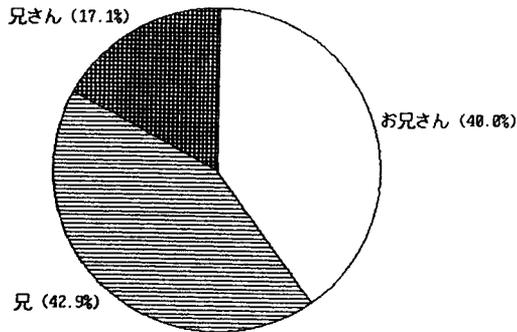
19置いておいてください



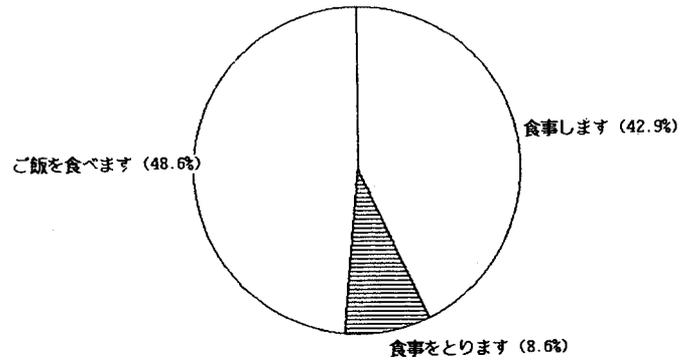
16どこで買いましたか



5お兄さん



1ご飯をたべます



24一緒に帰りましょう

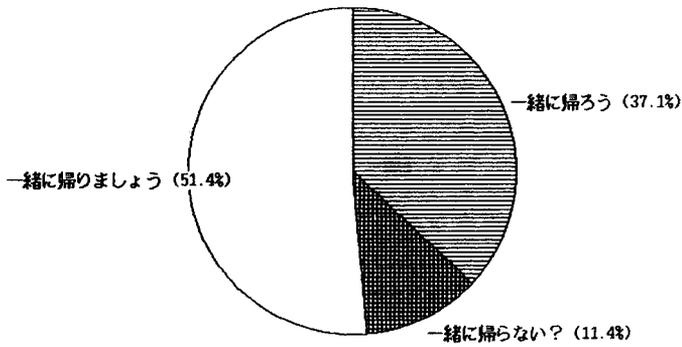


図5 正答率の低い三択問題の回答内訳（事務職員）

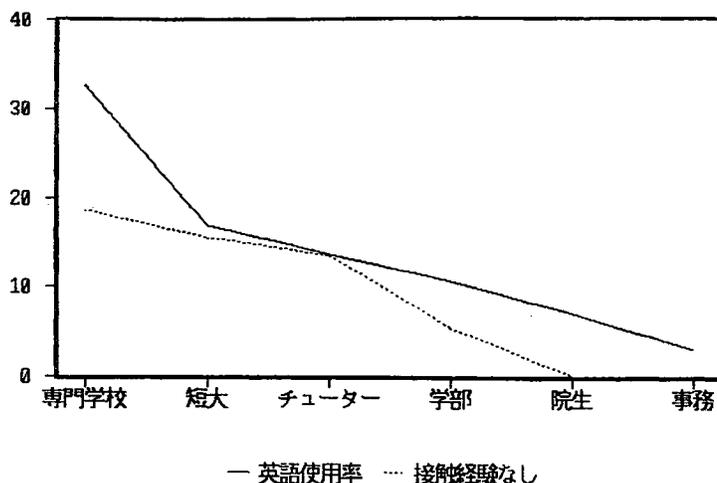


図6 英語使用と接触経験無しの関係

b. 文の平均数

道案内に要した文の数の平均をグループ別にみると、専門学校が最も低く、短大、職員が高い数値を示した。全体の平均数は、2.60文であった。一番高いグループは短大生で3.09文、次が事務職員で3.0文であった。事務職員は記入した24人中、1文の人が6人で、3文（7人）2文（4人）5文と6文（各3人）4文（1人）という分布を示した。反対に一番少ないグループは、専門学校生で1.87文。専門学校学生は、特に1文で表そうとした人が49人中21人（42.9%）と最も多かった。

(例4)

靴屋の前を通ってまっすぐ歩いていきます。2回横断歩道を渡ると、小学校があります。そこを左に曲がり橋を渡ります。右に本屋が見えます。そこを右に曲がってまっすぐいくと正面に駅があります。（事務職員）

(例5)

この道を真っ直ぐ行って、2つ目の曲がり角で右に曲がって、まっすぐいったら、橋があって本屋さんで、右に曲がって真っ直ぐいたら駅ですよ。（専門学校学生）

2) 文法面の特徴

a. 文体

丁寧体（です、ます）を使って話すか、普通体（だ、する）を使って話すか、という文体の使用意識に関しては、次のことがいえよう。事務職員が最も丁寧体の使用意識率が高く、約92%もあり、学部学生が最も低く63%、全体の平均では77.2%である。この平均率は、先に述べた2.2) 意識調査での「丁寧体の使用率」（74.8%）に極めて近い数値である。

b. 複文の使用

副詞節、名詞節別にその使用率を調べた結果は、次の通りである。

複文のうち、「～から」「～ので」「～と」「～ば」「～たら」等を使った副詞節の使

用率は、各グループでの差異はあまり大きくない。もっとも低い専門学校生で80.4%、もっとも高い事務職員で91.7%、平均すると84.8%を示す。

一方、「橋を渡ってすぐの右にまがる道をまっすぐ行くと駅です。」のような名詞節の使用率は、各グループ間で(図7)のような差異を示している。最も使用率の高いのが、学部学生による47.4%、もっとも低いのは事務職員の4.2%で、最高と最低の間で約10倍の隔りがある。学部学生が群を抜いて高いほかは、他の学生グループによる差異は小さく、この傾向は、4.2)a.「使用する文体の比較」の結果と類似している。

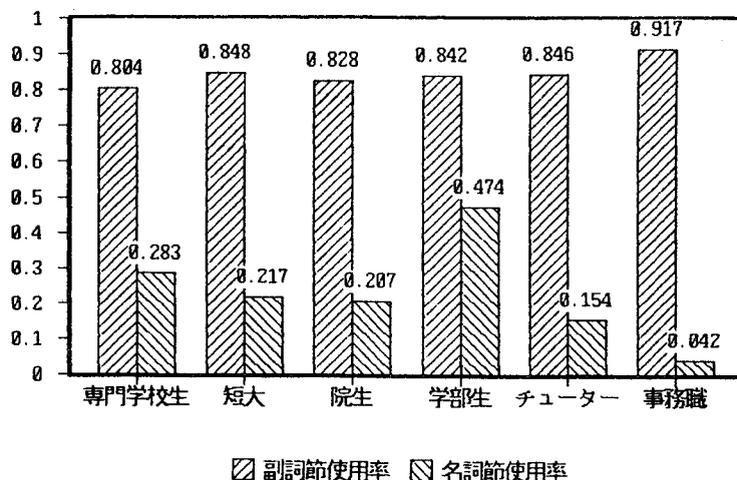


図7 副詞節、名詞節の使用率

c. 連用接続

「右に曲がり、・・・」「まっすぐ行き、・・・」といった連用接続の形は、事務職員に多用されていた。「日本語」と「日本語・英語併用」の人の中で連用中止形を使用した者は、事務職員24人のうち17人(70.8%)。一方、学生は、154人中、28人(18.2%)と極めて少数だった。

d. アスペクト

アスペクトの中でも、「駅が見えてきます」のような抽象的、時間的経緯や変化を示すアスペクトは初級以降に導入されることが多いが、ここでは学生15人、事務職員6人の回答に「～てくる」の用例がみうけられた。また、「橋を渡って行くと・・・」のように具体的な移動を示す、比較的やさしいアスペクトは、事務職員4人を含む16人が使用していた。そのなかで専門学校学生による「～ていく」「～てくる」の使用者数が多く、各5人(用例数9)と7人(用例数9)であった。反対に使用率が低いのは大学院生で、各2人とどまった。

(例6)

真っ直ぐにあるいて3つ目の信号を左に曲がり、歩いていくと橋が見えてきます。
(専門学校学生)

e. 命令形

「～なさい」という丁寧な命令形が事務職員グループから3例みつけた。使用したのは、50代の男性1名、40代の女性1名である。これは、留学生との年齢差が親子ほど離れていることの反映かと思われる。(初級日本語教科書ではこの「～なさい」の命令形にはふれていないことが多い。)

(例7)

まっすぐ行って、信号の所を左に曲がりなさい。(事務職員)

f. 助詞の省略

2.2)では、14.4%の学生が「やさしい日本語」に対する意識として、「助詞の省略」をあげていたが、道案内の記述においては、助詞の省略は5人に(2.8%)しかみられない。この5人は、すべて学生であり、典型的なものとして以下の例があった。

(例8)

まっすぐすすんで、2こ目の信号、左、橋渡って、本屋を右、その後まっすぐいくと駅。(チューター・ボランティア学生)

3) 語彙面の特徴(用例数に基づく分析)

延べ語数が多かったものを順に5語あげると、「曲がる」(299例)、「まっすぐ」(283例)、「行く」(228例)、「ある」(177例)、「渡る」(121例)であった。特に「まがる」「まっすぐ」は、道案内の際に不可欠な基本語彙で、他にやさしく言い替えることがむずかしい語彙である。そのため、述べ語数が多くならざるをえない。反対に、やさしい言いかえの可能な「左折する」、「右折する」は、外国人対象の場合、わずか1例の用例であった。

4) ディスコース面の特徴

想定された会話のもとでという制約上、このディスコース面に関しては、わずかの用例しか見いだせなかった。意識での選択問題では高い数値(86.5%)を示したジェスチャーだが、この記述において「ジェスチャーで示す」と記入した人は13人(7.3%)だった。それは、「手振りで示す」「指で方向を示して」等の説明付きの回答であった。

また、同様に「OK?」、「わかりますか?」などの確認表現をいれた人も、7人(3.9%)だけだった。

(例9)

この道を真っ直ぐ行って2コ目の信号を左に曲がる。OKですか?!そしたら、その道をまっすぐまっすぐ行くと右に本屋が見えるのでそこを右に曲がってください。そしたら駅が見えます。OK?(専門学校学生)

IV. 結 論

以上分析したものから次のようなことがいえる。

「やさしい日本語」に対する意識について

- 1) 一般学生の外国人との接触経験率は高い(88.0%)が、挨拶程度の軽い接触がほとんどである。しかし、この接触の有無が外国人対象の日本語類似度その他に影響を及ぼしている。
- 2) 学生の意識面では、「ポーズを多めにとり」「ゆっくり」「はっきり」「方言を交えないで」「ジェスチャー」や「確認をとりながら」「必要に応じてキーワードなどを英語に置き換え」て、分かりやすい日本語を外国人に話そうと考えている。
- 3) 事務職員も、同様に「ゆっくり」「確認をとりながら」「繰り返して」留学生に話す工夫をしているが、日本語の語彙をやさしくするということより、話し方の工夫で外国人留学生にやさしくそして間違いなく伝えようとする意識が見られる。

受け入れ側事務職員の「やさしい日本語」認識について

- 4) どの表現、文を「やさしい」と認識するか、そしてその基準はどこにあるのか、については、今回のデータからは読み取ることが難しかった。しかし、設問ごとの正答率が、事務職員と学生全体とでほとんど同じ傾向を示しているところから、日本人側にとって共通の認識の基準、判断基準があるとはいえるだろう。文体、複文、「～んです」体、疑問詞、語彙の位相その他広範囲にまたがる領域なので、今後はさらにデータ数を増やして調査する必要がある。

外国人との想定会話におけるフォーリナー・トークについて

- 5) 使用言語に関していえば、全体に外国人との接触経験が少ないほど、英語使用率が高くなる。
- 6) 各グループ間での複文(副詞節)の使用率にさほど差異はみられないが、名詞節の使用率の差異は大きく、最高(学部生、47.4%)と最低(事務職員、4.2%)で10倍の隔たりがある。特に事務職員の名詞節使用率の低さは、留学生との接触経験が影響しているのではないか。
- 7) 文体に関して、意識面で丁寧体を選んだ人は4人に3人と多いが、会話想定場面での丁寧体の使用率もほぼ同様の結果を示した。中でも事務職員の丁寧体使用率が高い。
- 8) 丁寧体の選択意識と、「何が丁寧体で何が普通体か」の認識のずれがみられ、意識では丁寧体を選択しようとしても、実際の語彙や表現で丁寧体を選んでいないケースがある。(例:「～ましょう」vs「～しよう」等)
- 9) 事務職員は、基本的に「短い文」「簡単な文」でやさしく話そうという意識が強く表れている反面、初級では扱わないような丁寧な命令形「～なさい」の使用や、連用接続の使用が他のグループより多かったりして、やさしいものとそうでないものが混在している。

(付記1) 本論文の作成にあたり、工学部事務局、図書館工学部分室の方々の協力を得ました。また、本調査にご協力くださった学内関係者の方々にも深く感謝いたします。

(付記2) なお、この研究は平成7年度8年度文部省科学研究基盤研究(C) (研究代表者、八重澤美知子、課題番号07610117) の研究費の一部を用いて行われました。

注1: 初級日本語教科書8種とは、『新日本語の基礎I, II』『文化初級I, II』『Situational Functional Japanese』『Total Japanese』『初級日本語』『A Course in Modern Japanese』『An Introduction to Modern Japanese』『日本語初歩』を指す。

注2: 「～したまま」という表現は、8種中5種の初級テキストで扱っていない。扱っている場合でもすべて、「～ておく」の学習後である。また縮約形「～とく (=ておく)」も、8種類のテキスト中、2種のテキストが扱っているだけである。

[参考文献]

- 志村 明彦 (1989) 「日本語のForeigner Talkと日本語教育」『日本語教育』68号、pp.204-215
- スクータリデス・アリーナ (1981) 「日本語におけるフォーリナー・トーク」『日本語教育』45号、pp.53-62
- スクータリデス・アリーナ (1988) 「日本人が外国人と話す時」、『国文学と鑑賞』一月号、pp.118-125
- ダニエル・ロング (1992) 「対外国人言語行動の実態」、『日本語研究センター報告』1. 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター、pp.57-69
- 一二三 朋子 (1995) 「母国語話者と非母国語話者との会話における母国語話者の意識的配慮の検討」、『教育心理学研究』、第43巻3号、pp.277-286

< 6 > どの話し方が初級レベルの外国人にとって一番易しいと思いますか、記号で選んで下さい。

- 1) a. 食事します
b. 食事をとります
c. ご飯を食べます
- 2) a. 毎日学校へ行きます
b. 毎日通学します
c. 毎日学校へ通っています。
- 3) a. それについて、どんなふうに考えますか
b. それについて、どう考えますか
c. それについて、どういった考えを持っていますか
- 4) a. 「きのうどこへ行った？」
b. 「きのうどこへ行きましたか」
c. 「きのうどこへ行ったんですか」
- 5) a. お兄さん
b. 兄
c. 兄さん
- 6) a. 田中さんは明日休むって。
b. 田中さんは明日休むそうだ（田中さんは明日休むそうよ）。
c. 田中さんは明日休むんですって。
- 7) a. どこで売ってるの？
b. どこで売られているの？
c. どこで売っているの？
- 8) a. あーあ、また失敗してしまった。
b. あーあ、また失敗しちゃった。
c. あーあ、またやっちゃった。
- 9) a. ここに名前を書きなさい。
b. ここに名前を書いてください。
c. ここに名前をお書きください。
- 10) a. その問題について、反対意見がたくさんでた。
b. その問題に関して、反対意見がどんどんでた。
c. その問題を巡って、反対意見が続出した。
- 11) a. 日曜日、どういふふうに過ごしていますか。
b. 日曜日、どんな過ごし方をしていますか。
c. 日曜日、何をしていますか。
- 12) a. 部屋の中にベッドとか机なんかがあるよ。
b. 部屋の中にベッドや机などがあるよ。
c. 部屋の中にベッドとか机とかがあるよ。
- 13) a. 東京へ行ったら、その鞆を買ってきてください。
b. 東京へ行ったら、その鞆を買ってきてください。
c. 東京へ行かれましてら、その鞆を買ってきてください。
- 14) a. これは、いいね。
b. これは、いいですね。
c. これなんか、いいね。
- 15) a. 雨がザーザー降っているね。
b. たくさん降ってるね、雨が。
c. 雨がたくさん降っているね。
- 16) a. それは、どこで買った時計ですか。
b. その時計は、どこで買ったんですか。
c. どこでその時計を買いましたか。
- 17) a. あなたの国ではどんな言葉を使っていますか。
b. あなたの国では何語を使っていますか。
c. あなたの国ではどういった言葉を使っていますか。
- 18) a. みじん切りにした野菜。
b. 小さく切った野菜。
c. 細かくした野菜。
- 19) a. あ、そのかばん、そこにおいといてください。
b. あ、そのかばん、そこにおいたままにしてください。
c. あ、そのかばんは、そこにおいておいてください。
- 20) a. 規則によって定められている関係上、この貸出はできません。
b. 規則で決まっていますから、この貸出はできません。
c. 決められた規則に従って、この貸出はできません。

ご協力、どうもありがとうございました。

(資料)

日本語が少ししかわからない外国人に使用する日本語について

<0> あなたの性別は? 1. 男性 2. 女性

<1> これまで外国人と日本語で話したことがありますか。 1. ある 2. ない

<2> 「1. ある」と答えた人に質問します。
どこで話しましたか

1. アルバイト先で 2. 学校で 3. 町の中で (路上を含む) 4. 乗り物の中で
5. 留学先で (国名: _____、期間 _____ か月)
6. ホストファミリーで (期間: _____ か月) 7. その他 (_____)

いつ話しましたか

1. 最近 2. 半年程前 3. 一年程前 4. 2年程前 5. 2年以上前

その人の日本語の理解力はどのくらいでしたか

1. よくできる 2. 少しできる 3. あまりできない 4. 全然できない

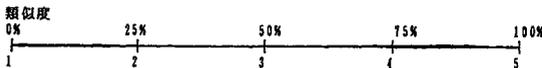
どんな話題でしたか

1. 道を聞かれた 2. 物の購入 (値段、注文など) 3. 互いの家族について
4. アルバイトのことについて 5. 職業について 6. その他 (_____)
7. 挨拶 8. その他 (_____)

そのときのあなたの話し方は、日本人に対して話す時と同じでしたか

1. 同じ 2. 大体同じ 3. 少し違う 4. 全然違う

<3> あなたは、非常に易しい日常会話だったらできるが、込み入った内容になると理解できない外国人 (日本語を勉強しはじめて半年ぐらいのレベルで、知っている言葉の数はだいたい1500語程度の人) と日本語で話すことになりました。さて、外国人と話す時の日本語と、日本人と話す時の日本語の類似度の割合をチェックしてください。(数字の1~5から選択)



<4> 実際に上記日本語レベルの外国人と話すする場面に遭遇しました。その人にわかるように伝えたいとき、あなたはどのように話しますか。
目の前にその人がいると仮定して、話しかけるように書いてください。

<5> どんな日本語が上記の外国人にとってやさしくわかり易いと思いますか。それぞれの項目に関して、該当するものに○をつけてください。
*日本人に話す時と比べてください。

A: 速さは

1. かなりゆっくり話す。
2. ややゆっくり話す。
3. 変わらない。

B: 語句の切れ目 (ポーズ) の時間と回数

1. 各回のポーズの時間を長くし、また、回数も多くする。
2. 各回のポーズの時間は長くするが、回数は変わらない。
3. ポーズの回数は多くするが、各回のポーズの長さは変わらない。
4. ポーズの回数も各回の時間も変わらない。

C: 声の大きさ

1. 大きくする
2. 小さくする
3. 変わらない

D: 声の明瞭さ

1. はっきり話す
2. 変わらない

E: 方言の使用の有無

1. 方言を使わない。
2. 方言を交えて日常とかわりなく話す
3. 日常から方言を話していない。
4. その他 (_____)

F: 文体

1. 「どこへ行きますか」のように「です」「ます」を使う
2. 改まったお客に話すようにもっと丁寧な言葉で話す。
3. 「どこへ行く?」のように普通に話す

G: 外国語 (英語等) の使用の有無

1. 難しそうな語句、分りにくい箇所のみ外国語に置して話す
2. 外国語は使わない
3. その他 (_____)

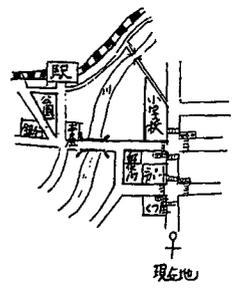
H: 文の長さ

1. 一文をたいへん短くする。
2. 一文を少し短くする。
3. 一文を長くする。
4. 変わらない。

I: 助詞

1. 「どこへ、いきますか」ではなく、「どこ いきますか?」のように助詞を省略して話す。
2. 助詞を強調して、話す。
3. 変わらない。

1) 駅に行く道を聞かれて、教える。(下の地図参照)



2) 「日曜日、通常の郵便局は窓口業務を行っていないが、特定の主要郵便局に限って午前中、速達郵便のみを受け付けている」ことを、教える。

3) その人に来日の目的と滞在期間、職業を尋ねる。

J: 「あなたは、どこから来ましたか」のように、目の前にいる相手に対して主題「あなた」「わたし」を多く使うかどうか。

1. 使う
2. 使わない。

K: 敬語の使用

1. 多くする。
2. 少なくする。
3. 変わらない

L: 身ぶり手振りの使用

1. 多くする。
2. 少なくする。
3. 変わらない。

M: キーワードや大切だと思ふ語がでてきたとき

1. その語を繰り返す
2. 変わらない。

N: 「わかる?」「これ、していますか」のような理解の確認を

1. 多くする
2. 少なくする
3. 変わらない。

O: 相手の外国人の言っていることがわからないとき

1. 「もう一度」「え?」「何?」などといって、発言を繰り返してもらう。
2. 聞き返すと失礼なのでそのまま会話を続ける。
3. そこで会話を終了させる。
4. その他 (_____)

P: 相手の外国人が間違った表現や言葉を使ったとき

1. 訂正する。
2. 訂正しない。

Q: 相手の目を

1. よくみて話す。
2. 少し見ながら話す。
3. あまり見ないで話す。
4. 全然見ないで話す。

R: その他

日本人の言語意識の比較

——日本語母語話者に対する発話と非母語話者に対する発話——

島 弘子

I. 目 的

本稿は、日本語母語話者が、日本語母語話者と非日本語母語話者に対し、同一の内容を説明あるいは質問する際に使用する言語意識を比較調査するものである。「非母語話者とその言語を母国語と同じように使う能力を持たない、（あるいはほとんどその能力を持たない）外国人を聞き手として話す時に用いる言語目録」（ファーガソン：1979）としてすでにフォーリナー・トークが研究され、その「簡略化」の規則について報告されている段階だが、それは、母語話者と非母語話者に対する相違点が焦点となっている。しかし、その相違を論じる際には、日本人による判断「この発話は、日本人に対して使いますか」といった確認が必要となる（スクータリデス：1981 p.56）。また、一方では母語話者が、非母語話者の理解能力を越えていると思われる語彙・表現を、フォーリナー・トークにせず母語話者に対してと同様に使用している場合もある。

そこで、ここでは一般に定義されているフォーリナー・トークよりは広い観点から、母語話者と非母語話者の発話意識を調査し、相違点のみならず、そこにあらわれた共通点も分析してみることにする。

II. 方 法

調査は、アンケートにより実施した。国立大学学生、大学院生、私立女子短大学生、専門学校学生158名を対象に、1996年9月から12月にかけて行われた。人数、性別は（表1）の通りである。男女別数、学校機関別の男女比に差がある。

調査内容は、日本語が少ししかわからない外国人（初級日本語レベル）に対しおこなう道案

表1 アンケート対象者の内訳

	専門学校	短大	大学院生	学部生	チューター	合計
男性	0	0	27	19	10	56
女性	48	46	2	0	5	101
未記入	1	0	0	0	0	1
合計	49	46	29	1	15	158

内<タスク1>と名前、滞在期間、職業をきく質問<タスク2>の2種類用意した。(資料)
 <タスク1>からは、使用言語、文体、文の構造(複文)、使用された外国語、語彙の特徴を、<タスク2>からは、使用言語、敬語の使用、2人称「あなた」の使用、「～んです」体の使用、断り・前置き表現、その他の特徴的傾向を調べる。

III. 結 果

1. <タスク1>より

1) 使用言語の選択意識

158名中30名が外国語(英語)を文または語彙レベルで選択した。グループ別では専門学校学生の使用率が高く49人中16人、反対に大学院生の使用率が低く、29人中2人だった。

2) 外国語の使用意識

ここで使用された外国語は、道案内の目印の建物など(school, bookstore, bridge, station)、動作を示す動詞(go, turn)、副詞(right, left, straight)、確認の言葉(OK?)、順番(second)などに限定されていた。

また、使用された外国語をみると、日本人にとってやさしい単語を英語に置き換えて、そのほかの部分日本語のまま発話している傾向がある。

(例1)

真っ直ぐ行って、2つめの角をレフトに曲がって、ブリッジを渡って、ライトに曲がるとステーションです。(専門学校学生)

3) 文体の選択意識

丁寧体と普通体の選択意識に関しては、母語話者に対してより、非母語話者に対して普通体の使用率が高くなる。(表2)

文体の使用について

		専門学校	短大	大学院	学部生	チューター	合計
対日本人	丁寧体	42	42	28	12	12	136
	普通体	4	6	1	6	1	18
対外国人	丁寧体	33	38	24	12	11	118
	普通体	10	10	4	6	2	32

4) 文数の意識

道案内の説明文における発話数は、非母語話者に対する平均が、学生全体で2.53文、母語話者に対する平均は1.72文となっている。非母語話者に対する場合、文の数を増やし、1文での情報量をおさえ、簡略化を計っているといえる。(図1)

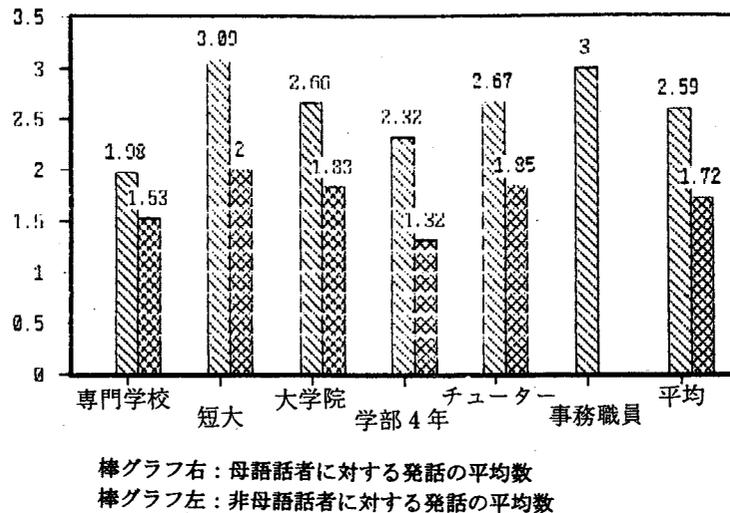


図1 平均発話数の比較

5) 文の構造

複文には、副詞節と名詞節があるが、副詞節の使用は非母語話者、母語話者ともにほとんど変わりなく、それぞれ127例、138例であった。名詞節のほうは、副詞節より使用率が低く、各40例、37例であった。名詞節に関しては、グループ間の差異が見られる。専門学校、短大学生は、母語話者より非母語話者の方が用例数が多い。院生、学部生では、非母語話者より母語話者のほうが多い。これは、外国人との接触の程度が影響していると思われる。

6) 語彙の選択意識

選択された語彙は、以下のように大きく3分類できた。

- a. 母語話者・非母語話者に共通して使用し、用例数がほぼ同程度（差異20%前後の範囲で）の語彙例とその延べ語数（非母語話者対象の用例数：母語話者対象の用例数）

曲がる (254:261)、まっすぐ (240:235) わたる (100:119)、つく (34:34)、みえる (48:52)、ある (147:142)、越える (10:11)、信号 (68:54)、交差点 (65:87)、角 (49:63)

- b. 母語話者に多く使用し、非母語話者には少ない使用の語彙例と延べ語数
つきあたる (9:26)、手前 (3:10)、～ながら (1:7)、右折・左折する (1:28)
- c. 非母語話者に多く使用し、母語話者には少ない使用の語彙例と延べ語数
歩く (60:19)、進む (44:25)

a. の「曲がる」「まっすぐ」「ある」といった語彙は、他にやさしい言いかえのきかない、そして、道案内の際には不可欠な基本的語彙のため、母語話者に対してと同程度の非母語話者への使用があったと考えられる。それに対して、b. の「突き当たる」「右折する」「～ながら」等は、言わずに済ますことが出来たり、他のやさしい言いかえが可能であったりする。c. の「歩く」「進む」の類の語彙に関して、母語話者・非母語話者に対する同一話者の発話を個々にみていくと、非母語話者に対する「歩く」が、母語話者に対しては「行く」に置き換わる場合と、場合によっては「(ゼロ)」になって行く場合がある。従って、延べ語数に差異がでる結果となっている。「歩く」といった方がよりわかりやすくなると判断する人がいたからだろう。次の同一話者(専門学校学生)の発話例は、上で挙げた説明で解釈がつく。

(例2) 非母語話者に対して

まっすぐに歩いて小学校を左に曲がって橋をわたり、本屋の角を右に曲がってまっすぐいったところ。

(例3) 母語話者に対して

小学校の見える角を左へ行き、橋をわたって本屋の角を右に曲がって突き当たりが駅です。

2. <タスク2>より

1) 使用言語の選択意識

158人中、15名が外国語(英語)を文レベルまたは語、語句レベルで使用した。これは、「道案内」の時の半数である。道案内の使用語彙・表現に比べ、質問内容がやさしいため、英語に置き換える必要がないと判断したと考えられる。

2) 敬語の使用

敬語の使用は、(表3)のとおり、非母語話者・母語話者ともに使用する人11名、非母語話者にのみ使用する人9名、母語話者に対してのみ使用する人63名、母語話者・非母語話者ともに使用しない人63名、未記入その他9名となっている。使用された敬語の種類では、「丁寧語を使用する」、「尊敬語を使用する」、「丁寧語も尊敬語も使用する」の3つに分かれる。非母語話者に使用する敬語は9例中8例が丁寧語「(例、お名前)」「ご職業」等)であり、母語話者に使用する敬語は、尊敬語(「いらっしゃる」「こられる」「おられる」等)が33名と一番多く、丁寧語は12名と少ない。これは、グループ間の差異より、男女間の差異の方が大きい結果を示している。(図2)(図3)からわかるように、男性は母語話者にのみ使用が37.5%と高く、女性は21.1%と低い。また、母語話者には使用しないが、非母語話者には使用するという女性が10.5%いる。

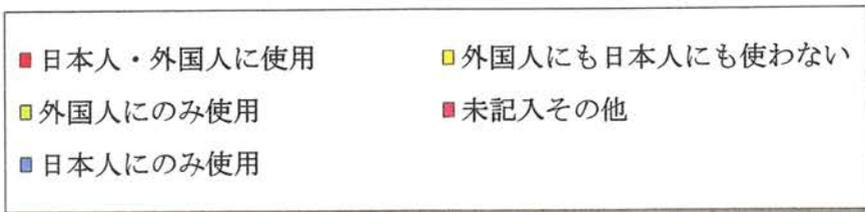
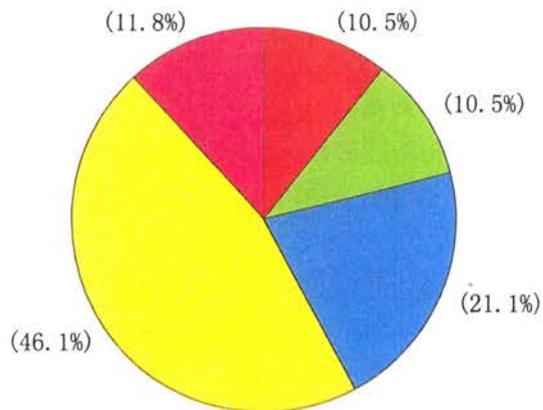
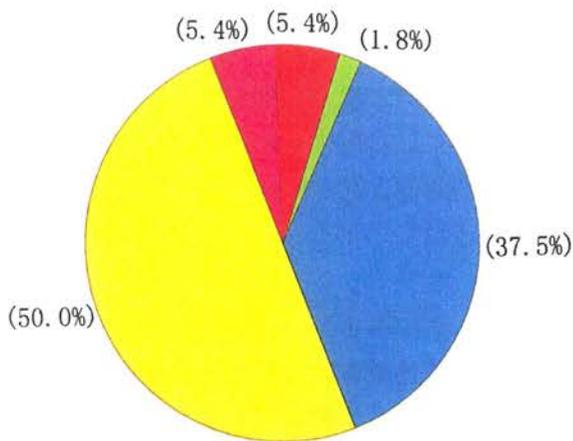


図 2

男性の敬語使用の対象

図 3

女性の敬語使用の対象

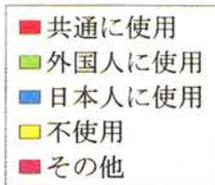
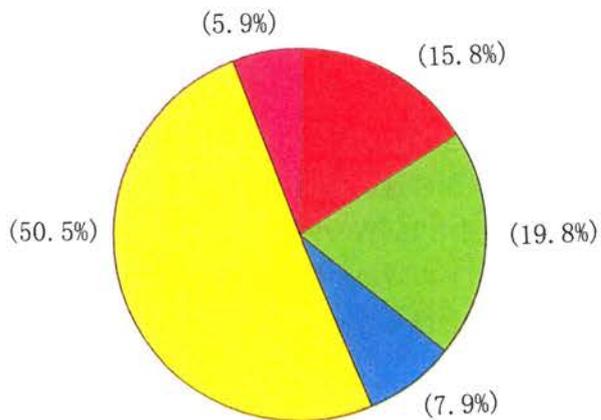
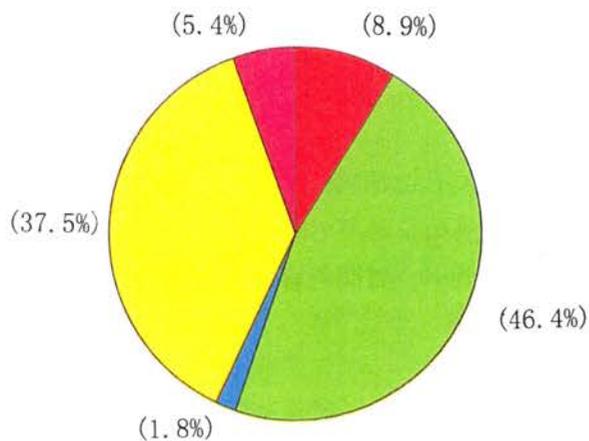


図 4

男性の二人称の使用

図 5

女性の二人称の使用

表 3

敬語の使用		男	女	不明	合計
日本人・外国人に使用	尊敬語	3	1	0	4
	丁寧語	0	0	0	0
	尊敬・丁寧語	0	7	0	7
	合計	3	8	0	11
外国人にのみ使用	尊敬語	0	0	0	0
	丁寧語	1	8	0	9
	尊敬・丁寧語	0	0	0	0
	合計	1	8	0	9
日本人にのみ使用	尊敬語	16	16	1	33
	丁寧語	0	12	0	12
	尊敬・丁寧語	5	13	0	18
	合計	21	41	1	63
外国人にも日本人にも使わない	計	28	35	0	63
未記入その他	計	3	9	0	12
総計		56	101	1	158

3) 2人称「あなた」の使用意識

目の前の聞き手に対して、2人称の「あなた」を使用するかどうか、に関しては、「母語話者には9名しか使用しないが、非母語話者には47名が使用する」という結果をえた。「母語話者・非母語話者ともに使用する」は21名なので、非母語話者に対しては積極的に「2人称」を使おうとする意識が強い。グループ間の使用率の差異はなく、むしろ男女差がみられた。すなわち、男性の方が、母語話者には使用せず、非母語話者には多く使用する。女性は、ともに使用しない人が過半数を占める(図4)(図5)。

4) 「～んです」体の使用意識

「どこからきたんですか」のような「～んです」体に関しては、ほとんどの学生がこの表現を用いて質問しており、男女の差異もみられない。ただ、グループ間でやや異なる傾向がある。非母語話者に対して「～んです」を使用しない人の割合が、チューターで一番高く、15人中6名いるが、専門学校学生では49人中5人と少ない。なお、このグループの母語話者に対する使用は各15人中2人、49人中1人であった。

5) 断り・前置き表現の使用意識

母語話者に対する、断り、前置き表現の使用が4名(男2、女2)いた。

「もし、よろしければ」「失礼ですが」「・・を尋ねてもよろしいですか」などである。これは、非母語話者に対してはみられない表現である。非母語話者に対するポライトネスの配慮の必要性が薄いからと思われる。

6) その他

a. 省略

「お名前は」「ご職業は」といった述部の省略が、母語話者に対してみられるが、非母語話者には完全な文でそれぞれ「名前はなんですか」「お仕事は何ですか」と用いられる傾向がある。

b. 方言

一人だけだが、非母語話者には標準語で質問し、母語話者には、関西弁の方言を用いる人がいた。

(例4)

何しに帰ってきてはるんですか。どれくらいこっちにいやはるんですか。仕事は何してはるんですか。(学部学生)

IV. まとめ

発話者の使用言語に関する意識的な選択からはじまって、語彙・表現の無意識的な選択まで、日本語母語話者に対する発話と非母語話者に対する発話の各種レベルの共通点、相違点を順にみてきた。

これらから、以下のことが考えられる。母語話者と非母語話者の意識上の発話を比較・分析することによりあらわれた特徴は、

- 1) 日本語母語対象、非母語対象者にはほぼ共通しているもの
 - 2) 日本語母語話者に多く見られ、非母語話者にはあまり見られないもの
 - 3) 日本語母語話者にはあまり見られないが、非母語話者には多く見られるもの
- の3つに大きく分類できる。

1)には、「発話者が、相手にとって難しいと認識していないことから、共通するもの」と、「他に、よりやさしい言いかえがないため、そのまま使用しているもの」とがあるのではないだろうか。例えば、名詞節の使用、アスペクトの「～てくる(時間的なアスペクト)」、連用接続、「～んです」体、などは、難しいと認識していないゆえに、非母語話者に対する使用率が高かったのだろう。しかし、更に詳しくみていくと、外国人との接触経験の有無との関係から接触の多いグループ(大学院生やチューター)は、名詞節の使用率や「～んです」の使用率が低いことがわかる。また、これらは、その表現形式の代わりに、他のよりやさしい形(例えば、「～てくる」を使わない基本動詞のままのものや、「～んです」でなく「～ます」の形式など)にいいかえることが可能である。反対に、「曲がる」「まっすぐ」「行く」などの基本語彙は他のよりやさしい語彙への言いかえが難しい。その結果母語話者に対するのとはほぼ同様の使用率をしめすことになる。

2)は、方言の使用、敬語、断り、前置き表現などで、これらの使用を避けることによって、発話が簡略化し、非母語話者にやさしくわかりやすくなる。

3)は、ジェスチャー・確認・二人称の使用、外国語の使用等で、これらの使用によって、非母語話者の理解がより容易になる。

ここで注目したいことは、1)についてである。差異のある2)、3)はこれまでフォーリナー・トークして定義され研究が進んできているが、1)はあまり問題にされてきていない。しかし、1)の語彙・表現の中には、日本語母語話者が、初級レベルの非母語話者と接する際に、「なぜフォーリナー・トークにしようとならないのか」を認識しないままに使用しているため、コミュニケーション・ギャップを生じさせている可能性があると思われる。ここでふれた名詞節の使用や「～んです」体、アスペクトなどの他に、どういった語彙や表現がありうるのか、さらに調査の必要がある。

[参 考 文 献]

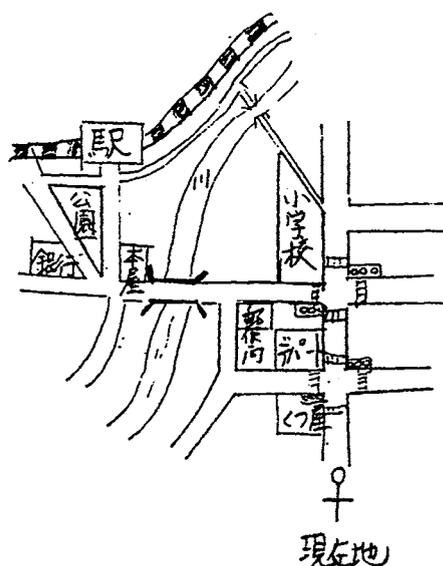
- 志村 明彦 (1989) 「日本語のForeigner Talkと日本語教育」『日本語教育』68号、pp.204-215
- スクータリデス・アリーナ (1981) 「日本語におけるフォーリナー・トーク」『日本語教育』45号、pp.53-62
- スクータリデス・アリーナ (1988) 「日本人が外国人と話す時」、『国文学と鑑賞』一月号、pp.118-125
- ダニエル・ロング (1992) 「対外国人言語行動の実態」、『日本語研究センター報告』1. 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター、p64
- 一二三 朋子 (1995) 「母国語話者と非母国語話者との会話における母国語話者の意識的配慮の検討」、『教育心理学研究』、第43巻第3号、pp.277-286
- Brown, P. and S. Levinson (1987) "Politeness. Some Universals in Languages Use." Cambridge University Press.

(資料)

非常に易しい日常会話だったらできるが、込み入った内容になると理解できない日本語初級レベルの外国の人と話す場面に遭遇しました。その人にわかるように伝えたいとき、あなたはどのように話しますか。
目の前にその人がいると仮定して、話しかけるように書いてください。

<タスク1>

駅に行く道を聞かれて、教える。(下の地図参照)



<タスク2>

その人に来日の目的と滞在期間、職業を尋ねる。

異文化接触場面で生ずる問題

櫻田千采

I はじめに

留学生が日本で快適な学校生活を過ごすために、受け入れ側の日本人はどのような点に注意して接したらよいか、それを探る基礎資料として、留学生に面接しインタビューを行った、その記録である。

II 調査の概要

帰国前の留学生を中心に、1996年6月から1996年9月までの4か月間、11名に個別聞き取り調査を行った。留学生の滞在期間は3ヶ月から5年くらいである。

〈調査内容及び方法〉

「日本滞在中に日本人から受けた不愉快な体験、日本人の行動で不愉快だと思ったり、感じたりした経験の有無」を中心に、異文化体験を自由に日本語で話させた。事前に面接の目的を話し、了解を取った。日本語力の充分ではない学生もいたが、日本語で長時間話すことに意欲を持って積極的に話してくれた。(テープレコーダーで記録)

面接時間は30分～1時間半、場所は被面接者が留学生として過ごした大学構内である。

対象者は1名ずつ面接したが、〈case7/8〉のみ2名同席同時に行った。また、〈case10〉では、友人1名が同席したが、インタビューには加わらなかった。

各事例毎に日本語力によって記述の詳しさの程度にばらつきが出たが、日本人に対する質問用紙作成のための基礎資料ということからあまり問題にできなかった。

ここでは不愉快な体験のみならず、自国あるいは本人と比較対照されている事例についても、日本人との対比上興味深いのでとりあげた。

この調査の面接者が非常勤である点で学生は自由に話してくれたと思われるが、一方日本語教師であり対象者が教えを受けたことがあるからか、学校関係者に対する不満は殆ど聞けなかった。そういう点では、もう一度むけばそこにまだ本心が隠れているかもしれない。また中国人学生に対しては、面接者の4年に及ぶ中国滞在の体験から、どれだけ本当のことを話してくれるか自信がなかったので面接を行わなかった。しかし、滞日年数の長い学生は現在直接師弟関係がないのでかなり本音で話したと思われる。

III 結果

話題の内容は大きく学校関係と日本人全般とに分けられる。

学校関係では、事務的な制度その他に関するものが少々であとはほとんど日本人学生に関するものである。教師に関するものはほとんど見られなかった。

日本人または日本については、様々な事例が報告された。

結果については詳しくは基礎資料を参照されたい。

1. 学校関係

〈日本人学生に対するもの〉

友達ができない、或は日本人学生が留学生に無関心 (〈case 1〉 [以下省略してc 1] ②/c 2
②/c 6②/c 9⑤)

話題が幼稚あるいは、外国のことを知らない (c 7①③/c 9⑤/c 11⑥)

教師には唯々諾々と従う (c 8①) など。

日本人学生とうまく交流ができないいらいだちを訴えたものが多かった。

〈その他〉

入館基準の問題、日本人ももっと入居させるべきだといった国際交流会館に関するもの (c 2
③/c 4⑦)

2. 〈日本人全般〉

パーティーなどで西洋人とばかり話しアジア人とは話さないなど差別的言動を感じたというもの (c 1①⑤/c 6①③/c 10②)

テレビ番組や町のバーでの話題から、日本人のモラルの低下を感じたというもの (c 5⑦/c 6
①/c 11④)

役所が官僚的で、国民がそれに慣れてしまって文句を言わない (c 4②/c 9③)

日本人は曖昧な言い方がよいとするがそれは責任のがれではないのか、などの習性や考え方に関する批判 (c 4①⑥/c 5③/c 6②⑦/c 10③④⑤/c 11②⑤⑦⑧) 特に銭湯に一緒に入るなど入浴の習慣が違ってとまどったもの (c 3③/c 11①) 宗教に無関心だと感じたもの (c 3②/c 10①)

一年程度の滞在期間を終えて帰国寸前の学生は、来日直後自分が直面したカルチャーショックを振り返り、自分の方に問題があったなどと冷静に客観的に事態を見ることができるようになっている。また長期間滞在した学生は、不愉快な経験といってもなかなか出て来ず何回も「もう忘れた」を繰り返し、やっと振り絞るようにして思い出すのである。このことから、来日直後を乗り切ることが後の留学生生活を快適に過ごすためには一つのポイントだということがわかる。

また、異文化の中で生活して行く上でのストラテジーを身につけている学生は日本での生活を快適に送っているが、苦しいことは耐えなければならない、とか自分のことは自分で解決すべきだなどと考える学生は、ますます自分を困難な状況に陥れてしまっている。このような場合はまわりでサポートする必要がある。

留学生面接資料

〈case1〉ヨーロッパ系

[話者プロフィール] 男／大学生／文学部／今回は一年の短期滞在だが、すでに数回いずれも一年未満の滞在経験あり。今回は吉村昭著『ポーツマスの旗』についてのレポートを書く。

- ① 日本人の異性と旅行していたときに、彼女をフィリピン人、私をアメリカ人だと勘違いされ「あの人たちはエイズにちがいない」と言われた。あとで彼女は日本人で、私も日本語を理解するとわかって驚いていた。外国人と一緒にいれば日本人ではないとか外国人ならエイズだろうなどと考える人がいて、そんな差別的な扱いを受けたことに驚いた。
- ② 私の方から研究室に行き、語学の難しそうなところは説明したりしてなんとか友達をつくらうと努力した。こちらからいくら「電話をかけてください」とか「遊びに来てください」と誘っても「うん、うん」というだけで積極的な反応はなかった。結局来てくれなかったし連絡もなかった。もしかしたら恥ずかしかったのかもしれない。その場ではたしかに楽しかったが、そこから踏み込んで喫茶店に行ったりとかそういうことがなかった。わたしも最後にはつまらなくなって行かなくなった。
- ③ 日本人の学生にとっては、専門の勉強よりもそこで勉強して卒業証書を貰い就職することの方が大事なのだ。つまり何を勉強するかではなくどの大学へ行くかを問題にしている。そこはわたしたちとは全然違う。わたしたちは何を勉強するかを問題にしている。だから自分の勉強している文学を生みだした国の人についてもあまり興味がないのだと思う。
- ④ 私の大学でも日本からの留学生が増えてきたが、私達はその留学生のいる部屋にこちらから行く。留学生は日本語を話してくれ私たちは母語を話して、とても楽しい交流ができた。ここではなんかちがうと思う。
- ⑤ 日本は島国で本当の意味の国際化が行われていない。外国人に慣れていないのでどう扱ったらいいのかわからないのだろう。外国に行った経験のある人でもそんな人がいる。しかし仲よくなった人もいる。その人はもう卒業してしまったが。

〈case2〉北米系

[話者プロフィール] 男／大学卒業直後／教育学部工学系／来日1年弱／日本語がかなり不自由であったが、それも試練として耐えるのが男だと思っているように見えた。剣道部に入り、足の皮がむけるほどけいこに熱中する。

- ① 来たばかりの時、時間割りのことや留学生の生活について指導教官は何も教えてくれなかったので私は自分で調べたが、言葉が不自由だったのでとても大変でいらした。

- ② 指導教官は日本人学生に私の面倒を見るようにいったが、かれは何もしてくれなかった。だから私は市役所の手続きも全部自分でやった。自分でやることはとても大切なことだが大変だった。この学生は私のことに関心がなかったらしく、そのあとバスの中で一回会っただけ。「はーい、元気」「元気」「じゃあね」2分間だけ。
- ③ 私は正月過ぎ、それまでホームステイしていたお宅を出なければならなかったのに、12月始めに国際交流会館の申し込みをしたが、一杯だという理由で断られてしまった。住む所がない。勿論中央公園にも住めないことはないがそれはちょっと大変だ。このような緊急事態であるのに会館の入居を断られた。私は友だちの部屋に居候をしたり研究室のカウチで寝たりした。友だちの部屋では、床の上に寝たので毎日2時間しか眠れずそれで日本語の勉強もあまりできなかった。宿題をするのもとても大変だったし、剣道もあまりできなかったので強くなれなかった。何もできなかった。いつも寒かった。いつも疲れていた。いつもおながすいていた。毎日がまん、がまん、がまんだった。勿論努力さえすればなんでもできるけれどちょっと大変だった。私の生活は私の問題だが、留学生課としても助けてほしかった。
- 3月から会館に入居できたが、わたしの入った部屋は去年の8月から空いていた、という。なぜ私をもっと前に入れなかったのか、その理由が分からない。
- ④ 私の問題は、問題があったときにだれに相談したらいいかわからないということだ。私をはじめ指導教官に会ったときは5分だけで、他の学生を紹介してくれたがその学生は私にどんな援助が必要か全然わからなかったので全く助けてくれなかった。私は本当に驚いた。

〈case3〉アジア系

[話者プロフィール] 男／大学院生／工学部／滞日5年／日本語も不自由なく、留学中に同国人と結婚、生活上でも不自由はない。話の様子から外国生活のストラテジーをすでに身につけているようだった。

- ① 日本に来て何か困ったことがないかと言われたが、外国にいるのだから前以てこんな問題があるだろうと予測しているので、本当にその場になってそのような事態になっても困らない。
- ② 私たちは宗教上の戒律によって食べられないものがある。日本人の家に行ってそのような食べ物を出された時、宗教上の理由で食べられないと断っても「少しだから大丈夫でしょう」とか「ちょっと食べてごらんさい」などと無理にすすめられることがあってとても困る。
- ③ ホームステイをしたとき、温泉につれて行かれて一緒に入ろうと誘われたが、私の国ではほかの人と一緒にお風呂に入る習慣がないので恥ずかしかった。今はもう慣れたが。

〈case4〉ヨーロッパ系

[話者のプロフィール] 男／大学生／経済学部／滞日約7か月／幼児期より家庭環境によって、

異文化に接する機会が多かったようである。

- ① 日本人は働き蜂だと聞いて来たが、来たばかりの時は日本人の学生を見てイギリス人の学生に比べるとあまり勉強しないのでそうは思わなかった。しかし一人の日本人と知り合い彼が会社で朝の9時から夜の12時まで働くと言った時、やはり日本人は働き蜂だと思ふようになった。

しかしよく聞いてみると、一生懸命働くのは9時からお昼までであとはあまり働かないらしい。一見働き蜂ではあるけれど本当はあまり働かないようだ。これはイギリスとは全然違う。

- ② 私が困って「手伝ってください」と頼んだ時は日本人は親切だ。今日私が道を聞いた女の人は怖かったのか、「すみません。うつのみやはどこですか」といったら逃げて行ってしまったけれど。

しかしこんど私が日本に来る時、保証人が必要だといわれて困った。日本人の友人も一生懸命世話をしてくれたが彼は学生だから保証人にはなれず、やっと金沢大学で先生に保証人になってもらって日本に来ることができたが、来るのがとても遅れてしまった。日本はそういうところはとても官僚的だ。

大使館の人はいつも同じ問題で忙しいので、あまり親切ではなかった。

私ははじめロンドンの大使館で文部省の留学生試験を受け99%合格だと言われたが、結果は文部省に拒否された。それからもう一度留学の準備をして今度は行けることになったのだが、そこで始めて保証人が必要だということが分かったのだ。それまでそんなことは全然知らなかった。

- ③ 日本に来てからの問題は、気候が寒かったりして私は少しいやになったが、それは日本の問題ではなく私の問題である。

- ④ 辰口の農家で、草刈りの作業をしているとき日本人の足を草刈り機の回転刃で傷つけてしまった。その時その人は8針縫った。私が草を刈っている時、その人は私に聞くことがあって後ろから私の肩をたたいた。私は肩をたたかれて急に振り向いた。持っている草刈り機も同じように動かしたので、回転刃でその人の足を傷つけてしまったのだ。私はもちろん悪いが、その人も経験があるのだから前方から私に話しかけるべきだった。その人はすぐ病院につれていかれた。私は何回も「ごめんなさい。ごめんなさい」と言ったし、帰ってからも話し合った。「ごめんなさい。私はまちがっていた。足はどうですか」と私は言い、彼は「大丈夫、大丈夫、心配しないで」と言った。私たちの間には問題がないことをはっきりさせた。

- ⑤ 私達の寮には日本人の学生は一人しかいないし、金沢大学の学生とはあまり接触がないからこのままではよくないと思う。

- ⑥ 日本人に何か頼んでも忙しいからしてくれない。私たちは失礼な人だと思うが、実は失礼

なのではなく忙しいのだ。気持ちはあるけれど時間がないのだということがわかった。

私はこういう生活は嫌いだ。このように働かなければならないのなら日本の会社で働きたくない。

日本企業で働く外国人はやはり残業して一生懸命働くが、彼らは給料も沢山貰っている。2年ぐらい働いてお金を沢山貰ったらその後で国に帰るだろう。一生日本で働くという人は一人しか知らない。その人は日本人の奥さんと一緒に、洋服を輸入して日本で売る仕事をしている。この人は奥さんと一緒に本当によく働く。

- ⑦ 国際交流会館の生活はとてもいい。家賃は安いいろいろな人に会う機会もある。しかし日本語を練習するためにはだめだと思う。また普通の日本の生活を私は知らない。私が経験した日本の生活は辰口だけであとは全然知らない。見るだけ。道を歩いている日本人を見るだけ。あとで考える。だから日本にもう一度来て日本人の生活をよく見たい。
- ⑧ 私はラムが好きだけど全然ない。日本に来る前に、日本人はラムが嫌いだからラムが安いと聞いて来たが、全然みつけれなかった。
- ⑨ 私は英語やイタリア語を教える時や、国際交流会館にも一人日本人がいるし、1週間に2回体育館でバスケットボールをするので日本語を話すチャンスはあるが、それを利用するには私自身の努力が必要だ。

〈case5〉ヨーロッパ系

[話者プロフィール] 男／大学生／経済学部／滞日1年未満／日本語はやや不自由。このインタビューについて日本語だけで30分以上話したのは始めてだと感激していた。本人は初来日だが、姉が二人JETプロジェクトなどですでに日本で仕事をしている。

- ① 日本に来たばかりの頃は料理が問題だった。魚や海の物の海の匂いが嫌いだったので食べられなかった。しかしだんだん食べられるようになり好きな物も出来た。焼き肉とかご飯とか。ご飯は大好き。今では問題はない。
- ② 日本人が話す速度は少し速かったが、ほかのことは日本に来る前に聞いていたのであまり驚くことはなかった。嫌なこともない。ばかだと思えることはあるが。例えば若い人の服装があまりにスタイリッシュでおかしかった。アイルランドとあまりに違うから。しかし今ではいろいろなスタイルの人がいておもしろい。アイルランドではみんな同じジーンズとシャツだけだからつまらないと思う。私のガールフレンド(註;日本人)もすごくスタイリッシュ。そこがいい。
- ③ アイルランド人はリラックスすることが好きだけど日本人は働くことが好き。働き蜂だ。多くのガールフレンドはそういう生活は好きではないけれど、実家から通っているので朝6時に家を出て夜8時に帰ってくる。絶対に1年あとには死んでる。

- ④ 日本人は、ぼくの友達もだいたいフレンドリーだ。春休み韓国に行ったが、韓国人はとても失礼で信じられなかった。しかしそれは僕のせいではなくて、日本人の友達と一緒に行ったからそのせいだった。韓国人は日本人が嫌いだったから、ソウル駅で英語と日本語で尋ねたが答えてくれなかった。しかしそれは分からないふりをしていたのだと思う。どうしてソウル駅に英語も日本語も分かるひとがいないのか。大きな駅なのに。日本人なら英語は下手でもいつもガンバッテガンバッテがんばりますネ。“Hello nice to meet you!”
- ⑤ 初めて市役所に行くときにはアドバイザーがついてきてくれたがその後はついてこなかった。しかし問題はない。問題があったら自分の友達についていってもらし、そうすれば友達も早くできる。
- ⑥ 来たばかりの時はストレスがあったがそれは日本の生活のせいではなく、ぼくの授業のせいだ。来たばかりの時はぼくには授業が難しかったので授業の前にストレスがあった。授業のあとでは疲れてしまった。それで友達とよく片町に行って、そこで友達が沢山できた。
- ⑦ 日本の男と女の関係は平等ではない。結婚したあとで男が会社の女の人と不倫をしている、そういうことがよくおこるらしい。片町でよくサラリーマンがそんな話をしている。日本の家庭では父親が不在で、子供は模範にすべき大人の男の人が身の回りにいない。日本では電車の中の痴漢行為も沢山ある。こういう男と女の問題が多いところはアイルランドとは全然違う。私もこういうところが嫌いだ。

〈case6〉アジア系

[話者プロフィール] 女／大学生／滞日1年未満／文学部／日本語のレベルはそれほど低くないのに自信なさそうな話し方をする。消極的な印象を受けた。

- ① 若い日本人は外国人にあこがれているらしい。西洋人の留学生在が学校のバス停でバスを待っていた。そこに日本人の女性が来て食事に誘った。今まで会ったことがないのに変でしょう。その留学生は興味があったのでついて行ったそうです。
- ② 初めて日本人に会うとよく「あなたは英語が話せますか」と聞かれるが、とても嫌な気持ちをする。英語が話せなかったら友達になれないのだろうか。わたしと友達になるのは英語を勉強するためで、そのため英語ができるかどうかなんだかチェックされてるような感じだ。私が友達になるのは日本語を勉強したいという気持ちも持っているが、一番大事なことはあなたと友達になりたいということだ。
- ③ 日本人の中には、パーティーのときはほとんど西洋人としか話さないでアジア人とは話さないという人もいます。そういう人はちょっと嫌だ。
- ④ 日本人は丁寧な人が多い。特に商売をしている人は親切だ。香港の人は全然サービスはし

ない。

- ⑤ ホームステイをした家のお父さんは子供と一緒によく遊んでいた。私の家では、父は全然子供と遊ばないので珍しかった。
もう一軒のホームステイをした家では、お父さんと子供が冗談を言ったり、娘は自分が好きな男のことを話していた。私は友達とはそういう会話をするが、母とは絶対にしない。
- ⑥ 事務の人は親切にしてくれた人もいるが尻の重い人もいる。授業の届けなど明日取りにきてくださいと言われ、翌日行くと「あ、忘れた」と言うこともある。
- ⑦ 私は「です」とか「ます」とか使うのは難しい。敬語を使われると「私はそんなに大事な人ではないのに」と変な感じがする。あまり敬語を使われるとますますその人との距離が大きくなった感じがする。

〈case7〉南米系

〔話者プロフィール〕女／大学生／滞日3月／文学部／日系人で、国では日本語を話す家族と同居。兄が1年前に来日。日本語は話すのはよいが、書くのは苦手。漢字があまり読めない。

- ① 研究室の女子学生と話したが、その人たちはあまり私の国に興味がないという印象を持った。アメリカ人ならいろいろ興味を持って質問するが。
私の国のことがわからないらしく、印象が現実と随分違う。土人がいてジャングルがあつてというような。大きな都会があることも大きい国だということも分からない。日本ではアメリカとヨーロッパのことしか勉強しないからではないか。南米のことはあまり勉強しないのだろう。
- ② 町で日本人に会って簡単な漢字も読めず「こんな漢字も読めないのか」と言われることもあるけれど、そういうときはわたしは留学生だからとちゃんと説明するから嫌な思いはしたことがない。
- ③ わたしは、研究室でもあまり日本人の学生と話していない。この間初めて話したが、サッカーのことやF-1のセナ選手のことしか話さなかった。ほかのことは何も聞かれなかったから。
- ④ 日本では友だちを作るのが難しい。ブラジルなら今日初めて研究室に行ったら、明日はもうわあわあやって友だちになっている。日本人は冷たい感じがする。道を聞かれて親切に教える人はいるが、話をしてその後続けてカラオケに行きましょうと招待する人はいない。

〈case8〉南米系

〔話者プロフィール〕女／大学卒業直後／教育学部工学系／日系人。国では、1世の祖父母も

同居する家庭で暮らす。日本人の若者に比べると、動作その他がゆったりしている。

- ① 日本では、学生が先生と違う意見を言わないのが不思議だ。学生は先生のいうことにいつも「はい」「はい」「はい」だけで終わり。全然私の国と違う。私の国では、「わたしはこういうふうで、こういうふうに思う」とはっきりする。

たとえば先生に対しても、いい先生だったら尊敬されるが先生だから尊敬されるということはない。日本では先生ならどんな先生でも尊敬されると聞いて来た。来てからはまだそのことについて確かめていないが。

- ② 私の国についての日本人の印象は、わたしたちがアフリカについて考えるとき、頭の中では大きい町があるとわかっている、イメージとしてはキリンやゾウが思い浮かぶのだから同じだ。私の国の人は日本人のように働きます、大きな都会があります、と自分で言っているかなければよその国の人が私の国について知らないのは当然だ。外国でニュースを見せるときは、ほかの国の人がいかにもその国らしいと考えるものだけを取り上げるのだから。

〈case9〉ヨーロッパ系

[話者プロフィール] 男／大学院生／経済学部／2度目の来日で通算して滞日2年。日本語は話すのは不自由しない。

- ① わたしは大阪と京都にもいたことがあるが大阪の人が一番親切だった。エスカレーターに乗っているときも京都では通さないようにするつもりかどうか、立ってふさいでいる。金沢も京都と同じ。大阪では、人が歩いて行けるように左側を空けておく。
- ② 最初はアメリカ人だと見られるがドイツ人だと言うともっと親しくなるから、言った方がいい。日本人は欧米人を見るとアメリカ人だと思う。
- ③ 規則があるところでは状況を見て適用を考えるというところが見られない。規則第一主義というか官僚的というか。規則を課せられる側はそういうことをあまり感じていないようでそこが意外だと思う。
- ④ 最近びっくりしたのは東京に行ったときのこと。駅を降りたら雨が降っていた。タクシーに乗ろうと並んでいたら向こうから来たタクシーが5メートルくらい先で止まってこちらを見ていたが、わたしを認めるとそのまま行ってしまった。
理由はわからないが、雨は降っているし後ろにはほかの日本人も並んでるし嫌な思いをした。
- ⑤ わたしほどの年の学生はいないということに最近気がついてしまったが、年が離れているせいか話が合わない。また日本人は年をだいじにしているから、年上の人には遠慮した言い方になって突っ込んだ話ができない。

行くことが多い。一人ではあまり行動しない。

- ⑦ 官僚的という点ではドイツと日本は似ているけれど、日本の市役所では非常に親切にやさしく説明してもらってドイツとは全然違った。ドイツではむしろ自分は邪魔だという感じが与えられてしまう。日本はサービス社会だから店でも親切にもらえる。ドイツでは店でも無愛想なところが多い。
- ⑧ 金沢では車に乗って渋滞している大通りに出て来たらまず入れてもらえない。ほかの都市ではそういうことはないそうだが。金沢の人は普通はやさしいのに車に乗るときはちがう。横断歩道にいる歩行者を見ても止まらない。
- ⑨ ここは外国だから思うようにいかないのが当たり前だと思っているから、あまり困ることはない。よその国を変えることなんかできるわけがない。

〈case 10〉 アフリカ系

〔話者プロフィール〕 男／大学院生／工学部／滞日 4 年／日本語は話すことは全く不自由ないが、漢字力の不足を自覚しているところである。日本での生活も問題ない。

- ① 日本人とは宗教の話はしない。いくら話しても分からないから。一度美大の学生と何時間も話したことがあったが、全然分かってもらえなかった。そんな人に分からないのにどうして普通の日本人に分かるだろうか。日本人は会社のシステムを宗教にしているようだ。会社のシステムしか信じていない。社長が神様。会社がやれと言えどんなことでもする。そういう生活をしているように見える。そう思ってます。
- ② 私達の国では、外人さんを見て何か分からなかったらすぐ助ける。何も考えない。初めての土地で道に迷ったら人にたずねる。名古屋に行ったとき道がわからなくなった。私は「すみません」と道をたずねようとしたが「すみません」と言っただけでみんなすぐ逃げて行った。何回も名古屋ではそんなことがあった。金沢では一回もないけれど。
- ③ 日本人は友達の家に行くときは電話をするし、友達の家に行ったときもいつもご飯を出すとは限らない。電話で時間を約束するときも、1 時半とか食事の時間をはずしてお茶だけとか。私たちなら、友達の家に行くときはただ行くだけ。行ったらどんな時間でも必ずごはんを出される。出さなかったら「お金がないのだろうか」とか「どうしたんだろう」と後になって心配するくらいだ。ケチだなんて全然考えないよ。
- ④ (4 月に大学院に入って、夏休みに国に帰ったときのことについて) 日本人は一年以上も家族に会わなくても平気だ。勉強や仕事が忙しくないときでも、彼女には会いに行っても家族には会いに行かない。

アラブでは家族が一番大事。自分より大事だ。家族が全員集まるときに私がいなかったら、

アラブでは家族が一番大事。自分より大事だ。家族が全員集まるときに私がいなかったら、母は「ーがないね」と泣いてしまうだろう。私自身のために帰るのではなく家族のために帰るのだ。

- ⑤ 日本人は日本にだけなんでもあると思っている。「あなたの国には車がありますか」「こんなシャツありますか」「自動販売機ありますか」などとくだらないことばかり尋ねる。そして日本人は他の国のことを知らない。「あなたの国には家がありますか」と聞かれたことがある。わたしは「家、ありませんよ。家族は一人に一本ずつ木があります」と言った。そう言われたら日本人も自分で考えるだろう。

信号機の色を「青」だと言う。「どうして？グリーンなのに、なぜブルーと言うの」聞くと「学校で教わったから」という。どうして自分で考えないだろう。

〈case11〉アジア系

[話者プロフィール] 女／大学院生／工学部／滞日4年／日本語にも問題はなく社交的で、同国人日本人外国人を問わず友人も多い。研究生活も楽しんでいる模様。

- ① 日本人は外では男の人も裸になるのが平気なおじさんが多いし、女の人も夏に肌を出すのが平気な人が多いのにお風呂では隠したがるのがおかしい。私の国では隠したりしないですから。友達の話ですが、脱衣場にいたら男の人が入ってきたのに全然隠さなかったそうです。お風呂に入る時は隠すのに、男の人が入ってきたらなぜ隠さないんですか。番台に男の人が座っているのも変です。
- ② 口癖のようにいつも「ありがとう」というから、本当にありがたいと思っているのか分からない。私の国では日本人のようにすぐ言わないけれど、本当にそう思うときしか言わないから、本当にありがたいと思っているということが伝わります。
- ③ 男の人に対して「あの子かわいいから好き」とか「筋肉質だから気に入った」とか言っているとカン違いされて、気が多いと思われたり本気にされて「僕のこと好きだって？」などと真っ赤な顔をして言い寄られたりした。私の回りでは、女の子がこんなことを言うのは当たり前なのだが。
- ④ テレビ番組がすごい。子供の見ている時間に結婚している人の不倫なんかのドラマを見せているから、それが普通のことだと思っている。私の目から見るとテレビ番組はほんとうにすごい。長く居る国ではないなと思う。
- ⑤ ホームステイした時のこと、こっちが外国人だということを意識するのか、英語がやたらに入ってへんな会話になった。バーなどでも途中まで普通に日本語で話していたのにこちらが留学生だと分かると急に英語を話し出す。女の人は変わらないのにお父さんの変身ぶりが激しい。別にそんなにしてもらわなくても日本語が分かるのになと思う。

- ⑥ 日本という国にはあまりいい感情は持てない。戦争中は日本がお前たちの面倒を見てやったなどという政治家がいるから。けれど日本人個人にはあまり悪い感情は持っていない。中には研究室の学生で、「俺が総理になったら又お前の国を植民地にしてやる」という人もいるし、文化は日本から渡ったと習ったという人もいるが、私も「何を言っているの。地理的な関係からいっても逆でしょう。よく勉強しなさいよ」と言ってやります。
- ⑦ 私は言葉がきついといわれるけれど、それでは気をつけて日本人のような話し方をしたいか、というとそうなりたくない。私は日本人の「あいまい」なところが嫌いだから日本人のようにあいまいになりたくない。はっきり言わないのは、はっきり言って責任を取るのが嫌なのではないかと思う。
- ⑧ 実験ではなく、実験の装置を作るときなど韓国人なら2日ですむところを、日本人は1月ぐらいかかる。精密に細かい所までゆるがせにしない。いいこともあるけれども、そこまでしなくても実験の成果に関係ない。必要ではないところでもそこまでするかというところがある。

異文化理解・異文化間交流促進のための基礎的研究

—ハンドブックの作成に向けて—

八重澤美知子 桜田千采 島 弘子
(松下) 石川正章 太田秀樹

I. 問題と目的

1980年代後半から1990年代前半にかけて、予想を遙かに上回る外国人留学生の増加が見られた。その後、留学生数の伸びは緩やかになってはきたものの、文化的背景を異にする人々とさまざまな場面で接触する機会は確実に多くなった。

これ迄、極めて等質性の高い集団のなかで生活していた留学生を受け入れる側の人々にとって、異なる習慣、言語、思考、行動をする人々との出会いは、ある種の困惑、戸惑いや疑問、さらには改めて意識することも無かった自文化へと眼を向かわせる契機となったことは言うまでもない。多くの場合、個々人は異文化接触によって生じた問題の解決の蓄積を通して異文化理解の方略を学習して行く。しかし一方で、異文化との接触場面で、経験の蓄積が必ずしも十分とは言えず、自分の対応に確信が持てない場合や留学生の言動に引きずられる場合には、異文化交流のチャンスである接触場面を回避したり、あるいは新たな悩みや葛藤を生ずることになる。

これ迄、異文化理解・カルチャーショックの研究は当然のことながら、自国以外の国々へと移動した人々の側を中心に活発に行われ成果を上げてきた。異文化適応に関する基礎的、組織的な研究はもちろん、異文化間コミュニケーション・トレーニングや異文化間ソーシャル・スキル・トレーニングなどの方法が開発され、実践されている。しかし留学生をはじめとする異なった文化を持つ人々を受け入れる側の研究には、ようやく眼が向けられ始めたところである。異文化と接触する機会の多い受け入れ側の人々は、異文化に対してどのような態度を持ち、どのような対応をしているのか、それと共にこれ迄留学生を受け入れる個々人の中に蓄積された経験を明らかにすることにより、日本人の側の異文化の受け止め方の基礎的資料を作成することを本研究の目的とする。具体的には、

1. 外国人留学生が日本で経験した不愉快な体験やカルチャーショックの内容
 2. 上記1に対する日本人の受け止め方、態度、対処法
- を明らかにすると共に自文化の特徴について考える。

また、このような基礎的データに基づき、留学生と多く関わる人々に対するハンドブックの作成に着手する予定である。

II. 手続き

1. 異文化接触場面における問題——事例を中心にした検討——

1) 対象

帰国直前の留学生（国立大学で7ヵ月～5年間の留学生活を送る）を中心に11名に面接

を実施した。

2) 方法

「日本滞在中に、日本人から受けた不愉快な体験、日本人の行動で不愉快だと思ったり感じたりした体験の有無」を中心に、異文化体験を自由に日本語で話させた。事前に面接の目的を話し、了解を取った。日本語力の充分でない学生もいたが、日本語で長時間話すことに意欲を持って積極的に話してくれた。(テープレコーダーで記録)

面接時間は30分～1時間半、面接の場所は被面接者が留学生として過ごした大学構内である。原則として1対1の面接形態を取ったが、1事例のみ2名が同席したインタビューとなった。

事例については、日本語能力によって内容の詳しさにばらつきが見られたが、日本人に対する調査事例集作成のための基礎資料ということから、あまり問題にしなかった。

面接調査のインタビューは、日本語教師(非常勤)が担当した。大学の正規のスタッフではない利点を活かして留学生の本音をある程度聞くことが出来た一方で、対象者の授業を一度は担当した影響からか、大学・大学関係者に対する不満は殆ど聞くことが出来なかった。

面接は1996年6月～9月までの4ヵ月間実施した。

3) 事例紹介

(概 略)

<case 1>

ヨーロッパ系/男性/大学生/経済学部/滞在7か月

私が困って「手伝ってください」と頼んだときは日本人は親切だ。しかし、女の人には私が怖いのか今日も「すみません、本屋さんはどこですか」と言ったら逃げて行ってしまったけれど。

しかし、今度私が日本に来るときも保証人が必要だと言われて困った。日本人の友人も一生懸命世話をしてくれたが彼は学生だから保証人にはなれず、やっとK大学で先生に保証人になってもらって日本に来ることができた。が、来るのがとても遅れてしまった。日本はそういうところではとても官僚的だ。

大使館の人はいつも同じ問題で忙しいのであまり親切ではなかった。

私ははじめ大使館で文部省の留学生試験を受けた。99%合格だと言われたが、結果は文部省に拒否された。それからもう一度留学の準備をして、今度に行けることになったのだがそこで初めて保証人が必要だということが分かったのだ。それまでそんなことは全然知らなかった。

<case 2>

アフリカ系/男性/大学院生/工学部/滞在4年

日本人は日本にだけなんでもあると思っている。「あなたの国には車がありますか」「こんなシャツありますか」「自動販売機ありますか」などとくだらないことばかり尋ねる。そして日本人は他の国のことを知らない。「あなたの国には家がありますか」と聞かれたことがある。わたしは「家、ありませんよ。家族は一人に一本ずつ木があります」と言った。そう言われたら日本人も自分で考えるだろう。

信号機の色を「青」だと言う。「どうして？グリーンなのに、なぜブルーというの」聞くと「学校で教わったから」という。どうして自分で考えないんだろう。

<case 3>

アジア系／女性／大学院生／工学部／滞在4年

実験ではなく、実験の道具を作る時など、私たちだったら2日くらいですむところを、日本人は1か月ぐらいかかる。精密に細かいところまでゆるがせにしない。勿論よいことなのだけれど、実験の成果には何の関係もないところも同じようにする。そこまでする必要はないのに、そこまでするかという感じだ。

2. 予備調査

本研究で使用する調査票作成のため、前述した事例をもとに、留学生の発言内容の本質を捉えた15の事例集を作り、専門学校2年生、女子45名を対象に実施した。その際、箕浦(1990)が子供の異文化体験の研究の際に用いた方略、すなわち認知、情動(感情)、行動の3レベルに分ける評定を採用した。留学生と接触する場面では、「留学生の言ってることは理解できるけれども…」あるいは、「留学生には気の毒だけれども…」あるいは「ここは日本なんだから仕方が無い」等々、日本人の側でしばしば繰り返し発言される事実と一致するからである。

具体的には一つの事例ごとに、

「留学生の言うことを理解できる————理解できない」(認知的側面)、

「留学生の発言(内容)に共感する————共感しない」(感情的側面)、

「留学生の発言に登場する日本人と同じような行動をする可能性がある————する可能性がない」(行動的側面)の3レベルで回答を求めた。また、この3レベルでの記入に加え、15の事例全てに、「日本で生活しているあなたは、留学生からの発言や感想にどの様に答えますか？あなた自身が留学生と会話している場面を思い浮かべて、留学生に答える通り具体的に書いてください」という、自由記述の欄を設定した。

3. 本調査

1) 調査票の作成 予備調査において、事例の主旨に誤解を生じる傾向が見られるもの等を改定し、更に1で取り上げた事例の中から新たに付け加えて計20の事例集を作成し、予備調査と同様、3レベルでのチェックを行った。また、20の事例のうち5～6事例については自由記述の欄を設けたが、調査の対象となるグループにより、記述欄を設定する事例は異なっている。事例集、回答用紙は資料1、2の通りである。

2) 調査の実施

留学生と接触の多い、あるいは現在の接触頻度は少ないが、今後関わりを持つ可能性が高いことを期待される人々を対象とした。具体的には、大学生、留学生の指導教官、大学事務職員、ホストファミリーの経験を持つ4群の人々である。

留学生の指導教官は、比較的多くの留学生を受け入れて指導する経験を持つ理系の教官を中心に、また大学事務職員では留学生との接触が極めて多い部局の係を中心に調査を依頼した。ホストファミリーには一部郵送で回答を求めた。

表1 20事例の平均値と標準偏差

	1			2			3			4			5		
	1 認知	2 感情	3 行動	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
平均値 M	1.365	1.514	3.449	1.342	1.465	3.262	1.901	2.221	2.511	1.538	1.714	2.561	1.788	2.032	2.239
標準偏差 S.D.	0.662	0.740	0.733	0.584	0.641	0.818	0.878	0.885	0.960	0.805	0.897	0.956	0.871	0.921	0.910
	6			7			8			9			10		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
M	1.330	1.545	2.949	1.891	2.154	3.094	1.861	2.286	2.167	1.647	1.878	2.377	1.804	2.192	2.199
S.D.	0.597	0.742	0.972	0.904	0.957	0.969	0.919	0.976	0.949	0.808	0.938	0.956	0.858	0.919	0.975
	11			12			13			14			15		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
M	2.604	3.068	1.954	1.526	1.828	1.990	1.619	1.942	2.016	1.455	1.670	2.049	1.285	1.362	1.968
S.D.	1.091	0.900	0.999	0.627	0.748	0.859	0.743	0.854	0.940	0.693	0.839	0.955	0.566	0.595	0.871
	16			17			18			19			20		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
M	1.391	1.567	2.250	1.469	1.701	2.250	1.932	2.277	2.308	1.772	2.225	2.849	2.185	2.414	2.495
S.D.	0.590	0.710	0.815	0.699	0.789	0.902	0.955	1.008	0.985	0.825	0.880	1.077	1.068	1.036	0.954

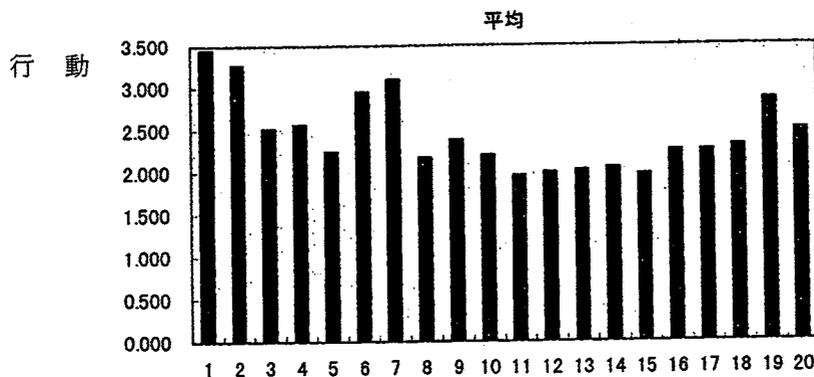
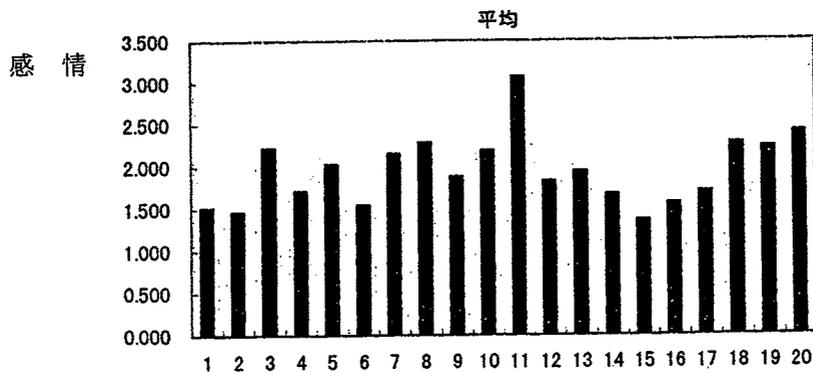
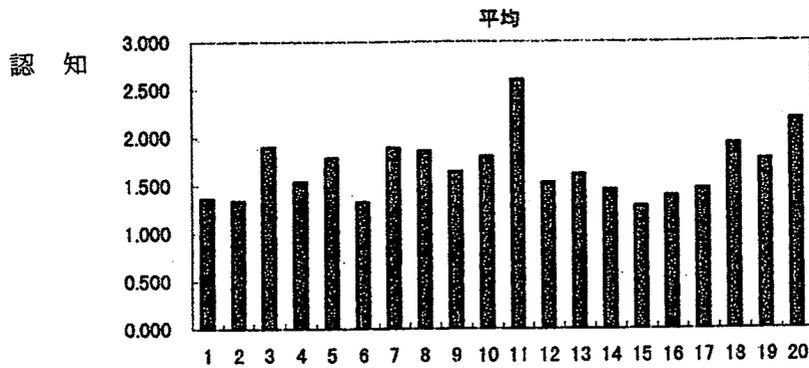


図 各次元（認知・感情・行動）の平均値

調査は、1996年10月～11月に実施した。

III. 結果と考察

1. 回答者のプロフィール

国立大学学部生・大学院生242名、留学生の指導教官23名、大学事務職員34名、ホストファミリー16名の計315名から回答を得た。その内訳は、男性が66.2%、20代が65.0%、外国人との接触経験を持たない者の割合が46.6%となっており、海外留学をはじめ海外で生活した経験のある者は極僅か（それぞれ4.0%、1.6%）である。

2. 分析の方法と全体的な結果

3レベル、各20問についての平均値、標準偏差を表1および図に示す。それに基づき、「理解できる——理解できない」「共感できる——共感できない」「行動する可能性がある——行動する可能性がない」の3次元における組合せ（中央値2.5を基準として、2.4未満／2.5以上の2群に分ける処理）で分類した結果、回答者全体として3パターンが明らかになった。すなわち、<タイプ1, 以下T1>; 「留学生の言うことについて、理解し、共感し、留学生が不愉快と感じる行動はしない」とする型には事例1、事例2などの7事例が含まれる。これに対して、<タイプ2, 以下T2>; 「留学生の言うことについて、理解し、共感するが、留学生が不愉快と感じる行動をする」という型は事例5、事例8など12事例を含む。さらに、<タイプ3, 以下T3>; 「留学生の言うことについて、理解も共感も出来ないし、留学生が不愉快と感じる行動をする」という型は事例11のみであった。（表2参照）

T1は、日本滞在中に留学生が偶然出会った不運な出来事としか言い様がなく、大多数の日本人はそんな行動をとらないと判断されるもの、言わば留学生の個人的な体験の違い（個人差）を表している。それに対して、T2においては、留学生の指摘する内容の理解や共感出来るものの、自分もそのように振る舞うということで、「文化の違い」（文化差）を反映したものといえる。またT3においては、「指摘されてはじめて、それが文化の違いであることが分かった」とされる型であり、T2以上に、深く文化に根差したものといえる。

表2 20事例の分類

	全 体	性 差		学 生 対 成 人	
		男性	女性	学生	成人
Type 1	1, 2, 3, 4, 6, 7, 19	男性	1, 2, 3, 4, 6, 7, 19, 20	学生	1, 2, 3, 7, 20
		女性	1, 2, 3, 4, 6, 7, 9, 19	成人	2, 3, 4, 9, 10, 14, 17, 19
Type 2	5, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 20	男性	3, 5, 9, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18	学生	4, 5, 6, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19
		女性	5, 8, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18	成人	1, 5, 6, 7, 8, 12, 13, 15, 16
Type 3	11	男性	11	学生	11
		女性		成人	
Type 4		男性	8	学生	
		女性	11, 20	成人	11, 18, 20

さらに、各事例に対し3次元における基本構造を検討するために、各次元ごとに主因子解による因子分析を行った。その後共通性を1に設定してVarimax回転を行い、一つの因子のみに因子負荷量・絶対値.40以上であった事例を選択した結果を表3に示す。

認知レベルでは、第1因子として事例16・17・12・19・13に高い因子負荷量を示すもので留学生が日本、日本人の中に溶け込めない内容であることから、「見えない壁」の因子と命名できる。また、第2因子は事例3・10・7を内容とする、日本人が外国人に対してしがちな行動すなわち「対外的接触様式」と言うことができる。感情レベルの第1因子は、性、人種、年齢、国籍、役割による人間関係の持ち方の違いに関するもので「日本人の持つ差別・差異化」、第2因子は公のルールに従う内容である「規範の遵守」とそれぞれ命名した。行動レベルの第1因子は「日本の大学生の行動」で大学の研究室で普通に見られる留学生との交流、会話に関するもの、また第2因子は、留学生が残念に思う、日本人の表面・外面にのみ捕われた行動を表わす「表面的な対人接触」であった。

表3 3レベルの因子分析結果
(Varimax 回転後の因子負荷量)

事例	認 知		感 情		行 動	
	因子No.1	因子No.2	因子No.1	因子No.2	因子No.1	因子No.2
1	0.086057	0.163298	0.074443	-0.02899	0.006585	0.143408
2	0.195683	0.106635	0.183983	0.144012	0.140556	0.090805
3	0.142366	0.595429	0.255345	-0.07408	0.215412	0.481419
4	0.392519	0.319178	0.454262	0.147616	0.284632	0.34675
5	0.154288	0.123372	0.188836	0.427702	0.170833	0.0088
6	0.320579	0.212351	0.230126	-0.01558	0.087199	0.309213
7	0.111831	0.509413	0.13713	0.12152	0.091669	0.554646
8	0.360703	0.280633	0.299261	0.291019	0.006092	0.384115
9	0.279926	0.252	0.275101	0.257787	0.156735	0.15683
10	0.247789	0.538546	0.029307	0.021909	0.481647	0.195447
11	0.204488	0.377197	0.04624	0.181463	0.117832	0.12566
12	0.457387	0.198091	0.329568	0.267422	0.521242	0.088843
13	0.415494	0.279805	0.409223	0.142106	0.585733	0.184696
14	0.318962	0.034541	0.408304	0.347141	0.515123	0.204256
15	0.370273	0.226414	0.497536	0.054011	0.746726	-0.08274
16	0.617524	0.036529	0.400038	0.219661	0.671288	-0.09021
17	0.581016	0.224371	0.590586	0.155274	0.503892	0.38665
18	0.383345	0.125964	0.10915	0.600609	0.06159	0.043795
19	0.419123	0.353065	0.149388	0.162003	0.029942	0.406537
20	0.025439	0.095203	0.056471	0.474028	0.066264	0.006525

3. 性差についての結果

20事例、3レベルで性差による反応の違いを見たのが表2、表4である。全体に女性の回答者が、「理解できる」「共感できる」と答える割合が高く、特に認知レベルでは20事例の全てに対して「理解できる」としている。また、現在の日本の社会における性役割規範を含む事例（8・9・19）に対して、女性よりも男性の回答者が「そうした行動はする可能性がある」としている。

3レベルにおけるパターンでは、T1～T3に加えて、「留学生の言うことを、理解できるが、共感はできないし、留学生が不愉快と感じる行動をとる可能性がある」とする回答<タイプ4、以下T4>が加わり、男性では事例8が、また女性では事例11・20がそれにあたる。

4. 学生と学生以外（成人）の比較についての結果

学生とその他の3グループ（指導教官・事務職員・ホストファミリー）の間の回答の差を表2、表5に示す。行動レベルでは20事例中12事例で有意差が認められ、「留学生が不愉快と感じる行動をする可能性がない」とするのは、学生よりも成人のグループである。さらに、成人のグループでは、20事例の全てに「理解できる」と回答し、したがってT4には、事例11・18・20の3つが入れられる。

学生では、T1に5事例、T2に14事例、T3に1事例が分類されるのに対して、成人では、T1に8事例、T2に9事例、T4に3事例となっている。

表4 平均値における性差

事例 レベル	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
認 知			> ***			> *		> **			> ***				> *			> ***		
感 情			> *					> ***	> *		> ***				> **			> ***		
行 動	> *							< **	< *	> **				> **	> *	> ***				< ***

> ; 男性の数値が大であることを示す (男性>女性)

< ; 女性の数値が大であることを示す (男性<女性)

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

表 5 平均値における学生と成人の比較

事例 レベル	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
認 知			> ***							> **			> **					< **	> *	< *
感 情			> ***		< *					> ***	> *		> ***	< *				> ***	< ***	< ***
行 動	> ***		< ***				< **	< **		< **		< **	< **	< ***		< *	< ***		< **	> **

> ; 学生の数値が大であることを示す (学生>成人)

< ; 成人の数値が大であることを示す (学生<成人)

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

5. 考 察

・各パターンについて

異文化接触の場面では、どこまでが偶然出会った個人に属する問題なのか、それともそうした個人を越えて、その背景となる広く文化全体の問題なのか判別しがたい。留学生が不幸にして遭遇した愉快でない出来事を巡って、それは個人の問題なのか文化の問題なのかによって、その後の対処の仕方が変わってくる。認知・感情・行動という3次元を設定し、そのパターンの組合せを検討することによって、個人に属する問題か文化に属する問題かの手がかりを得た。すなわち、T1は、明らかに個人に属する問題であり、留学生が指摘した事例は、残念としか言い様の無いものである。しかし、それ以外のT2～4はすべて文化の違いに根差したものと考えることができる。

さらに文化的影響力の大きさは、「異なった文化を持つ人々に指摘されるまで気付かないT3」、「理解は出来るが感情的にも行動的にも受入れ難いT4」、「理解も共感もできるが行動は出来ないT2」までの、T3>T4>T2の順と考えることができる。しかし、一口に文化と言っても、性差や立場により変わる部分文化を含んでいることが理解されよう。留学生が指摘する事例に関しては、男性よりも女性が、また留学生と接触の多い部門にいる人々のグループにT3に該当する事例が認められなかった。留学生との交流が期待される学生のグループにおいて、T2やT3が多く見られ、全事例の75%を占めている点は、両者の親密化を促す意味でも、何等かの対応が必要である。

・事例について

指摘されるまで気付かない、もしくは理解は出来ても感情的に受入れ難いT3とT4に分類される事例には、「性役割行動」「自己主張」「家族についての考え方」「奨学金(金銭)」がある。分業型の日本の「性役割行動」に対する留学生からの疑問には、男性の感情レベルでの反発がみられる。また、「家族」「奨学金」について、成人ではいずれもT4であったが、学生ではそれぞれT2、T1としており、この2項目に対しては若い世代を中心に新たな態度が形成される可能性を示唆しているものと考えられる。(表6参照)

表 6 自由記述欄の内容

事例	記 述 内 容
性 役 割	<p>8) について</p> <p>〈男性〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • 仕事帰りに飲みに行くことが一般に大多数(学生は除く)なので、ごく自然で特に男女差別だとは思わない。 <p>〈女性1〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • この件に関しては私も非常に反感を持っています。例えば職場を変わって来た人の歓迎会など、家族を含めて招待すべきです。その人だけでなく家族あつての個人です。 <p>〈女性2〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • 女性社員が上司と一緒に飲みに行く(つきあう)のが常識のようなことで、いわゆる上下(先輩後輩)関係の差が激しすぎる。でもこれが日本文化だ!私も共感する。理解できる。自分も嫌!(慣れたけど)仕方がない。
行 動 (8) (9)	<p>9) について</p> <p>〈男性1〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • 前記(8)とともに、話しがおおげさである。ストレス解消の手段に過ぎないと思うのだが。 <p>〈男性2〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • 意見については同感である。ただし、仕事も重要であり、両立するように努力する。両立できないときには家庭を選択する。 <p>〈女性〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • 私もその意見にとっても共感を覚えます。日本の男性はもっと家庭に目を向けるべきだと思います。
家 族 に つ い て の 考 え 方 (18)	<p>(成人)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 留学の最も重要な目的は他国で学ぶことであり、気持ちは理解できるが、最大限勉強するよう努力すべきである。厳しい意見かとは思いますが、家族と暮らすことを最重要視するのであれば留学すべきではない。あるいは家族を連れて来日すべきである。 • その国その国の民族性の違いを理解する必要がある(両方とも)。自分でなんとかするという考え方はどうにもならないときのことを考えると安値であると思われる。 • 日本人は家族より友人を大切に思う傾向がある。大事なことだが家族に対する思いやりがもう少しあってもいいと思う。
奨 学 金 (20)	<p>(成人)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 噂は責任のある信頼できる情報ではない。奨学金を提供している団体は様々で判断基準も様々である。採用されるか否かも不運がある。奨学金を受けるのは留学生の権利ではなく、提供団体の好意善意である。 • 制度が不完全であるのは理解できるが、その下で我々も働いており、制度改革まで我々の義務ではない。日本の金を当てにしている自分は恥ないのか。 • 成績がよくても面接はどうだった?面接が大切だ!(上手な日本語もとても重要だ!)人脈が必要かもしれない!そうしたらうまくいく?(西洋人であれば!?という話も聞いたことがある) • 事実関係や理由を調べるとともに、Pさんが「自分より劣る」と決めつけていることについて、事実に基づいているわけではないことを指摘する。後に、分かったことを伝え、Pさんと一緒に納得する。理由がないなら一緒に変だと考え、担当部署に文句を言う。 • 本人が「おかしい」と考えることは肯定も否定もできない。当人でなければ分からないことである。 • 奨学金制度がよくわからないがかわいそう!

さらに、事例11について、我々の文化を考えた時、自己を主張することは多くの場合好まれる行為ではない事実と一致する。自己を主張して軋轢を生ずるよりは、むしろ自己を抑制して円滑な対人関係を築こうとする日本式なやり方と、自己を主張することからはじまる文化の違いを明確にしている。日本人同志でも、自分の考えを述べるだけで相手に対する攻撃と誤解される事実が存在する状況にあって、「自分の考えをハッキリ伝える」ことは大切なこととして教育されて来た留学生にとっては、混乱や葛藤、不安や戸惑いを生ずることになる。近年、「アサーション・トレーニング」や「ディベート」など、自分の考えを明確にすることの必要性ならびに訓練が国内で盛んに行われているが、裏を返せばそれだけ我々の文化が、自己を抑制することに極めて強い拘束力を持っているものであることが理解されよう。

参考文献

- ・ 箕浦康子, 1990, 文化の中の子ども, 東京大学出版会
- ・ 異文化間教育学会編集, 1991, 在日留学生と異文化接触, アカデミア出版
- ・ 菊池章夫・堀毛一也編著, 1994, 社会的スキルの心理学, 川島書店
- ・ 渡辺文夫編, 1995, 異文化接触の心理学, 川島書店
- ・ 異文化間教育学会編集, 1996, 異文化間教育学の可能性, アカデミア出版

資料1 調査事例集

次の文章は、日本で学ぶ留学生が、滞在中に日本で経験した「不愉快な」あるいは「意外な感じを受けた」できごとについて記述したものです。それぞれの内容について、皆さんはどう思われますか。自分の受け止め方として一番近いものの番号を○でかこんでください。

さらに、留学生がこのような発言や問いかけをあなたに向かってした場合、どのように答えますか。自由に書いてください。

- 1) Aさん(ヨーロッパ出身・男性)が、日本人の異性の友達と九州地方を旅行した時のことです。朝食堂ではほかのグループの日本人旅行者と一緒にになりました。その人達はAさんたちのほうを見ながら小声で話していました。話の様子では、Aさんをアメリカ人、女友達をフィリピン人と思っているらしく、「あの人たちはエイズよ」と言っているのが聞こえました。その人たちは、あとでAさんが日本語が話せることや、女友達が日本人であることがわかると、自分たちの話していたことがわかってしまったのではないかとあわてていました。

外国人と一緒にいると日本人ではないとか、外国人ならエイズだろうなどと言われたことや、留学生の友人からも似たような経験をいろいろ聞いて、Aさんはどうして日本人はこのように差別的な考え方をするのだろうと思いました。
- 2) Bさん(ヨーロッパ出身・男性)は、東京で、今でも思い出すと不愉快になる経験をしました。ある夜のことです。駅に降りたら雨が降っていたので、Bさんはタクシーに乗ろうと、タクシーのりばに並んで待っていました。いよいよBさんが乗る番になったとき、向こうから来たタクシーが5メートルくらい手前で止まりました。そして運転手はなにやらBさんのほうを見ている様子でしたが、そのまま誰も乗せずにと走り去ってしまったのです。

雨は降っているし、うしろにはたくさん日本人がいるし、乗車拒否の理由もわからず、Bさんは本当にはらがたちました。
- 3) Cさん(香港出身・女性)は、あるパーティーで日本人に紹介されました。その人はCさんが香港から来たとわかるといきなり「あなたは英語ができますか」と聞きました。Cさんが「できる」と答えると、「じゃ、教えて下さい」と言いました。Cさんはそれを聞いて、まるで試験をされているみたいでとても嫌な気分になりました。

Cさんには、この人が純粋に友好を求めてきたというより、外国人と友達になれば英語を教えてもらえるメリットがあると思って近づいて来たような感じがしたからです。Cさんにとっては、友達になりたいという気持ちが大事なことで、友達になるためには英語が話せるかどうかはいつでもよいことだと思われたのです。
- 4) また、Cさんは、パーティーなどで、西洋人とアジア人がいると、日本人の多くは西洋人とばかり話しアジア人とはほとんど話さないことに気がつきました。日本人がみんなそうだというわけではないのですが、同じアジア人としてCさんはあまりいい気持ちはしませんでした。日本人は西洋人に本当にヨワイと思いました。
- 5) Dさん(ヨーロッパ出身・男性)は、日本人は親切なのかどうか、ときどきわからなくなります。道を聞いた時も親切に教えてくれるし、店の人も親切です。市役所の人もとても親切だったので驚いたくらいです。Dさんの国では、市役所に行ってもDさんがここには邪魔なのかと思うくらい不親切だからです。しかし、これが、公の規則や法律になると驚くほど官僚的というか、融通がきかなくなります。役所などでも、理由も説明もなしに、申請したことについて許可しないといわれることもあります。事情を考慮するという柔軟性がみられません。Dさんには、文句も言わず黙って言われた通りにしている日本人が不思議に思われます。

- 6) Eさん(アジア出身・男性)は初めてホームステイをして、珍しいことや楽しいことをいろいろ体験して、よい経験だったと思っています。ただ、困ったこともありました。一つは温泉に連れて行かれ、一緒に入ろうと言われたことです。Eさんの国では入浴の習慣もありませんし、まして、他人と一緒に裸になって風呂に入るという習慣はありません。始めは抵抗のあったEさんですが、長い滞日生活でだんだん慣れて来ました。しかし、Eさんには、宗教上のタブーで口にすることのできない食べ物があります。そのような食べ物を、親切から「まあ、食べてごらんなさい」「少しなら大丈夫でしょう」と無理にすすめられるのは困りました。Eさんにとって宗教上のタブーは絶対破ってはならないものだからです。
- 7) Fさん(ヨーロッパ出身・男性)は、日本人があまり道徳的ではないことに驚きました。時々片町の飲み屋に行くのですが、そこでのサラリーマンやOLの会話には仰天させられます。まるで、テレビドラマの中の会話のように、不倫や満員の乗り物での痴漢行為の話が交わされています。Fさんの友人(ヨーロッパ出身・男性)が、大学構内のバス停でバスを待っていると、知らない女子学生らしい人に「今晚食事につきあってください」と誘われて驚いたという話もあります(彼は興味を持ってついて行き、一緒に食事をしました)。特に、痴漢行為はFさんの国では破廉恥な犯罪です。皆の話しているのを聞くと、日本では痴漢行為は犯罪ではないのかと錯覚を覚えるほどです。
- 8) また、Fさんは、片町で飲んでいるサラリーマンは家庭があり、OLは独身が多いということに気がつきました。日本では、結婚した女性は、夜は家庭で子供たちと一家の主人の帰りを待っているのが、一般的のようです。これを見ても日本では男女平等ではないと思いました。
- 9) また、Fさんは、父親がこのように家を空けている時間が多い家庭というのは子供にとっても不幸なことだと思いました。子供は、モデルにすべき大人の男性が身の回りにいないことにより、大人の男性として、身につけていなければならない態度やふるまい、考え方などを学ぶチャンスを与えられないまま大人になってしまいます。これも大きな社会問題だと思いました。
- 10) Gさん(アジア出身・女性)は、日本人の女子学生と友達になりました。彼女はGさんの国に行きたいと言いました。自分の国に興味を持ってくれたと、Gさんは感激して、いろいろ話したのですが、そのうちおかしなことに気がつきました。その人はGさんの国について何も知らないのです。Gさんの国は複雑な人種構成なので、特殊な人種政策をとっていることで有名なのですが、そのことについても全く知りませんでした。Gさんには、ある国に行きたいという人が、その国について何も知らないということは理解できませんでした。
- 11) Hさん(ヨーロッパ出身・男性)は、初めて日本の農家にホームステイしましたが、そこで思わぬ事故を起こしてしまいました。Hさんが電動式の草刈り機で草を刈っている時に、ホームステイ先の人がHさんに後ろから声をかけました。声をかけられたHさんは、持っている草刈り機ごと後ろを振り返り、その拍子に草刈り機で相手の脛に傷をつけてしまいました。すぐ病院に運ばれ、8針縫う大怪我だったそうです。Hさんは、何回も「すみません。ごめんなさい」と謝りました。もちろん相手は「そんなに謝らなくてもいいよ」と言ってくれましたが、相手の人は自分よりずっと経験があるのだから、声をかける時にもっと注意すべきではなかったかという思いを禁じ得ませんでした。

- 12) Iさん（ヨーロッパ出身・男性）は、日本の大学に来たら早速自分の母語を専攻している学生のいる研究室に出掛けていきました。友達がほしかったからです。Iさんはこちらから積極的に、語学的に難しそうなところは説明したりして、友達を作る努力をしました。しかし、Iさんがいくら「電話をかけてください」といっても、「遊びに来てください」といっても、「うん、うん」と生返事をするだけで、相手はこちらの呼び掛けに応じようとしませんでした。もしかしたら恥ずかしかったのかもしれないとも思いました。たしかにその場では楽しかったのですが、そこから踏み込んで喫茶店に行って、議論を戦わすといったつきあいには発展しないのです。そのうちIさんもつまらなくなって誘うのをやめてしまいました。
- 13) Jさん（ヨーロッパ出身・男性）は、自国の大学を卒業してから、日本の大学院で勉強しています。最近Jさんは自分がなんだかとても年をとったような気がしてなりません。日本人学生と話をしてもちっとも話が合わないのです。日本人学生の話題が子供っぽく感じられて、心から楽しむことができません。日本人は年齢を大事に考えるから、Jさんを年上と考えて遠慮した言い方になっているのかも思うのですが、スポーツや芸能人の話、車やパソコンのような電化製品の話ばかりではなく、社会全体についての話がしたいのですが、そういう話題にはあまり食い付いてきません。もっと深いところでのお互いの理解とでもいったものを望んでいるのですが。
- 14) Kさん（南米出身・女性）は、日本の大学に来て、日本の学生は、先生の言うことにいつも「はい、はい、はい」としか言わないのが不思議です。Kさんの国では先生の言ったことでもおかしければ学生はすぐそのことを指摘します。日本に来る前に、日系人の年寄りに、日本ではどんな先生でも先生であれば尊敬されると聞いて来ましたが、Kさんの国では尊敬される先生はそれだけの理由があって尊敬されるので、先生だからという理由だけでは尊敬されません。
- 15) また、Kさんは、日本人学生のKさんの国に対する知識の貧弱なのにも驚きました。ジャングルがあって、そこには土着民がいてといった話題しか挙がらずがっかりしました。Kさんの国にも、もちろん近代的な高層ビルの建ち並ぶ都会もあります。しかし話の中にはそういうことは出てきません。学校でもきっと教わらなかったんだろうと考えました。しかしKさんは、日本人の学生と同じことが自分たちにも言えるのではないかと考えました。自分たちもアフリカ大陸に似たような思い込みがあると。そこでKさんは、日本人学生が知らないことを責めるだけでなく、自分たちの国について知らせていかなければならないと思い初めています。
- 16) Lさん（ヨーロッパ出身・男性）は、日本に来て、日本人と友達になりたいという気持ちを満足することができず、寂しい気持ちのまま、もう国に帰らなければなりません。結局日本人の家庭を訪問したのも、ホームステイした農家が一軒だけ、友達を作ったと思っていつも最初だけのつきあいで終わってしまう感じで、絶えず友達を作る努力をし続けていたような気がして、最後には少し疲れました。Lさんは、日本人は自分たちを中に迎え入れてくれなかったと思いました。今回の留学では、日本人の生活を外から見ているだけだったので、もう一度日本に来て日本人についてもっと深く知りたいと思っています。

- 17) Mさん(北米出身・女性)は、金髪に青い目、白い肌の、日本人が考える典型的な西洋人です。その上日本人好みの小柄で、「郷に入っては郷に従え」とばかり、誰にでも会えばにこにこ、自分のまわりの人にはあいそよく振舞いました。それが日本で生活する上では、大切なことと教わったからです。しかし、このような態度をとったことが果たしてよかったのかどうか、時々わからなくなります。
- Mさんは、日本文化を研究するために日本に来たのですが、日本人との会話は「どこから来ましたか」「日本語が上手ですね」そして「きれい」「かわいい」で終わります。Mさんは自分の研究していることについていろいろ話してもらいたいのですが特に男の人たちはまったくといっていいほど興味を示さず、Mさんが「かわいい」とばかり話題にしたがるので、Mさんはうんざりしています。
- 18) Nさん(アラブ諸国出身・男性)は、日本に来て初めての夏休みを前に国に帰ることにしました。まだ夏休みの前で、受けなければならない授業や講義がたくさん残っていましたが、ややホームシック気味になっていたNさんは、とにかく早く帰りたかったのです。ところが、そのことを指導教官に言いに行くと、「まだ夏休みにならないのに、なぜ帰るのですか」と聞かれました。まだ日本語が上手ではなかったNさんが「お母さん、お父さんに会いたいよ」と答えると、先生は驚いたようで「Nさん、あなたは何才ですか」と聞き、Nさんが「26才」と答え、「立派なひげも生やした大人でしょう。もう少し我慢できないのですか」と言いました(Nさんは、自国の習慣で、一人前の男性である印に大変立派なひげを生やしていました)。
- しかし、Nさんの考えは違います。Nさんの国では、家族は何より、自分より大切なものです。Nさんが家族に会いたいと思う以上に、両親はNさんのことを心配し会いたいと思っています。そんな両親の気持ちを考えたら、少しぐらい授業に出なくても、あとで自分でなんとかすればいいことなので、一刻も早く両親に顔を見せてやりたいし、自分も両親に会いたいと、思ったのです。
- 19) Oさん(アジア出身・女性)は、来たばかりの頃は、賄い付きの下宿に住んでいました。そこで、Oさんは信じられない光景に出会ったのです。そこにはいろいろな下宿人がいましたが、中に30才位の日本人の男性がいました。その人は、夏になると、パンツ一つの裸で廊下を歩いたり、食堂で食事をしたりしています。Oさんの国では儒教精神がまだ生きていて、異性の前に出るときは、服装を整えるのは勿論、靴下もはかなければ叱られました。びっくりしたOさんはそのことを、電話で国のお母さんに訴えたとお母さんは「そんな下宿はすぐ変わったほうがいいよ」と言いました。
- Oさんは、日本人はお風呂に入るときはしっかりと身体を覆うのに、ふだんの生活では非常に開放的なので、なんだか奇妙な感じがしています。
- 20) Pさん(アジア出身・男性)は、日本に来る前、奨学金は成績がよければ誰でも貰えると、うわさで聞いて来ました。ですからPさんも奨学金をあてにして日本に来ました。日本来て、何度か奨学金の申請をしましたが、一度も貰ったことがありません。ところが、Pさんよりも成績の悪そうな(と、Pさんが思っている)留学生たちが奨学生になっているのに気がつきました。日本の奨学生の制度はどうなっているのか、担当教官や指導教官に何回説明を聞いても納得できません。Pさんは次第に腹が立ってきました。他の日本人にそのことを話しても、ただPさんの話を聞くか、「頑張って勉強して下さいね」と言うばかりです。Pさんは自分に奨学金を支給しない日本の制度は「おかしい!」と考えるようになりました。

資料2 回答用紙

1

①留学生の言うことを

	どちらかといえば	どちらかといえば		
理解できる	理解できる	理解できない	理解できない	

1	2	3	4	

②留学生の発言（内容）に

	どちらかといえば	どちらかといえば		
共感する	共感する	共感しない	共感しない	

1	2	3	4	

③留学生の発言に登場する
日本人と同じ様な行動を

	どちらかといえば	どちらかといえば		
する可能性がある	する可能性がある	する可能性がない	する可能性がない	

1	2	3	4	

2

①留学生の言うことを

	どちらかといえば	どちらかといえば		
理解できる	理解できる	理解できない	理解できない	

1	2	3	4	

②留学生の発言（内容）に

	どちらかといえば	どちらかといえば		
共感する	共感する	共感しない	共感しない	

1	2	3	4	

③留学生の発言に登場する
日本人と同じ様な行動を

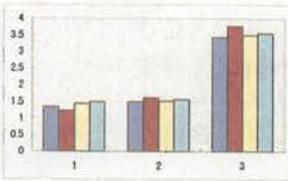
	どちらかといえば	どちらかといえば		
する可能性がある	する可能性がある	する可能性がない	する可能性がない	

1	2	3	4	

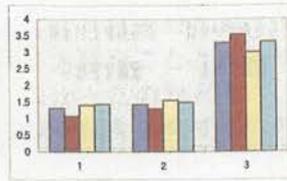
Appendix1；各事例に対する三次元／グループ別平均値

事例

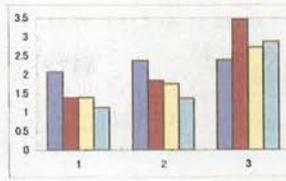
1



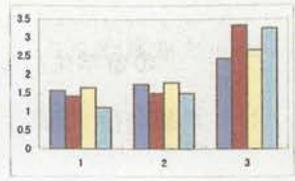
2



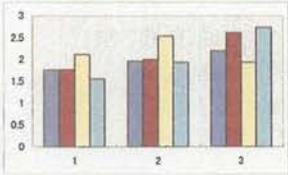
3



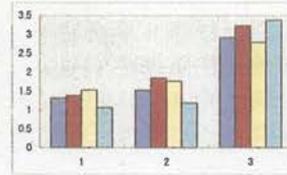
4



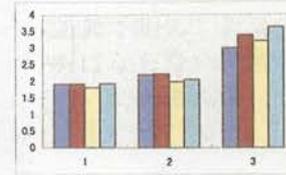
5



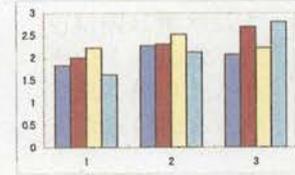
6



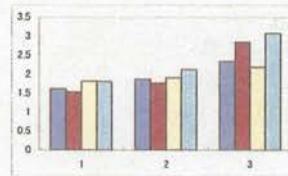
7



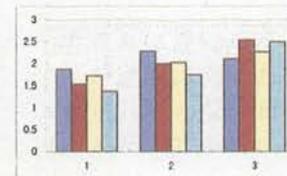
8



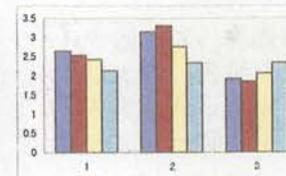
9



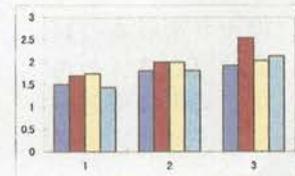
10



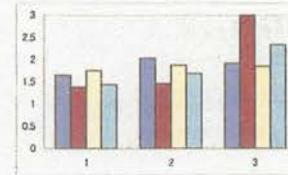
11



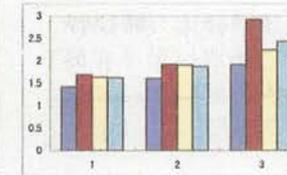
12



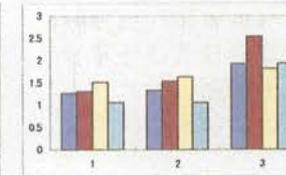
13



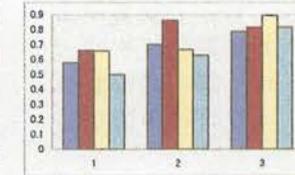
14



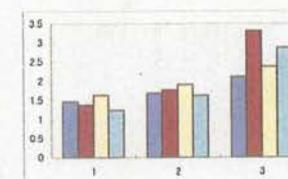
15



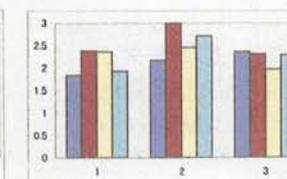
16



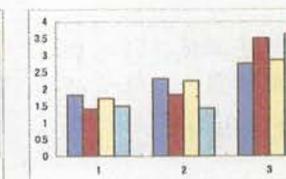
17



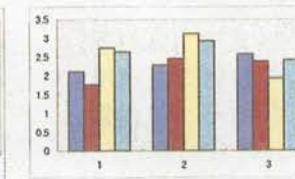
18



19



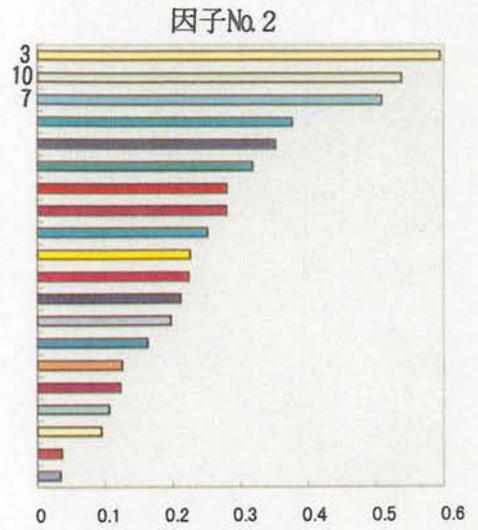
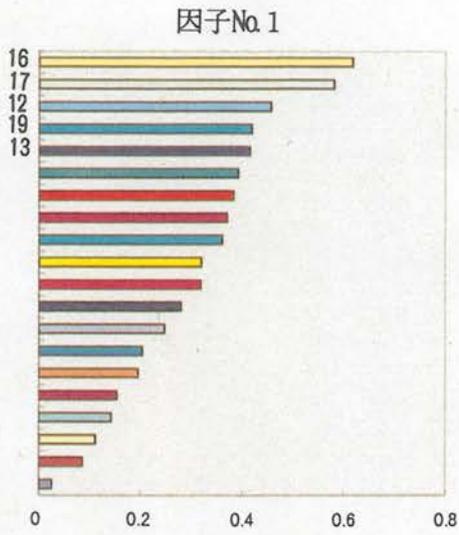
20



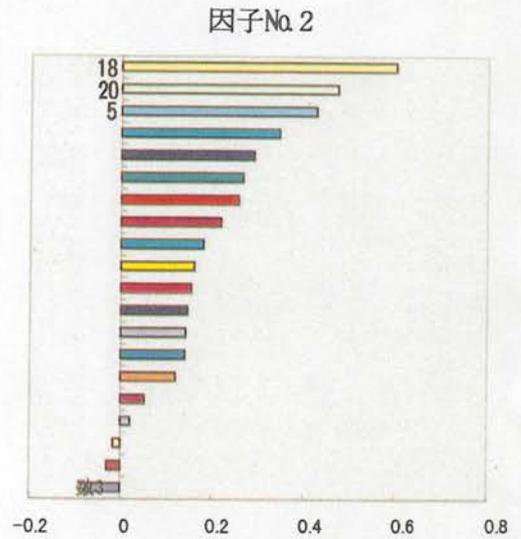
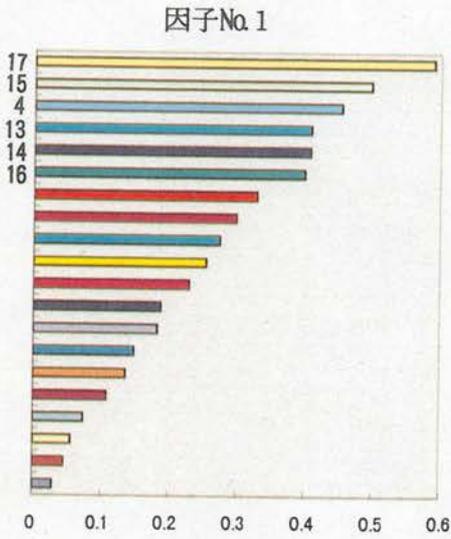
- 1. 認 知
- 2. 感 情
- 3. 行 動

Appendix2；各次元ごとの因子分析結果

〈認 知〉



〈感 情〉



〈行 動〉

